

第27图 H12号住居址(3)

第13表 H12号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存色・色調	胎土・特徴	出土位地
1	須恵器 杯	(10.6) — (4.1)	内 ロクロナア 外 ロクロナア→底部回転ヘラケズリ	口縁部1/5残存 内 N6/0 (灰) 外 N5/0 (灰) 断 5YR7/1 (明赤灰)	0.5mmの石英・長石粒子を少量含む。 外面に、自然釉付着。	II区、III区 IV区、P4
2	須恵器 皿	(9.4) — (2.2)	内 ロクロナア 外 ロクロナア→口縁・胴部に輪指波状文を施す。	口縁部、一部残存 内 5Y5/1 (灰) 外 N6/0 (灰) 断 2.5YR7/2 (明赤灰)	0.5mmの石英・長石粒子を少量含む。 内面に、自然釉付着。	III区
3	土師器 杯	(10.2) — (4.3)	内 横位ミガキ→暗文状ミガキ 外 横位ミガキ→暗文状ミガキ	口縁部1/4残存 内 10R6/6 (赤橙) 外 10R6/6 (赤橙)	きめ細かい。	II区、III区
4	土師器 杯	(15.6) — (4.1)	内 横ナア 外 口縁部横ナア→体部ヘラケズリ	口縁部1/6残存 内 2.5YR7/6 (橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	きめ細かい。 1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子を含む。	II区
5	土師器 杯	15.4 — 6.4	内 口縁部横ナア→底部ヘラナア→ミガキ 外 口縁部横ナア・底部ナア→ミガキ	口縁部3/4残存 内 2.5YR7/4 (淡赤橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	きめ細かい。 0.5mmの黒色粒子少量含む。	II区 II区1層
6	土師器 杯	(13.0) — 5.0	内 口縁部横ナア・底部ヘラナア 外 口縁部横ナア・底部ヘラケズリ	口縁部3/4残存 内 10R6/6 (赤橙) 外 10R6/6 (赤橙)	きめ細かい。 1mmの石英・長石粒子少量含む。	II区 F16P5
7	土師器 杯	14.8 — 4.7	内 口縁部横ナア→みこみ部ナア→放射状暗文 外 口縁部横ナア→底部ヘラケズリ	口縁部7/8残存 内 2.5YR7/6 (橙) 外 2.5YR7/6 (橙)	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子、黒色粒子を含む。	II区1層
8	土師器 杯	(12.6) — 4.8	内 口縁部横ナア→底部ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/5残存 内 7.5YR8/3 (淡黄橙) 外 7.5YR8/3 (淡黄橙)	きめ細かい。 0.5mmの黒色粒子、石英・長石粒子少量含む。	III区
9	土師器 杯	(11.4) — (5.0)	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/4残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 7.5YR8/4 (淡黄橙)	きめ細かい。 0.5mm以下の石英・長石粒子少量含む。	I区
10	土師器 杯	(13.5) — 5.0	内 みこみ部ナア→口縁部横ナア→放射状暗文 外 口縁部横ナア→底部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 2.5YR7/4 (淡赤橙) 外 2.5YR7/6 (橙)	1~2mmの赤色粒子、黒色粒子を含む。	II区、検出
11	土師器 杯	(13.6) — 5.0	内 口縁部横ナア→みこみ部ナア→暗文(放射・らせん) 外 口縁部横ナア→底部ヘラケズリ→部分的にミガキ	口縁部1/5残存 内 10R6/6 (赤橙) 外 2.5YR6/6 (橙)	きめ細かい。 1mmの黒色粒子、石英・長石粒子を含む。	III区
12	土師器 杯	(11.4) — (5.5)	内 暗文状ミガキ→(黒色処理?) 外 口縁部横ナア→体部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 7.5YR5/1 (褐灰) 外 7.5YR7/3 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子多く含む。	II区1層
13	土師器 杯	(12.7) — 4.5	内 口縁部横ナア→みこみ部ナア→放射状暗文 外 口縁部横ナア→底部ミガキ	口縁部1/8残存 内 7.5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR4/1 (褐灰) 外 10R6/6 (赤橙)	きめ細かい。	I区 II区1層
14	土師器 杯	(13.2) — (2.4)	内 横ナア→放射状暗文 外 横ナア→口縁下部ヘラケズリ	口縁部1/7残存 内 2.5YR6/6 (橙) 外 7.5YR8/3 (淡黄橙)	緻密。	II区
15	土師器 高杯	(14.6) 13.3 12.1	内 杯部 ミガキ 胴部 脚部横ナア→脚柱部ヘラケズリ 外 ホゾの部分指を指で丁寧にナデる 外 ミガキ	口縁部1/3残存・底部完形 内 10YR8/2 (灰白) 外 10YR8/3 (淡黄橙)	0.5mmの石英・長石粒子、黒色粒子を少量含む。	
16	土師器 高杯	— (8.2)	内 杯部 ミガキ 脚部 脚柱部ヘラケズリ→ホゾの部分 をナデで貼り付ける・船部ハケナア→横ナア (ササラ状工具使用) 外 杯部 ハケナア (ササラ状工具使用) 脚部 ミガキ	底縁1/4残存 内 2.5YR7/8 (橙) 外 2.5YR7/6 (橙) 断 7.5Y6/1 (灰)	きめ細かい。 0.5mmの赤色粒子を少量含む。	II区
17	土師器 高杯	— (7.9)	内 杯部 ミガキ 脚部 脚柱部横ナア→ナア 外 杯部 ヘラナア 脚部 脚柱部ナア・船部横ナア→脚柱部に縦位ミガキ	脚柱部のみ残存 内 2.5YR7/6 (橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙) 外 2.5YR7/6 (橙) 外 5YR8/3 (淡橙) 断 N7/0 (灰白)	きめ細かい。 1mm以下の黒色粒子少量含む。	II区 II区1層
18	土師器 高杯	(16.2) — (5.4)	内 横ナア→放射状暗文 外 横ナア→放射状暗文	口縁部1/8残存 内 10R5/3 (赤褐) 外 10R5/3 (赤褐) 外 5YR7/3 (にぶい橙) 断 7.5YR7/1 (明黄灰)	きめ細かい。 1mmの赤色粒子少量含む。 19と同器体か。	検出

第13表 H12号住居址出土遺物一覧表

19	土師器 高杯	— — (7.1)	内 杯部 ナデ(ササ状工具使用) 胴部 胸部横ナデ・胸注部ヘラケズリ 外 胸注部ナデ・胸部横ナデ→胸注部に接 ミガキ	胸注部のみ残存 内 2.5YR6/4 (にぶい橙) 外 5YR8/4 (淡橙) 5YR6/4 (にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子、黒色粒 子含む。 18と同個体か。	Ⅱ区、Ⅲ区 P 2
20	土師器 高杯	(30.0) — (3.0)	内 横ナデ→放射状罫文 外 口縁部横ナデ	口縁部1/4残存 内 10R8/6 (赤橙) 外 10R5/6 (赤橙)	1mm以下の石英・長石粒子含む。	Ⅲ区
21	土師器 鉢	(11.6) — (7.2)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ→端文状 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ→胴部ミガキ	口縁部1/2残存 内 10YR2/1 (黒) 外 5YR6/3 (にぶい橙)	きめ細かい。 0.5mm以下の石英・長石粒子を 少量含む。	Ⅰ区 F16P 3
22	土師器 鉢	(13.0) — (7.0)	内 口縁部横ナデ→一部ミガキ・胴部ナデ→ 端文状ミガキ 外 口縁部横ナデ→ミガキ・胴部ヘラケズリ →ミガキ	口縁部1/6残存 内 2.5YR7/6 (橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	1mm以下の石英・長石粒子、赤 色粒子含む。	検出 M3 検出
23	土師器 鉢	(13.4) — (8.0)	内 横ナデ→胴部に端文状ミガキ 外 口縁部横ナデ・胴部ヘラケズリ→部分 にミガキ	口縁部1/4残存 内 2.5YR7/4 (淡赤橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	0.5mm以下の黒色粒子を含む。	Ⅰ区、Ⅳ区 検出
24	土師器 鉢	(13.6) — (6.7)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ナデ	口縁部1/2残存 内 5YR8/4 (淡橙) 7.5YR7/2 (明褐灰) 外 5YR8/4 (淡橙) 7.5YR7/2 (明褐灰)	0.5mmの石英・長石粒子、黒色 粒子を含む。 小石を含む。 歪みあり。	Ⅱ区 Ⅱ区1層
25	土師器 鉢	12.2 — (6.8)	内 口縁部横ナデ→底部ヘラナデ(→黒色処 理?) 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケナデ→底部 ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 N4/1 (灰) 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	0.5mm以下の石英・長石粒子、 黒色粒子を少量含む。	Ⅱ区 Ⅱ区1層
26	土師器 鉢	(12.0) — (3.3)	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/5残存 内 7.5YR8/3 (浅黄橙) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子、赤 色粒子、黒色粒子含む。	Ⅲ区1層
27	土師器 小型壺	(12.5) — (4.0)	内 横ナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ	口縁部1/4残存 内 5YR8/4 (淡橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒 色粒子、赤色粒子含む。	Ⅲ区
28	土師器 小型壺	(10.8) — (4.8)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部3/4残存 内 2.5YR4/1 (赤灰) 外 2.5YR6/3 (にぶい橙)	きめ細かい。1mm以下の石英・ 長石粒子含む。 外面磨蝕。	Ⅰ区、検出
29	土師器 小型壺	— (7.3) (6.9)	内 ヘラナデ 外 ヘラケズリ	底部3/4残存 内 5YR6/2 (灰褐) 外 5YR5/1 (褐灰)	きめ粗い。 2mm以下の石英・長石粒子含む。	Ⅳ区、検出
30	土師器 小型壺	17.8 6.0 17.3	内 口縁部横ナデ・胴→底部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ・胴部ヘラナデ・底部ヘラ ケズリ	口縁部・底部完形 内 10YR7/3 (にぶい黄橙) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	きめ細かい。1mm以下の石英・ 長石粒子、黒色粒子、赤色粒子 を少量含む。	Ⅱ区 Ⅱ区1層 Ⅲ区
31	土師器 壺	(16.1) — (6.1)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/6残存 内 7.5YR5/1 (褐灰) 外 5YR8/4 (淡橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒 色粒子含む。	Ⅲ区
32	土師器 鉢	(17.0) — (7.8)	内 口縁部横ナデ→胴部ハケ状工具による ナデ→ミガキ 外 口縁部横ナデ・胴部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部1/4残存 内 10R8/6 (赤橙) 外 2.5YR6/6 (橙) 5YR7/4 (にぶい橙)	きめ細かい。 0.5mm以下の石英・長石粒子含 む。	Ⅱ区
33	土師器 壺	(18.0) — (9.5)	内 口縁部横ナデ→ミガキ・胴部ナデ・胴部 ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→ミガキ・胴部ミガキ	口縁部1/6残存 内 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙) 2.5YR6/6 (橙)	きめ細かい。 1mm以下の黒色粒子、石英・長 石粒子を少量含む。	Ⅱ区、検出
34	土師器 壺	(19.4) — (5.4)	内 横ナデ→胴部にハケナデ 外 口縁部横ナデ	口縁部1/4残存 内 10YR8/3 (浅黄橙) 外 10YR8/3 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒 色粒子、赤色粒子を少量含む。	Ⅱ区、Ⅲ区
35	土師器 壺	— 7.6 (2.0)	内 ミガキ 外 ナデ・底部ヘラケズリ	底部完形 内 7.5YR7/2 (明褐灰) 外 7.5YR7/3 (にぶい橙)	1mm以下の黒色粒子、石英・長 石粒子含む。	検出
36	土師器 壺	— 7.4 (1.7)	内 ハケナデ 外 胴部ナデ・底部ヘラケズリ	底部完形 内 10YR8/3 (浅黄橙) 外 10YR8/3 (浅黄橙)	1mm以下の黒色粒子、石英・長 石粒子、赤色粒子含む。内面底 部に赤色顔料少量付着。	検出
37	土師器 壺	— (7.0) (2.8)	内 ハケナデ 外 ナデ	底部1/2残存 内 7.5YR8/3 (浅黄橙) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子少量 含む。	検出

第13表 H12号住居址出土遺物一覧表

38	土師器 甕	— (7.2) (3.5)	内 ハケナデ→ナデ 外 胴部ヘラケズリ→一部ミガキ・底部ヘラケズリ	底部1/4残存 内 7.5YR8/4 (浅黄橙) 7.5YR6/2 (灰濁) 外 7.5YR8/4 (浅黄橙) 7.5YR6/2 (灰濁)	0.5mm以下の石英・長石粒子少量含む。 小石を含む。	Ⅱ区1層	
39	土師器 甕	— (5.6) (2.1)	内 ヘラナデ 外 胴・底部ナデ	底部完形 内 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	0.5mmの石英・長石粒子、黒色粒子を少量含む。	検出	
40	土師器 甕	— 8.3 (4.8)	内 ヘラナデ 外 胴部ヘラケズリ・ヘラナデ→ミガキ・底部ヘラケズリ	底部4/5残存 内 7.5YR4/1 (濁灰) 7.5YR6/4 (にぶい橙) 外 2.5YR6/4 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子を含む。	Ⅱ区 Ⅲ区1層	
41	土師器 甕	(18.3) (7.3) (25.2)	内 口縁部横ナデ・胴部ヘラナデ→ナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ→ナデ・底部ナデ	口縁部1/2、底部2/3残存 内 10YR8/3 (浅黄橙) 外 10YR8/3 (浅黄橙)	きめ細かい。1~2mmの赤色粒子、1mmの石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	F16P3 検出	
42	土師器 甕	(15.8) — (8.6)	内 口縁部横ナデ→胴部ナデ・ハケナデ 外 胴部ナデ→口縁部横ナデ	口縁部1/4残存 内 10YR7/3 (にぶい黄橙) 外 5YR7/4 (淡赤橙)	1~2mmの石英・長石粒子多く含む。1mm以下の黒色粒子少し含む。磨耗している。	Ⅰ区、Ⅱ区 Ⅲ区	
43	土師器 甕	(15.2) — (6.3)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ナデ	口縁部1/2残存 内 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	1mmの石英・長石粒子、黒色粒子を少量含む。 小石を含む。	Ⅱ区1層 検出	
44	弥生土器 杯	— (5.0) (1.6)	内 ミガキ→赤色塗彩(濃) 外 ミガキ→胴部に赤色塗彩(濃)・底部ミガキ	底部1/4残存 内 10R5/6 (赤) 外 7.5YR7/3 (にぶい橙) 10R5/6 (赤)	0.5mmの赤色粒子、石英・長石粒子含む。	Ⅱ区1層	
45	弥生土器 杯	— (3.8) (1.9)	内 甕いミガキ→赤色塗彩 外 胴下半部ミガキ→赤色塗彩→底部外周ヘラケズリ・底部ミガキ	底部1/3残存 内 7.5YR4/6 (赤) 外 7.5YR6/3 (にぶい濁) 10R5/4 (赤濁)	きめ細かい。 1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、黒色粒子を少量含む。	Ⅱ区1層	
46	弥生土器 甕	— 4.7 (3.7)	内 ハケナデ 外 ミガキ→赤色塗彩(濃)	底部完形 内 10YR7/3 (にぶい黄橙) 外 7.5YR7/3 (にぶい橙) 10R5/6 (赤濁)	1mm以下の石英・長石粒子を少量含む。	Ⅲ区	
47	弥生土器 甕	(6.0) — (3.3)	内 ナデ 外 ミガキ→赤色塗彩(淡い)・底部ミガキ	底部1/4残存 内 7.5YR7/4 (にぶい橙) 外 7.5YR7/4 (にぶい橙) 10R5/4 (赤濁)	きめ細かい。 0.5mmの石英・長石粒子、黒色粒子を少量含む。	検出	
48	弥生土器 甕	— (8.4) (3.9)	内 ハケナデ→一部ミガキ 外 ミガキ	底部1/2残存 内 10YR8/3 (浅黄橙) 外 5YR8/3 (淡橙) 5YR8/4 (淡橙)	きめ細かい。 1mmの石英・長石粒子含む。	Ⅲ区、Ⅳ区	
49	弥生土器 甕	— (11.3) (3.3)	内 剥離して判別不能 外 胴下半部ハケナデ・底部ナデ→部分的にミガキ	底部完形 内 10YR8/2 (灰白) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	きめ細かい。1mmの赤色粒子、石英・長石粒子含む。 内面、全面剥離。	Ⅱ区1層	
50	弥生土器 甕?	— (13.0) (4.3)	内 ナデ 外 ナデ	底部1/6完形 内 10YR8/2 (灰白) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	きめ細かい。1mmの石英・長石粒子多く含む。磨耗している。 内面に赤色顔料の付着あり。	Ⅰ区	
51	弥生土器 甕	(11.0) — (4.7)	内 ミガキ 外 ハケナデ 外 文様 外 胴部に帯状文を施した後、口縁部に9本1組とする帯状波状文を施す。	口縁部1/2残存 内 10YR8/3 (浅黄橙) 外 10YR8/3 (浅黄橙)	きめ細かい。	Ⅱ区類方	
52	弥生土器 甕	— 4.6 (4.8)	内 ハケナデ→ミガキ 外 胴・底部ハケナデ→ミガキ	底部完形 内 10YR8/2 (灰白) 外 10YR8/4 (浅黄橙)	きめ細かい。 2孔のコシキ。 焼成前に穿孔。	Ⅰ区	
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土地
53	礫物石	15.4	6.0	4.3	660	安山岩。榎面あり。	Ⅱ区
54	礫物石	13.0	6.4	2.7	325	硬砂岩。*	Ⅱ区
55	礫物石	13.4	3.9	2.1	190	安山岩。*	Ⅲ区
56	礫物石	14.0	6.4	4.5	525	チャート。*	
57	礫物石	16.2	5.8	3.5	560	安山岩。*	
58	礫物石	14.6	5.0	4.4	500	安山岩。*	Ⅲ区
59	礫物石	13.3	7.6	5.7	745	安山岩。*	
60	礫物石	13.9	7.1	5.5	700	安山岩。*	Ⅲ区
61	礫物石	9.0	6.2	1.9	90	安山岩。*	Ⅲ区
62	礫物石	11.8	11.2	7.1	1,290	安山岩。*	
63	礫物石	11.6	8.4	7.1	1,000	安山岩。*	
64	刀子	<14.0>	1.4	0.6	20.2	鉄製品。	
65	鏃	<5.0>	1.7	0.1	3.9		Ⅲ区

出土遺物は弥生式土器、須恵器、土師器、鉄製品、編物石がある。弥生式土器は赤色塗彩された杯・壺、無彩の頸部に櫛描文の壺、櫛描波状文・櫛描斜条痕の甕がある。図示した以外にも破片の量は多く、この弥生時代後期末の遺構と重複しているためであろう。須恵器は壺杯の杯身(1)、甕か横瓶の口縁部(2)がある。1の杯身は立ち上がり直立し、踵部は段をなしており、受け部は水平に7mm外方に伸びている。底部は全部ないのでわからないが平らになりそうである。甕または横瓶の口縁部は端部が段をなし、口縁外面に波状文を施す。胎土分析では陶邑産とされる。高蔵208・高蔵23型式と同様の須恵器がみられる。

土師器は杯(3~14)、高杯(15~20)、鉢ないし碗(21~26・32)、小型甕(27~31)、甕(33~43)がある。土師器杯3~7は口縁部が内稜を持って、短く外傾するもので3・5・7は内面に暗文を施している。6は内面ナデ調整のみである。これらの杯の外面は底部ヘラケズリし、口縁部横ナデし、3・5はミガキが施される。10~14は丸底の底部がそのまま口縁になるものである。外面はヘラケズリ、口縁部横ナデ、内面は暗文が施される。8は内外ミガキ調整され、口縁部も少し屈曲して短く直立する。12は器高が深く、内面ミガキ調整であるが他より厚手で褐色色を呈す。9の杯は比較的深い丸底の底部が中位で外稜を持って直立するもので、須恵器杯蓋の模倣であろう。内外面丁寧にミガキ調整される。高杯の15は厚手で杯内外面・脚部がミガキ調整される。16~19の高杯は薄手で外面・杯部内面に暗文が施されるものである。甕は口縁部形態が「く」字を呈す。胴部外面はナデ調整される。土師器の胎土分析をおこなった所、土師器Ⅲと土師器Ⅳの2種に大別され、Ⅲ(18・30)は住居址から出土した粘土と近い化学組成の土器であることが、器形の違う杯類はⅣ類(7・9・14)とされ、数の多いことから在地近傍のものであった。本住居址の土師器を観察するとⅢ・Ⅳ類に含まれることから、この時期の土師器はほぼ在地の土で、生産されたことがいえるようだ。

鉄製品には刀子(44)と不明鉄製品(45)がある。刀子は柄部分が欠損するがほぼ残存し、不明鉄製品は目釘穴が開く。片面は欠損しているように見える。

これらより古墳時代中期末~後期初頭に位置づけられよう。

13) H13号住居址(第28・29図、第14表、図版8・43・44)

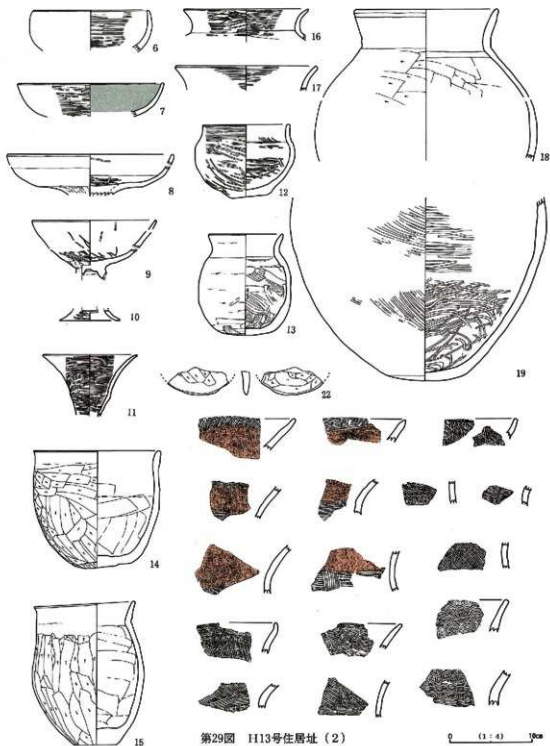
Eカ1グリットにあり、北側半城は円正坊Ⅰで既に調査され、今回は南側を調査した。また南西は掘乱のために壊されていた。SM5号周溝と円正坊ⅠEM4・5円形周溝を切る。本住居址も地盤のズレが確認された。住居址床面近くではわずかに、床下では30cm程南西に移動したようである。南北492cm、東西510cmを測り、ほぼ方形を呈す。カマドは北壁にあり、主軸方向はN-2°-Eで北を指す。カマドはロームを掘り残して、袖芯として石を組み、粘土を貼ったようである。壁下には周溝が廻り、柱穴は4本検出され、北東隅にはピットがあった。カマドの両脇から遺物が多く出土している。

出土遺物は弥生式土器、須恵器、土師器、鉄製品がある。弥生式土器は赤色塗彩、口縁外面端部と頸部に櫛描文を施すもの、櫛描波状文・斜条痕の甕などがある。

須恵器には杯蓋または高杯の杯部(1)、杯身(2)がある。1は底部が回転ヘラケズリされ、口縁部との境にわずかに稜を持って直線的に外傾するもので口縁端部は丸い。2は立ち上がりやや内傾気味に直立し、受け部は短く三角形を呈す。全体に扁平である。破片で明確ではないが陶器Ⅲ15型式・高蔵10型式に類似しているようか。胎土分析では陶邑産と分析されている。

土師器は杯(3~7)、高杯(8~10)、甕(11)、鉢(12・14・23)、小型甕(13・15・16)、甕(17~19)、瓶(20・21)がある。3は須恵器杯身の模倣品で、全体には厚手で上部で屈曲して口縁部がやや内傾して立ち上がる。内面は横ナデとナデ、外面は口縁部横ナデ、底部ヘラケズリである。4・5は須恵器杯蓋の模倣杯で、中位に外稜を持って、口縁部が外傾反している。4は内面口縁部横ナデとナデ調整、外面口縁部横ナデ、底部外面ヘラケズリであるが5は内外とも底部にミガキが施される。6は全体が内湾し、器高も深く半球形を呈すものである。内外ミガキ調整される。7は高杯の杯部であろうが浅い器形のもので内外ミガキ調整、内面は黒色処理される。胎土分析の結果、土師器Ⅳに分類され、在地の胎土であろうとされた。8の高杯は茶口縁で浅い杯部がつき、9は杯部が深いものである。10は脚部に三角透しを持つ。11は小形丸底の甕で口縁部は段を持ってラッパ型に開く。丁寧に内外ミガキ調整される。17は長胴甕の口縁部である。胎土分析では土師器Ⅳ群に分類され在地の胎土であろうと分析される。18の丸胴甕は混入物に粗いチャート・長石・石英粒が目立つ。また21の瓶はまれに4mm大の砂粒もあるが、長石・石英粒は細かく、緻密な胎土である。18・19ともに在地近傍の胎土ではないと分析されている。

24の鉄製品は断面形が長方形を呈し、刀子等の柄の部分ではないかと思われる。



第14表 H13号住居址出土遺物一覧表

番号	器 種	注 量	形 状・調 整	残 存 量・色 調	給 土・特 徴	出 土 位 階
1	須恵器 高杯	(15.0) — (3.1)	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ→天井部回転ヘラケズリ	口縁部1/16残存 内 5Y5/1 (灰) 外 5Y6/1 (灰)	1mmの黒色粒子、細小の石英・ 長石粒子少量含む。	フク土
2	須恵器 杯	— (3.3)	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ→底部回転ヘラケズリ	破片 内 N6/0 (灰) 外 N5/0 (灰)	細小の石英・長石粒子少量含む。	
3	土師器 杯	(12.6) — (5.0)	内 みこみ部ナデ→口縁→みこみ部横ナデ 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 7.5YR7/2 (明褐色) 7.5YR8/3 (浅黄橙) 外 5YR7/3 (にぶい橙) 7.5YR8/3 (浅黄橙)	1mm以下の黒色粒子、赤色粒子 少量含む。	
4	土師器 杯	(12.5) — (3.5)	内 横ナデ 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 10YR8/3 (浅黄橙) 外 10YR8/3 (浅黄橙)	1mmの黒色粒子を少量含む。	I区
5	土師器 杯	(15.4) — 4.6	内 みこみ部ナデ→口縁部横ナデ→みこみ 部ミガキ 外 底部ケズリ、口縁部横ナデ→底部ミガキ	口縁部1/4残存 内 10YR8/2 (灰白) 外 10YR8/2 (灰白)	1mm以下の黒色粒子を含む。	
6	土師器 杯	(14.2) — (5.0)	内 ミガキ 外 磨滅して有り判別できず	口縁部1/4残存 内 7.5YR5/2 (灰褐) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	1mmの黒色粒子含む。	II区 フク土F
7	土師器 杯	(18.0) — (4.1)	内 ミガキ→黒色粘土 外 ミガキ	口縁部1/8残存 内 7.5YR7/2 (明褐色) N2/0 (黒) 外 5YR5/3 (浅橙)	1mm以下の赤色粒子、石英・長 石粒子含む。	1層
8	土師器 高杯	(20.4) — (4.9)	内 みこみ部ミガキ、口縁部横ナデ 外 杯底部ナデ→口縁部横ナデ	口縁部一部残存 内 2.5YR7/4 (淡赤橙) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	きめ細かい。	
9	土師器 高杯	15.2 —	内 口縁部横ナデ→みこみ部ナデ→放射筒文 状のミガキ 外 口縁部横ナデ→体部ナデ→ミガキ	口縁部一部残存 杯部と脚部の接合部分定形 内 5YR6/4 (にぶい橙) 外 2.5YR5/4 (にぶい橙)	1mm以下の赤色粒子含む。	I区フク土下 II区フク土
10	土師器 高杯	— (7.4) (1.2)	内 横ナデ 外 ミガキ	口縁部1/6残存 内 5YR8/3 (浅橙) 外 5YR8/4 (浅橙)	きめ細かい。 透かしあり。	2層
11	土師器 盃	11.6 — (7.6)	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部ほぼ定形 内 5YR8/4 (浅橙) 外 5YR8/4 (浅橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒 色粒子少量含む。	
12	土師器 鉢	10.7 4.2 9.0	内 ミガキ 外 口縁部ミガキ、胴部ヘラケズリ→ミガ キ→底部ヘラケズリ	定形 内 5YR5/3 (にぶい赤橙) 外 2.5YR5/4 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子を多 量、黒色粒子を少量含む。 内外、磨滅している。	P 1
13	土師器 小型壺	(9.1) 6.4 12.3	内 口縁部横ナデ→胴→底部ヘラ (炬目) ナ デ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ→底部ヘラ (炬目) ナデ	口縁部一部残存、底部定形 内 7.5YR7/2 (明褐色) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	きめ細かい。 石英・長石粒子少量含む。	I区、床面
14	土師器 鉢	15.6 7.2 14.3	内 口縁部横ナデ→胴→底部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴→底部ヘラケズリ	口縁部ほぼ定形、底部3/4残存 内 2.5YR7/6 (淡赤橙) 10YR6/1 (褐灰) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙) 5YR7/2 (明褐色)	赤色粒子、黒色粒子含む。	II区、床面
15	土師器 小型壺	12.3 5.2 17.5	内 口縁部横ナデ→胴→底部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ、底部ナ デ	定形 内 10YR4/1 (褐灰) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	1mmの石英・長石粒子含む。	
16	土師器 壺	(15.4) — (3.7)	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/6残存 内 2.5YR7/6 (帯) 外 2.5YR7/6 (帯)	きめ細かい。 1mm以下の石英・長石粒子、赤 色粒子含む。	
17	土師器 壺	(17.4) — (3.0)	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/6残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR8/4 (浅橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒 色粒子を少量含む。	検出
18	土師器 壺(球腹)	(17.6) — (18.4)	内 胴部ヘラナデ→口縁部横ナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 2.5YR7/4 (淡赤橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	2mm以下の石英・長石粒子、 1mmの黒色粒子、多量含む。1cm 以下のチャート粒を多量含む。	I区、P 1 I区
19	土師器 壺(球腹)	9.4 (22.4)	内 ミガキ 外 ヘラケズリ→ミガキ→磨耗著しい	底部定形 内 10YR7/3 (にぶい黄橙) 外 7.5YR6/4 (にぶい橙)	1mm以下の黒色粒子、石英・長 石粒子少量含む。	I区、II区 フク土下 1層、2層 検出

第14表 H13号住居址出土遺物一覧表

20	土師器 甌	15.3 (3.8) 9.2	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部2/3残存 内 10YR4/1 (黒灰) 外 10YR1/1 (黒灰) 10YR8/2 (灰白)	1mmの石英・長石粒子、黒色粘土、赤色粒子少量含む。	床面、I区	
21	土師器 甌	(25.4) 9.7 28.8	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラケナデ→ミガキ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部一部分、底径3/4残存 内 2.5YR6/4 (にぶい型) 外 2.5YR7/3 (淡水藍)	1mmの石英・長石粒子、黒色粘土を少量含む。 小石含む。	I区、II区 1層、2層 検出	
22	土師器 土版	— — (0.9)	横ナデおよびヘラケズリ	1/4残存 内 5YR5/4 (にぶい赤褐色) 外 5YR5/4 (にぶい赤褐色)	1mmの黒色粘土、細小の石英・長石粒子含む。	1層	
23	土師器 鉢	(26.2) — (11.4)	内 ミガキ→黒色胎土 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部1/6残存 内 N3/0 (黒灰) 外 7.5YR7/3 (にぶい型)	石英・長石を含む。	P 1、I区	
番号	種類	長さ	口径	厚さ	g	備考	出土位置
24	刀子	(4.6)	0.7	0.3	6.7	鉄製品。	検出

14) H14号住居址 (第30~32図、第15表、図版8・9・44・45・57)

Eい4グリットにあり、円正坊Iにおいて、北東区を既に調査している。今回は南西区を調査した。また南西端には掘削により破壊されていた。H15号住居址・円正坊ID I土坑に切られ、SM9号周溝を切る。カマドは北壁にあり、南北438cm 東西442cmを測り、主軸方位はN-20°-Wを指す。カマドは地山のローム層を掘り残し袖としていた。地盤のズレの影響を受け、斜めに柱穴が傾斜している。主柱穴は4本検出され、南東のP2と壁の間には間仕切り溝がある。南壁下中央に径56cm 深さ44cmの穴があり、その北側の肩には小場状の高まりがあった。北西隅にはP5がある。遺物はカマドとカマドの東に集中し、編物石が散在していた。

出土遺物には弥生式土器、土師器、石製紡錘車(滑石製)が出土している。検出面からは大正12年の十銭が出土した。弥生式土器は赤色塗彩の杯、壺、櫛波状文・斜条痕文の甕がある。出土量は多く、SM9号周溝と重複していることから関連する土器群と思われる。

土師器には小型丸底(1)、杯ないし鉢(2~4)、高杯(5・6)、小型甕(7~9)、壺(10~15)、甌(16・17)がある。1小型丸底の口縁部である。内外面横ナデ後暗文が施される。2~3の杯は器高が深く、口縁が内縁を持って短く外方に折れる。内面には暗文が施される。高杯は杯部の器高が深く、杯部内外面、胴部外面がミガキ調整される。6の脚は胴部が平らに近く広がるもので、外面に暗文が施される。7は小型の甕で、内外面ナデ調整である。12壺は最大径を胴中位に持ち、口縁部「く」の字型を呈し、胴部はヘラケズリ後わずかにミガキが施される。15の丸甕は赤褐色の胎土の緻密なものである。胴部内外面ミガキ調整で、胎土分析の結果在地の胎土ではないと分析されている。

編物石は18個出土している。

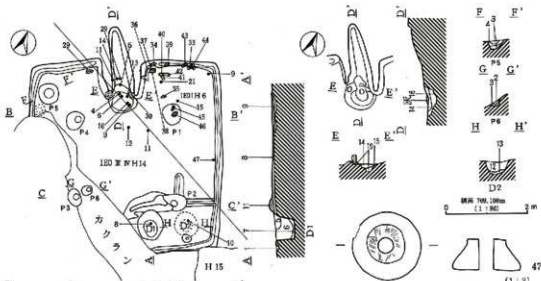
これらより古墳時代中期末から後期初頭に位置づけられよう。



H14号住居址(南より)

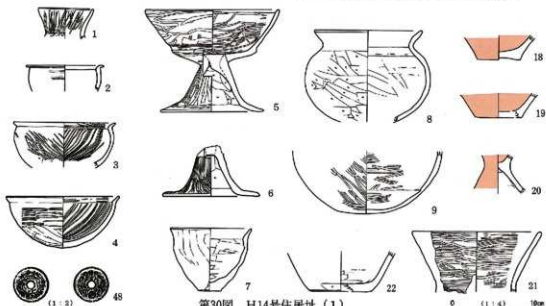


H14号住居址D I(東より)

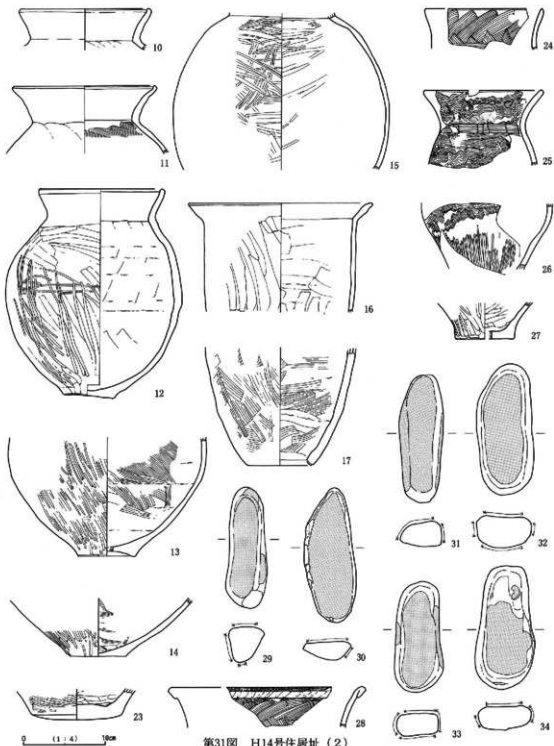


H14: 土器説明

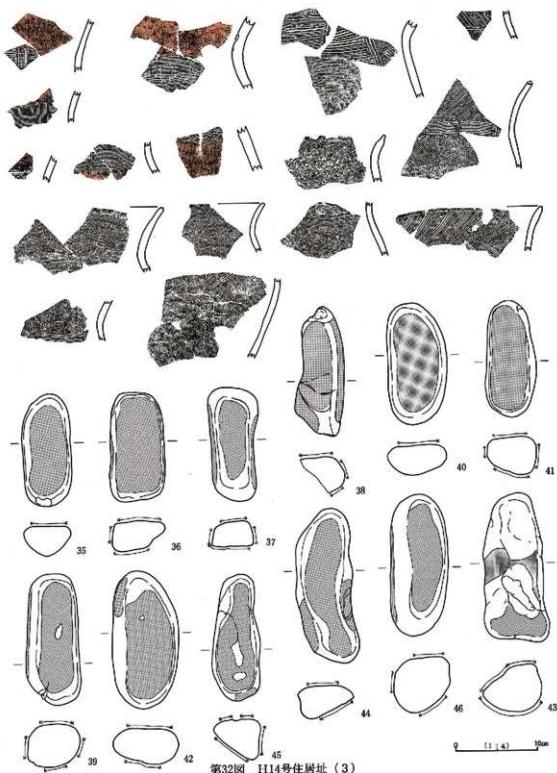
- | | |
|-----------------------|--------------------------------|
| 1. 黒色土器 (H98A/4) | ローム製下食付。(編製) |
| 2. 黒褐色土器 (H98B/20) | ローム製中食付。(滑製) |
| 3. 黒褐色土器 (H98B/20) | ローム製子・バリエス多量食付。(ビット製中食付) |
| 4. 黒褐色土器 (H98B/20) | ローム製子・バリエス食付。 |
| 5. 黒褐色土器 (H98B/20) | 黒色土プロット・ロームプロット食付。(D1) |
| 6. 黒褐色土器 (H98B/20) | ロームバリエス・ローム製多量食付。(D1) |
| 7. 黒褐色土器 (H98B/20) | ローム製多量食付。(D1) |
| 8. 褐色土器 (H98A/4) | ロームプロット・黒褐色土プロット食付。薄底。(編製) |
| 9. 褐色土器 (H98L 7/1) | ロームプロット・バリエス食付。 |
| 10. 北山崎黒褐色土器 (H98B/4) | ローム製中食付。(H98B/20) 土プロット製北山崎食付。 |
| 11. 北山崎黒褐色土器 (H98B/4) | ロームプロット製。薄底。(編製) |
| 12. 黒褐色土器 (H98B/20) | ローム製子・バリエス食付。(D2) |
| 13. 北山崎黒褐色土器 (H98A/4) | ローム製中食付。(H98B/20) プロット製食付。(D2) |
| 14. 北山崎黒褐色土器 (H98B/4) | ローム製。(カマド製中食付) |
| 15. 褐色土器 (H98L 7/1) | ロームプロット食付。(カマド製中食付) |
| 16. 褐色土器 (H98A/4) | ロームプロット・黒褐色土プロット製。(カマド製中食付) |
- 黒土に黒色土 (H98L 7/1) と黒褐色土 (H98B/4) をプロット状態で食付。人及博士。



第30図 H14号住居址 (1)



第31图 H14号住居址(2)



第32图 H14号住居址(3)

第15表 H14号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	数量	成形・調査	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器 小皿九底	— (6.8) (3.8)	内 横ナデ→放射状陶文 外 横ナデ→放射状陶文	胴部1/4残存 内 2.5YR7/6 (赤橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	きめ細かい。	検出
2	土師器 杯	(9.4) — (3.2)	内 ミガキ→体部に放射状陶文 外 口縁部横ナデ・体部ミガキ	口縁部1/8残存 内 N3/0 (褐灰) 外 7.5YR8/4 (浅黄橙) 7.5YR7/2 (明褐灰)	きめ細かい。	堀方、東
3	土師器 杯	(12.4) — (5.5)	内 横ナデ→放射状陶文 外 口縁部横ナデ・体部ヘラケズリ→放射状陶文	口縁部1/2残存 内 2.5YR7/6 (橙) 外 10R6/6 (赤橙)	きめ細かい。	P4、3層 東
4	土師器 杯	(13.8) — (6.3)	内 みこみ部ナデ・口縁→体部横ナデ→体部放射状陶文・口縁部ミガキ (→黒色染付?) 外 口縁部横ナデ・底部ヘラナデ→中位ミガキ	口縁部1/5残存 内 7.5YR7/4 (にぶい橙) 7.5YR1/7/1 (黒) 外 2.5YR7/6 (橙)	きめ細かい。 1mm以下の石英・長石粒子少量含む。 外面に染けた痕あり。	西、検出
5	土師器 高杯	16.5 12.6 12.7	内 杯部 みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→ミガキ 脚部 脚部部横ナデ→脚注部ヘラケズリ 外 杯部 口縁部横ナデ・体部ナデ (一部工具使用) →ミガキ 脚部 脚柱部ナデ・脚部部横ナデ→ミガキ	完形 内 10R6/6 (赤橙) 外 2.5YR6/6 (橙) 5YR7/4 (にぶい橙)	きめ細かい。	
6	土師器 高杯	— 11.8 (6.1)	内 胴部横ナデ→脚注部ヘラケズリ→ホブ部分ナデ 外 ナデ→ミガキ	胴部ほぼ完形 内 7.5YR8/4 (浅黄橙) 外 7.5YR7/4 (にぶい橙)	きめ細かい。	3層
7	土師器 鉢	(10.0) (2.8) 7.7	内 胴→底部ハケナデ→口縁部横ナデ 外 口縁→胴部ハケナデ・底部ナデ	口縁部一部、底部1/4残存 内 7.5YR7/2 (明褐灰) 外 5YR7/3 (にぶい橙) 5YR6/1 (褐灰)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子を含む。	西、2層
8	土師器 小型壺	(13.2) — (11.2)	内 胴部ヘラナデ→口縁部横ナデ 外 胴部ヘラケズリ→口縁部横ナデ	口縁部1/3残存 内 5YR6/3 (にぶい橙) 外 5YR7/3 (にぶい橙) 5YR6/2 (灰褐)	1mm以下の石英・長石粒子含む。	1層、D1 床間、西
9	土師器 鉢?	— (7.6)	内 ミガキ 外 ミガキ	底部完形 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR7/3 (にぶい橙) 5YR7/4 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、 1mmの黒色粒子含む。	フク土 フク土下 P5、1層
10	土師器 壺	(16.2) — (5.0)	内 口縁部横ナデ・胴部ナデ 外 横ナデ	口縁部1/2残存 内 5YR8/3 (淡橙) 外 5YR8/3 (淡橙)	1mm以下の石英・長石粒を多く含む。 歪みあり。	D2
11	土師器 壺	17.7 — (8.3)	内 口縁部横ナデ→胴部ハケナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ナデ	口縁部7/8残存 内 7.5YR8/4 (浅黄橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。 13と同個体か。	フク土
12	土師器 壺	15.3 6.3 25.7	内 口縁部横ナデ・胴→底部ヘラナデ 外 底部ヘラケズリ→胴部ナデおよびヘラケズリ→胴中央→下半にミガキ→口縁部横ナデ	ほぼ完形 内 7.5YR7/2 (明褐灰) 外 7.5YR7/3 (にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。 小石含む。	
13	土師器 壺	— (6.9) (14.5)	内 ヘラナデ (仮目判用) 外 胴部 ナデ・ヘラケズリ→ミガキ 底部 ヘラケズリ	底部1/2残存 内 7.5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、赤色粒子を含む。 11と同個体か。	カマド内 フク土
14	土師器 壺	— 6.8 (7.1)	内 ヘラナデ 外 胴部 ヘラケズリ→粗いミガキ 底部 ヘラケズリ	底部完形 内 5YR5/1 (褐灰) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	1mmの石英・長石粒子、赤色粒子含む。	2層、3層
15	土師器 壺	— (19.1)	内 ナデ→ミガキ 外 ナデ→ミガキ	破片 内 10R6/6 (赤橙) 外 10R6/6 (赤橙)	きめ細かい。1mmの赤色粒子少量含む。 1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	フク土
16	土師器 壺	(22.4) — (13.3)	内 胴部ヘラナデ→口縁部横ナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ (仮目判用)	口縁部一部残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 2.5YR6/4 (にぶい橙)	1mmの黒色粒子を多量、1mm以下の石英・長石粒子を少量含む。	
17	土師器 鉢	— (8.0) (14.5)	内 ヘラナデ 外 ヘラナデ	底部1/4残存 内 7.5YR2/1 (黒) 7.5YR8/4 (浅黄橙) 外 2.5YR7/6 (橙)	1mmの黒色粒子、石英・長石粒子含む。 小石含む。	西
18	弥生土器 鉢	— (5.2) (3.0)	内 ミガキ→赤色塗彩 外 ミガキ→赤色塗彩	底部5/8残存 内 10R5/6 (赤) 外 10R5/6 (赤) 断 10YR8/3 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	西

第15表 H14号住居址出土遺物一覧表

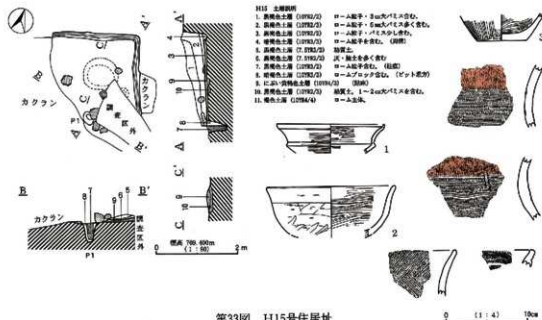
19	弥生土器 鉢	(5.8) (3.0)	内 ミガキ→赤色塗彩 外 ミガキ→赤色塗彩 外面の赤色塗彩は欠落しているが、濃い赤色塗彩が施されていたと思われる。	底部1/4残存 内 7.5R4/6 (赤) 外 10R7/1 (明赤灰)	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	2層	
20	弥生土器 高杯	— (4.7)	内 杯部 ミガキ→赤色塗彩 脚部 横ナデ 外 ミガキ→赤色塗彩	脚部、杯部の接合部分 内 杯部 7.5R4/8 (赤) 脚部 7.5YR8/3 (浅黄橙) 外 7.5R4/8 (赤)	1mm以下の石英・長石粒子含む。西内面杯部、割縁。		
21	弥生土器 甕	(15.8) — (7.4)	内 ハケナデ→ミガキ 外 ハケナデ→ミガキ 文 頸部に磨蚀横走平行織文(単位不明)を施した後、磨蚀垂下文を施す。	口縁部3/4残存 内 5YR8/4 (淡橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	フク土	
22	弥生土器 甕	— (7.8) (5.0)	内 ナデ・ヘラナデ 外 胴部ナデ→底縁外周ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	底部1/4残存 内 5YR8/4 (淡橙) 外 10YR8/1 (灰白) 2.5YR/1 (灰白)	1mm以下の石英・長石粒子含む。1層内面底部に赤色顔料付着。	1層	
23	弥生土器 甕	— 10.8 (3.8)	内 ヘラナデ 外 胴下半部ナデ→ミガキ・底縁ヘラケズリ(磨蚀して、単位判別できず)	底部完形 内 7.5YR8/3 (浅黄橙) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。	1層	
24	弥生土器 甕	(14.6) — (5.1)	内 横位ミガキ 外 横ナデ 文 7本1組とする磨蚀斜走直線文を横位羽状(左回り)に施した後、頸部に磨蚀横走平行織文を施す。	口縁部1/4残存 内 10YR8/2 (灰白) 外 10YR8/3 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	西	
25	弥生土器 甕	(14.8) — (9.7)	内 口縁部横ナデ・胴部ハケナデ→ミガキ 外 口縁部横ナデ・胴部ハケナデ・胴部ナデ 文 口縁部および胴部に6本1組とする、磨蚀波状文を施した後、頸部に6本1組とする磨蚀横走文を施す。	口縁部1/4残存 内 5YR8/4 (淡橙) 10YR8/2 (灰白) 外 7.5YR7/3 (にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子、赤色粒子、少量含む。	フク土	
26	弥生土器 甕	— (8.0)	内 縦位ミガキ 外 胴下半ミガキ 文 5～6本1組とする磨蚀波状文	胴下半一部残存 内 7.5YR8/3 (浅黄橙) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙) 7.5YR7/2 (明褐灰)	2.5mmの黒色粒子、1mm以下の石英・長石粒子含む。	フク土	
27	弥生土器 甕	— (7.2) (4.4)	内 (ヘラ) ナデ 外 胴部 ナデ 底部 ヘラケズリ	底部1/2残存 内 10YR8/2 (灰白) 外 10YR8/1 (褐灰)	1mm以下の石英・長石粒子含む。	検出	
28	弥生土器 甕	(24.1) — (4.9)	内 横位ミガキ 外 口縁部横ナデ・口縁部ハケナデ 文 口唇部 3本1組とする磨蚀波状文 濃線指弾痕? 口縁部 5～8本1組とする磨蚀斜走直線文を横位羽状(右回り)に施す。	口縁部1/5残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR7/3 (にぶい橙)	1mm以下の黒色粒子を少量含む。	1層	
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位置
29	礫物石	14.7	5.0	4.4	480	擦面あり。チャート製。	
30	礫物石	16.4	6.5	2.3	360	擦面あり。安山岩。	
31	礫物石	15.6	5.4	3.1	320	擦面あり。安山岩。	カマド
32	礫物石	16.0	7.0	4.0	615	擦面あり。安山岩。	P 2
33	礫物石	13.6	6.0	2.7	360	擦面あり。安山岩。	
34	礫物石	15.1	7.3	3.0	520	擦面あり。	
35	礫物石	13.8	6.0	3.6	490	擦面あり。花崗岩。	
36	礫物石	13.3	6.7	3.8	530	擦面あり。安山岩。	
37	礫物石	14.0	6.2	3.3	500	擦面あり。安山岩。	
38	礫物石	15.8	6.1	4.5	590	擦面あり。安山岩。	
39	礫物石	16.1	6.6	5.3	860	擦面あり。チャート。	
40	礫物石	4.8	7.4	3.7	620	擦面あり。砂岩。	
41	礫物石	14.2	6.3	4.7	650	擦面あり。安山岩。	
42	礫物石	16.8	8.1	4.4	870	擦面あり。安山岩。	
43	礫物石	18.2	8.2	5.8	1000	擦面あり。安山岩。	
44	礫物石	18.8	7.7	4.1	820	擦面あり。安山岩。	
45	礫物石	15.5	5.8	4.9	660	擦面あり。安山岩。	
46	礫物石	17.2	7.2	6.8	1090	擦面あり。安山岩。	
47	紡錘車	1.9	4.2	—	38.5	滑石。	
48	古銭	2.2	—	0.1	3.6		

15) H15号住居址 (第33図、第16表、図版9・46)

Eあ5グリットにあり住居址の大半は擾乱され、北東区のみ調査できた。H14号住居址を切っている。カマドは検出できなかったが、東壁側に粘土・焼土がみられたことから、東壁にカマドがあったようである。壁下には周溝が巡っていた。主柱穴は住居址北東にあたるP1が検出された。

出土物には縄文式土器1片と弥生式土器と土師器がある。図示した弥生式土器は赤色塗彩され頸部に櫛指文を持つ壺、櫛指斜条痕の甕である。破片では赤色塗彩の壺片が多くある。また土師器は実測不可能だが丸胴甕や甕の破片もある。実測した土師器は1の杯と2の鉢がある。土師器杯は薄手で丸底からシャープな外縁を持ち、屈曲し、口縁部が外反外傾し、肩部は内湾する。杯内面はミガキ、外面は口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ調整される。2の鉢は厚手で、内面ミガキ調整される。

資料が少ないので明確ではないが、H14号住居址切っていることなどから古墳時代後期に位置づけられよう。



第33図 H15号住居址

第16表 H15号住居址出土物一覧表

番号	器名	法量	成 形 ・ 調 整	残 存 量 ・ 色 調	貯 土 ・ 特 徴	出土位地
1	土師器 杯	(13.2) — (3.6)	内 ミガキ 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部1/2残存 内 7.5YR6/3 (浅黄緑) 5YR5/2 (灰黄) 外 7.5YR2/3 (にぶい壺)	1mm以下の石英・長石粒子含む。	検出
2	土師器 杯	(16.6) — (6.2)	内 ミガキ(→黒色処理?) 外 底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ 底部に部分的にヘラナデ	口縁部1/8残存 内 7.5YR6/3 (にぶい壺) 7.5YR4/1 (黄灰) 外 7.5YR6/3 (浅黄緑)	1mmの赤色粒子、黒色粒子多く含む。 小石含む。	
3	弥生土器 甕	— 6.0 (3.3)	内 ヘラミガキ 外 ヘラミガキ 底部もミガキ	底部完形 内 7.5YR7/2 (明褐色) 外 7.5YR6/2 (灰黄)	1mm以下の赤色粒子、黒色粒子、 石英・長石粒子、石英を含む。	

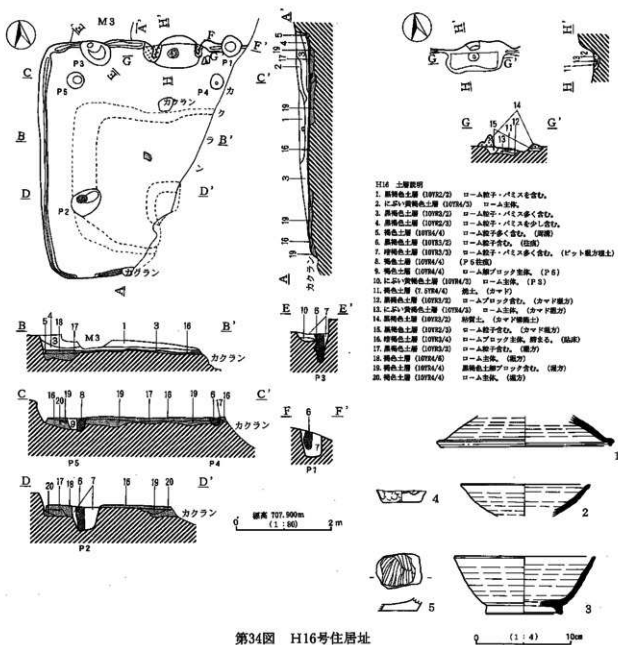
16) H16号住居址 (第34図、第17表、図版9・46)

Eこ3グリットにあり、東側半城が攪乱により壊されている。本住居址の地盤のズレはなかった。南北462cm、東西は残長で412cmを測る。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-7°-Eを指す。カマドは黒褐色の粘土で構築されていたが、わずかに火床と袖を残すのみであった。主柱穴は南東の攪乱された所を除いた3本が検出され、北側の柱穴は北壁中にあった。P4・P5は北側床面にあり、柱痕を持っており、補助的な柱穴であろうか。壁下には周溝が巡る。床面はロームブロックを含む土で貼り床され締まっていた。

出土遺物には弥生式土器、須恵器、土師器がある。5は弥生式土器の甕の底部を土版に再利用したものであろうか。破片では柳描斜条痕・波状文の甕、赤色塗彩の杯・壺片がある。また古墳時代の土師器壺・杯も破片で含まれる。

実測遺物は須恵器蓋(1)、杯(2)、高台付杯(3)がある。1の須恵器蓋は口縁端部が屈曲して短く折れるものでロクロによりナデ調整される。2の杯は灰白を呈し、ロクロ調整される。3の高台付き杯は器高は深く、貼り付け高台である。高台外側が接地する。他に破片で武蔵甕の胴部片もあるが形態はわからない。

これらより、平安時代に位置づけられよう。



第34図 H16号住居址

第17表 H16号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調査	残存量・色調	胎土・特徴	出土位置
1	須恵器 蓋	(18.6) — (3.2)	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	口縁部1/8残存 内 N7/0 (灰白) 外 N8/0 (灰白)	1mmの黒色粒子、0.5mm以下の石炭・長石粒子、小石含む。	I区
2	須恵器 杯	(13.7) — (3.4)	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	口縁部1/8残存 内 N8/0 (灰白) 外 N8/0 (灰白)	1mmの黒色粒子、石炭・長石粒子含む。	I区
3	須恵器 高台付杯	(14.0) (8.2) 5.1	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ→底面回転糸きり→高台足付	口縁部一部、底面1/4残存 内 N7/0 (灰白) 外 N8/0 (灰白)	1mmの黒色粒子含む。	I区
4	土師器 子甕?	— 4.0 (1.3)	内 須恵器土・ナデ 外 須恵器土・底面ナデ	底面完全部 (接合部分で割れている) 内 10YR8/3 (淡赤橙) 外 10YR7/1 (灰白) 2.5YR7/3 (ぶい橙)	1mm以下の黒色粒子、0.5mm以下の石炭・長石粒子少量含む。または須恵器	IV区4層
5	弥生土器 甕	— (8.4) (1.3)	内 ミガキ 外 ミガキ・底面ミガキ	底面1/8残存 内 5YR8/2 (灰白) 外 2.5YR8/4 (淡黄橙)	1mmの赤色粒子、石炭・長石粒子少量含む。	I区

17) H17号住居址 (第35図、第18表、図版10・46・57)

本住居址はEこ2グリットにあり、大半は掘乱され、北西のみ調査できた。ローム層中に構築され、覆土は黒褐色を呈す。カマドは調査区域では検出されなかった。住居址北西に当たる主柱穴が1個検出された。南西の主柱穴はH16のP1と重なる地点と推測される。壁下には周溝が巡り、P1から西壁に間仕切り溝がある。

出土遺物には弥生式土器、土師器、碧玉製管玉(4)がある。弥生式土器は赤色塗彩され、頸部に佛指文の施される壺や、佛指斜糸痕・波状文の甕がある。

土師器は杯(1)鉢(2)、長胴甕(3)が実測資料である。1の杯は、器高の深いもので、丸底のから中位より上部に内外に稜を持って外反するものである。内面は放射状の暗文、外面は口縁部横ナデ、底部ヘラケズリされる。3の甕は口縁部形「く」字形で、長胴化するもの、最大径は胴中位以下に持ち、厚い底部である。また外面胴部の調整もヘラナデに近い緩やかなヘラケズリである。

第18表 H17号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調査	残存量・色調	胎土・特徴	出土位置	
1	土師器 杯	(14.4) — 6.8	内 みこみ部ヘラナデ・口縁部横ナデ→放射状暗文 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	口縁~底部1/2残存 内 2.5YR7/3 (淡赤橙) 外 2.5YR7/3 (淡赤橙) 5YR5/1 (褐灰)	1mmの石炭・長石粒子、少量含む。 小石含む。 きの殻かい。	R区	
2	土師器 鉢	(6.2) — (3.8)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁~胴部横ナデ→部分的にミガキ	口縁部1/16残存 内 5YR8/4 (淡橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	きの殻かい。 0.5mmの赤色粒子、黒色粒子を少量含む。	R区	
3	土師器 甕	17.6 5.3 33.3	内 胴~底部ヘラナデ・口縁部横ナデ 外 口縁部横ナデ→胴部横ナデ→ヘラケズリ・底面ナデ	口縁部完全部、底面1/2残存 内 5YR7/4 (ぶい橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	1mmの石炭・長石粒子、黒色粒子含む。	P2、E区	
番号	種類	長さ	巾	厚さ	重	号	出土位置
4	碧玉	<1.5>	0.7	—	<1.3>	碧玉製。	

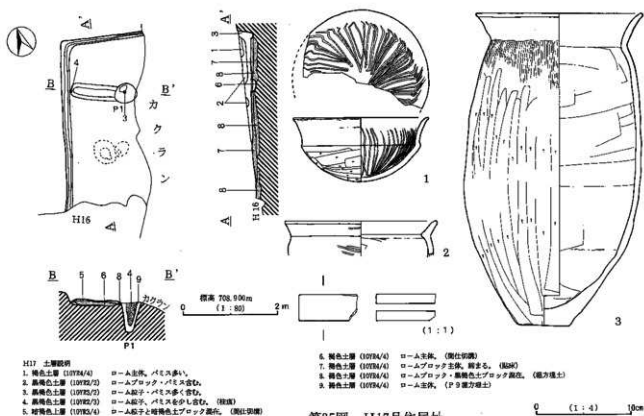


H16号住居址発掘(南より)



H17号住居址発掘(東より)

管玉は片方が破損し、長さはわからないが、径7mmを測るものである。
これらより本住居址は古墳時代後期に位置づけられよう。



第35図 H17号住居址

18) H18号住居址 (第36図、第19表、図版10・46)

Eこ1グリットにおいて検出された。西壁は攪乱により壊され、東はM2号溝址に上部を破壊される。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-10°-Eを測る。南北長408cm、東西は残長で354cmを測り、ほぼ方形を呈するようである。カマドは袖に石を置き、黒褐色の粘質土で構築していた。カマドの堀方からは旧カマドのビットがあり、カマドは改修されたようだ。主柱穴は検出されず、南側床面に小ビットが2個検出された。北東壁下には周溝がみられた。

出土遺物には弥生式土器、土師器、須恵器がある。弥生式土器は破片で赤色塗彩された壺・杯、櫛描波状文・斜条痕の甕等がある。土師器は古墳時代後期の杯や甕があるがこれも破片である。実測個体には須恵器蓋(1・2)、須恵器杯(3・4)、土師器甕(5・6)、編物石(7)がある。1の須恵器蓋は宝珠形の扁平なつまみ付き、天井部外面に1個だけ手持ちのヘラケズリが施される。2の天井部外面も同様である。内面はロクロナデである。4の須恵器杯は底部が回転糸切りされる。焼き質はやや軟質で、ことに4は灰白で軟質である。5の土師器甕は小型甕である。器内も薄く、胴上部は横方向にヘラケズリされる。6は武蔵甕の底部で、底径が小さいものである。

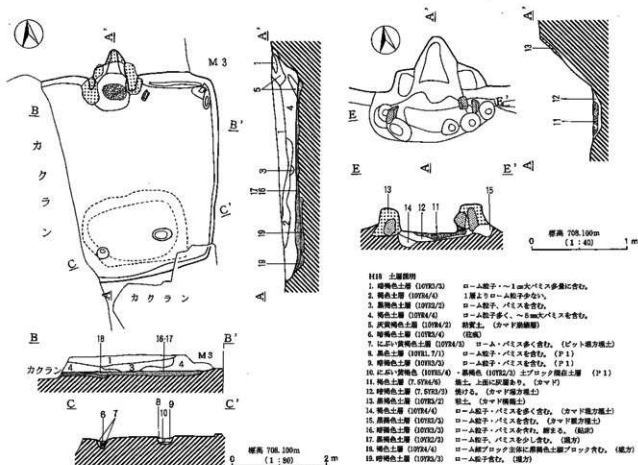
これらより本址の時代は平安時代に位置づけられよう。

第19表 H18号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位置
1	須恵器蓋	—	内 ロクロナデ	つまみ兜形	1mmの黒色粒子含む	I区、カマド内面に火だすき有。
		3.7 (2.7)	外 ロクロナデ→天井部手持ちヘラケズリ→つまみ貼付	内 NR/0 (灰白) 外 NR/0 (灰白)		
2	須恵器蓋	(16.6)	内 ロクロナデ	口縁部1/4残存	1mmの黒色粒子少量含む。	I区、カマド外面に火だすき有。
		(2.8)	外 ロクロナデ→天井部手持ちヘラケズリ	内 10YR8/2・NR/0 (灰白) 外 10YR8/1・NR/0 (灰白)		
3	須恵器杯	(13.8)	内 ロクロナデ	口縁部1/6残存	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	カマド、堀方含む。
		(3.5)	外 ロクロナデ	内 5YR7/3 (にぶい膜) 外 5YR8/3 (淡黄)	内外面に火だすき有。	

第19表 H18号住居址出土遺物一覽表

4	須恵器 杯	(13.2) (5.4) 3.7	内外 ロクロナデ→底部回転赤きり	口縁部1/4、底部1/2残存 内 NR/0 (灰白) 外 NR/0 (灰白)	1mm以下の黒色粒子含む。	I区、カマド カマド、堀方	
5	土師器 小型壺 (武蔵)	(13.8) — <4.7>	内外 口縁部横ナデ→胴部ヘウナデ 胴部ヘウナズリ→口縁部横ナデ	口縁部1/4残存 内 2.5YR6/2 (灰赤) 2.5YR4/1 (赤灰) 外 5YR7/3 (におい役) 5YR4/1 (褐灰)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	I区 カマド、堀方	
6	土師器 壺 (武蔵)	— (4.0) 6.0	内外 ヘウナデ 胴・底部ヘウナズリ	底部1/2残存 内 2.5YR5/2 (灰赤) 外 5YR4/1 (褐灰)	1mm以下の黒色粒子、石英・長石粒子少量含む。	I区、カマド	
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土地
7	舟石	12.5	11.1	2.6	545	安山岩。	



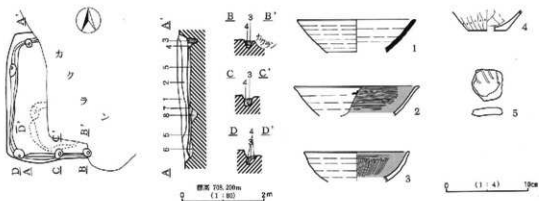
第36図 H18号住居址

19) 第19号住居址 (第37図、第20表、図版11・46・58)

下い3グリットにあり、大半は覆積によって壊され、西壁だけ残存していた。カマドは調査域では検出されなかった。南北288cm、東西は残長192cmを測る。床面は端部であるため少し締まる程度である。主柱穴は検出されず、壁下に小ピットがみられた。

出土遺物には弥生式土器、土師器、須恵器がある。弥生式土器は赤色塗彩の壺、柳斜条痕の甕がある。土師器は古墳時代後期の土師器壺や杯が混入していた。実測遺物には須恵器杯(1)、土師器杯(2・3)、土師器壺(4)円形土版(5)がある。須恵器杯は土師器杯とも判断が付きかねる色調のもので、内外面クワ口横ナデされる。2、3は土師器杯で内面ミガキ黒色処理され、2は外面に墨書があるが欠損のため判読できない。5は武蔵壺底部である。5は土師器壺の破片を再利用し円形の土版にしたものである。

これらより本住居址の時代は平安時代に位置づけられよう。



1119 土層説明

- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1. 黒褐色土層 (0192/2) | ローム砂子、少量の赤土を含む。 |
| 2. 黒褐色土層 (0192/2) | ローム砂子層より赤土を含む。 |
| 3. 黒褐色土層 (0193/2) | ローム砂子・黒土・赤土を含む。(壁柱穴周辺) |
| 4. 黒褐色土層 (0193/2) | ローム砂子・赤土を含む。(壁柱穴周辺) |
| 5. 黒褐色土層 (0194/4) | ローム土層、中々硬まる。(壁柱) |
| 6. 黒褐色土層 (0194/4) | ローム土層。(壁柱) |
| 7. 黒褐色土層 (0194/2) | ローム土層を含む。(壁柱) |
| 8. 黒褐色土層 (0196/0) | ローム、締まりなし。 |

第37図 H19号住居址

第20表 H19号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法號	成形・調整	残存量・色調	粘土・特徴	出土状況	
1	須恵器杯	(34.8) — (3.9)	内 ロタコナデ 外 ロタコナデ	1種器1/4残存 内 SYR7/3 (にぶい型) 外 2.5YR7/4 (赤赤橙) 器 2.5YR7/2 (明塩灰)	0.5mm以下の石英・長石粒子多量含む。 内外面に墨書あり。	Ⅱ区	
2	土師器杯	(15.4) — (3.6)	内 ミガキ・黒色処理 外 ロタコナデ	1種器1/4残存 内 N1.5/0 (黒) 外 2.5YR8/3 (浅黄橙)	1mmの石英・長石粒子を少量含む。 外面に墨書あり。字不明。	Ⅱ区	
3	土師器杯	(13.0) — (3.6)	内 ミガキ・黒色処理 外 ロタコナデ	1種器1/6残存 内 N1.5/0 (黒) 外 2.5YR8/3 (浅黄橙)	1mmの石英・長石粒子、黒色粒子を含む。	Ⅱ区、壁方	
4	土師器壺	(4.8) — (2.5)	内 ヘラナデ 外 割・底部ヘラケズリ	底面1/2残存 内 2.5YR3/1 (黒地) 外 2.5YR5/1 (暗灰)	1mm以下の赤色粒子少量含む。 武蔵壺。	Ⅱ区	
5	土師器土版	— — —	内 ナデ 外 ナデ+ミガキ	完存 内 10YR4/1 (暗灰) 外 2.5YR8/2 (灰白) 10YR1.7/1 (黒)	1mmの石英・長石粒子多く含む。 壺の二次利用。	Ⅱ区	
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土状況
6	刀子	<6.8>	1.1	0.4	4.5		Ⅱ区

20) H20号住居址 (第38図、第21表、図版11・46・57)

Eあ2グリットで、円正坊Iにおいて西側を調査し、今回カマドを含め、東側を調査した。円正坊Iと今回の調査との間30cmほどは擾乱しており、帯状に破壊されてしまった。カマドは北壁にあり、南北長366cm、東西長388cmを測り、方形を呈す。主軸方位はN-6°-Eである。カマドは袖と火床部が残り、黒褐色の粘土でカマドを構築していた。

主柱穴はP1~P4の4本があり、住居址中央に床より8cm程低いピットがある。北東隅には長さ80cm 深さ48cmの隅丸方形の穴があった。この穴の南方はピットに沿って小堤状に5cm程高まっていた。また南の主柱穴P2とP3の間は幅24cmの間仕切り溝が東西につながり、その北側に小堤がもうけられていた。また南東隅は6cm程床より低くなっていた。

出土遺物は弥生式土器、土師器、鉄製品、礫物石がある。弥生式土器は図示したようには赤色塗彩された杯、同じく赤色塗彩され頸部に指環文が施される壺、斜条痕の甕がある。土師器は杯(1・2)、鉢(3・4)、壺(5・6)、甌(7)がある。1の杯は丸底の浅い底部から内外に稜を持って大きく外反するもので内外ミガキ調整される。2は丸底の底部から外稜を持って外反するが口縁は直線に近い。3の鉢は口縁部が折り返し口縁状に肥厚し、横ナデされ、

第21表 H20号住居址出土遺物一覧表

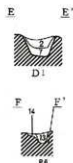
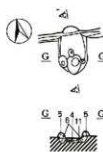
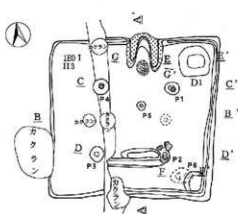
番号	器種	法量	成形・調整	残存品・色調	胎土・骨髄	出土位置	
1	土師器 杯	(16.8) — 3.7	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ→ミガキ・底部ヘラケズリ →ミガキ	口縁部1/11残存 内 5YR1.7/1 (黒) 外 5YR6/1 (褐色)	1mm以下の石英・長石粒子含む。	検出	
2	土師器 杯	(18.4) — (3.9)	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部ミガキ・底部ケズリ (残存部分が少なく、単位は判別できない)	口縁部1/8残存 内 10YR1.7/1 (黒) 外 7.5YR7/3 (にぶい腹) 5YR4/1 (褐色)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。	Ⅱ区、赤色土カマド	
3	土師器 鉢	(10.2) — (6.4)	内 胴部ヘラナデ→口縁部横ナデ 外 口縁部横ナデ・胴部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 7.5YR8/3 (浅黄腹) 外 7.5YR7/3 (にぶい腹)	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	Ⅱ区	
4	土師器 鉢	(4.2) — (2.6)	内 ヘラナデ→黒色処理 外 胴部ヘラナデ→ミガキ・底部ヘラナデ	口縁部3/4残存 内 N3/0 (褐色) 外 7.5YR7/3 (にぶい腹)	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	Ⅱ区、フク土カマド	
5	土師器 壺	— 5.7 (5.3)	内 ヘラナデ 外 胴・底部ヘラケズリ	底部完形 内 5YR6/2 (灰褐) 外 5YR5/2 (灰褐)	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。 小石多く含む。	Ⅰ区、Ⅱ区	
6	土師器 甕	(21.6) — (17.1)	内 胴部ヘラナデ→口縁部横ナデ 外 胴部横ナデ→口縁部横ナデ	口縁部1/4残存 内 7.5YR7/4 (にぶい腹) 外 7.5YR6/3 (浅黄腹) 7.5YR2/1 (黒)	1mm以下の石英・長石粒子、2mm以下の赤色粒子、1mm以下の黒色粒子含む。	Ⅱ区	
7	土師器 甌 (一孔)	(7.4) — (12.9)	内 ミガキ 外 ヘラケズリ→わずかにミガキ	底部1/2残存 内 7.5YR7/3 (にぶい腹) 外 7.5YR7/4 (にぶい腹) 7.5YR1.7/1 (黒)	1mmの石英・長石粒子多く含む。 0.5mmの黒色粒子を少量含む。	Ⅱ区、Ⅲ区 検出	
8	弥生土師器 杯	— (4.0) (2.6)	内 ミガキ→赤色塗彩 外 胴部 ミガキ→赤色塗彩 底部 ミガキ	底部1/2残存 内 7.5R4/5 (赤) 外 7.5R4/6 (赤) 5YR7/4 (にぶい腹)	1mm以下の石英・長石粒子多く含む。	検出	
番号	器種	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位置
9	礫物石	15.0	4.2	1.9	245	安山岩。断面あり。	Ⅱ区
10	礫物石	<3.5>	4.0	3.3	66	安山岩。断面あり。	Ⅱ区
11	鉄	(2.2)	1.7	<0.1>	1.1	鉄製品。	
12	砥石	7.4	2.2	1.7	—	凝灰岩。(携帯用)	



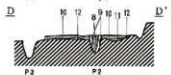
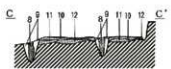
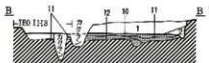
H20号住居址D1 (北より)



H20号住居址間仕切溝 (南より)



0 50cm
(1:50)

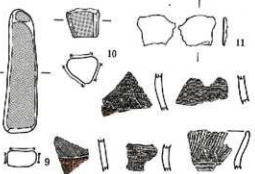
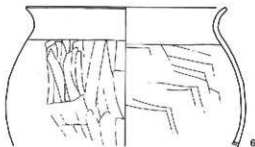


H20 土層説明

1. 黒褐色土層 (0972/2) ローム破片を含む、一20cm×15cm×高さブロックを多く含む。
2. 黒褐色土層 (0972/2) ローム破片、ペリスを多く含む。
3. 黒褐色土層 (0972/2) 粘土、粘土破片を含む。(コウチ層)
4. 粘土質土層 (0972/2) 粘土。(コウチ層)
5. 黒褐色土層 (0972/2) 粘土。(コウチ層)
6. 黒褐色土層 (0972/2) ローム破片を含む。(コウチ層)
7. 黒褐色土層 (0972/2) ローム破片を多く含む。(D1)
8. 細かい黄褐色土層 (0972/2) (P4)
9. 細かい黄褐色土層 (0972/2) ローム土塊。(P1)
10. 黒褐色土層 (0972/2) 土層構造の上部 (0972/2) の土層 破片を含む。(P1)
11. 細かい黄褐色土層 (0972/2) 黒褐色 (0972/2) の土層構造を含む。(P1)
12. 細かい黄褐色土層 (0972/2) ローム土塊。(P1)
13. 黒褐色土層 (0972/2) ローム破片を含む。(P6)
14. 黒褐色土層 (0972/2) ロームブロックを含む。(P6)
15. 黒褐色土層 (0972/2) ロームブロックを含む。(P6)



12



0 10cm
(1:4)

第38図 H20号住居址

胴部外面はヘラケズリされる。6の丸脚臺は口縁部が外反するもので頸部径が大きい。胴部外面はヘラナデ・ナデ調整される。7の瓶は1孔のもので、内面は丁寧にミガキ、外面はヘラケズリ後わずかにミガキ調整される。鉄製品は破片であるためわからないが、鎌などの幅広いものである。

これらより本社は古墳時代後期に位置づけられよう。

21) H21号住居址 (第39図、第22表、図版12・13・47・57)

Gか10グリットにあり、上物が移動せず都合東西2回に分けて調査した。M3号溝・H22号住居址と重複し切られている。ローム層中に構築され、覆土は暗褐色を呈す。遺構は掘り込みが浅く、ほぼ床面近くで検出し、上物が植木であったため植物の根が多く、床面は良好な状態ではなかった。カマドは北壁にあり、M3号溝に填されカマドの火床部南半とその上部はない。カマドの北側、煙道部から支脚石の位置までが残り、火床部の側壁が焼けていた。住居址は南北残長406cm、東西長420cmを測り、柱穴の位置から推定するに南壁は近い位置にあるようである。主軸方位はN-8°-Wを指す。主柱穴はP1~P4の4本あり、矩径46~50cm 深さ70cmを測り、柱痕と溝方を持つ大きなピットである。柱痕の径は16cmを測る。

出土遺物は弥生式土器、土師器、礫物石、スリ面のある剥片がある。土器の出土量は少ない。弥生式土器は赤色塗彩片、菊描波状文の甕がある。土師器は甕や内面に暗文を持つ高杯等もあるがいずれも破片で、実測個体は土師器杯2点である。1は丸底で内外に稜を持ち、わずかに屈曲して、直線的に外傾する。内面はミガキ・黒色処理された

第22表 H21号住居址出土遺物一覧表

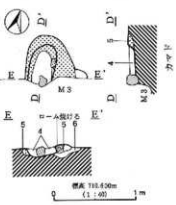
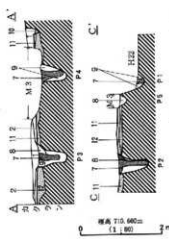
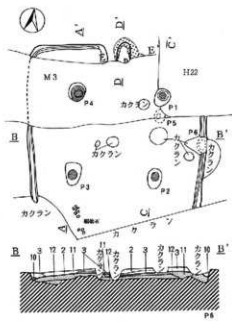
番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・修整	出土位置	
1	土師器杯	(16.4) (11.0) (3.9)	内 ミガキ→(黒色処理?) 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/8残存 内 10R5/4 (赤褐色) 外 10R5/4 (にぶい赤褐色)	1mm以下の石英・長石粒子を含む。	I区、壁方	
2	土師器杯	(17.6) — 4.3	内 ミガキ→(黒色処理?) 外 口縁部横ナデ→上半にミガキ→底部ヘラケズリ	口縁部一部残存 内 10R5/4 (赤褐色) 外 2.5YR7/4 (黄赤褐色)	1mm以下の石英・長石粒子を含む。		
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位置
3	礫物石	8.8	4.7	3.3	166	断面あり。安山岩。	
4	礫物石	8.0	6.2	4.3	280	断面あり。安山岩。	表探
5	礫物石	8.2	7.2	4.5	250	断面あり。安山岩。	
6	礫物石	8.8	5.0	3.0	176	断面あり。安山岩。	
7	礫物石	9.2	6.9	4.1	277	断面あり。安山岩。	
8	礫物石	11.2	6.0	4.5	382	断面あり。安山岩。	表探
9	礫物石	9.6	5.9	4.5	272	断面あり。安山岩。	
10	礫物石	9.8	5.0	3.9	215	断面あり。安山岩。	
11	礫物石	9.2	4.9	4.7	351	断面あり。チャート。	
12	礫物石	9.5	6.0	2.7	222	断面あり。安山岩。	
13	礫物石	10.3	5.7	2.8	220	断面あり。安山岩。	
14	未製品	3.3	2.2	0.2	2.2	黒色顔料安山岩。磨製石盤未製品か。刃部あり。	



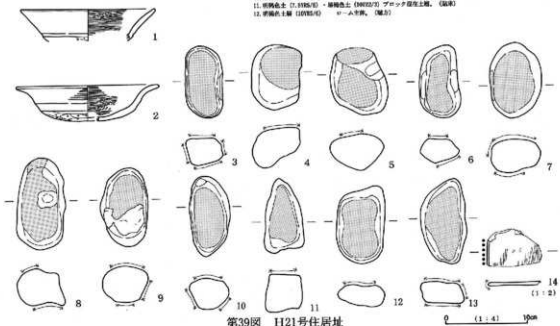
H21号住居址カマド (南より)



H21号住居址 (北より)



- H21 土層説明
- | | |
|----------------------------------|----------------------------|
| 1. 暗褐色土層 (H970/G) | ローン粘土・バミスを含む。 |
| 2. 暗褐色土層 (H975/G) | ローン粘土・バミスを含む。 |
| 3. 暗褐色土層 (H986/G) | ローン土。 |
| 4. 暗褐色土層 (T 970/G) | 粘土ブロック含む。 |
| 5. 暗褐色土層 (T 975/G) | 腐乱土、粘土ブロック・ローンブロック・バミスを含む。 |
| 6. 暗褐色土層 (H984/G) | ローン土層。(H975/G方) |
| 7. 暗褐色土層 (H982/G) | (H975/G方) |
| 8. 暗褐色土層 (H984/G) | (ベント底層土) |
| 9. 暗褐色土層 (H985/G) | ローン土層。(ベント底層土) |
| 10. 暗褐色土層 (H982/G) | (H975/G) |
| 11. 暗褐色土 (T 985/G)・暗褐色土 (H982/G) | ブロック散在土層。(H975/G) |
| 12. 暗褐色土層 (H985/G) | ローン土層。(H975/G) |



第39図 H21号住居址

であろうか。外面は口縁部横ナデ、底部ヘラケズリである。2の土師器杯は浅い丸底で外面にふいねを持つが内面は暖味な稜で、口縁部は大きく外反する。内面はミガキ調整され黒色処理が色変して褐色を呈しているようである。漏物石は南西床面の2カ所でまとも出土し、長径8-11cmと本遺跡では小振りの石が揃っている。14は石製模造品の未製品であろうか。

これらより本住居址は古墳時代後期に位置づけられよう。

22) H22号住居址 (第40~43図、第23表、図版12・13・47~49・58)

Gえ8グリットにあり、M3号溝に切られ、H21号住居址を切る。ローム層中に構築され、覆上は褐色を呈す。カマドを北縁中央に持ち、主軸方位はN-9°-Wである。南北長820cm、東西長812cm測る大規模な住居址である。カマドは両軸にカットして形を整えた安山岩を据え、黒褐色の粘土で覆い構築していた。カマド火床部上方の7層のカマド崩壊層からは白玉が5個まとまって出土した。

床面はロームを固め、締まっていた。壁下には周溝が巡る。主柱穴はP1~P4の4本で南北間460cm 東西間480cmの柱間を持つ。柱穴は異なった掘上り方をしている。P1とP4は大きく穴を掘り、埋め上をしながら柱を途中まで入れ、貼床と同時に柱を固定している。P2は柱を設置してから貼床をしている。P3は貼床の後に柱穴を掘り、柱を埋めている。P1は短径で96cm 深さ80cm、P2は短径56cm 深さ74cm、P3は短径56cm 深さ68cm、P4は短径112cmと深さ84cmを測る。柱痕は径16~24cm 程を測り深さは24~80cmとまちまちである。P1は写真で示したが土師器丸胴甕の口縁から胴部の破片を再利用して、柱材を固定したようである。カマドの東には長径92cm 短径64cm 深さ65cmの穴があり、東側は穴に沿って小堤状に高まりがあった。

出土遺物には弥生式土器、須恵器、土師器、彌物石、石皿(40)、黒曜石製石鏃(41)、滑石製白玉(42~46)、土製管玉(47)がある。弥生式土器は無彩の壺、赤色塗彩の壺・杯・高杯、襷指波状文や斜条痕の壺などの破片が多く出土している。東隣にS M11号周溝があるが同時期の遺物群である。

須恵器は壺・甕・杯・高杯等の破片があり、拓本に示した。34の須恵器杯は底部回転切削でロクロナデされるものであるが、検出面のもので流入品である。

土師器は杯(I~7)、高杯(8・9)、鉢(11~14・19)、小型甕(15・16)、丸胴甕(20~24)、壺(17・22・25~33)、甕(18)が実例個体である。杯類は完形品はなく、3・8・7が半分残っており、他は1/4程度である。3の杯は浅く小さめの底部で内外に稜を持ち屈曲し、口縁部は長く直線的に外傾する。8・7の高杯は杯部は浅く皿状で、3の杯を扁平にした器形である。30のミガキ甕は口縁部を欠損しているが、広く平らな底部で、全体にいびつである。25の甕は口縁部形「く」を呈し、胴部外面はわずかにミガキ調整される。最大径は同中以下にある。26~28の甕は長胴甕で口縁部が外傾外反するもので、最大径は口縁部に持っている。底径は大きい。31は台状の厚い底部に胴下部が窄まっている。

これらより本住居址は古墳時代後期に位置づけられよう。



H22号住居址カマドセクション(西より)



H22号住居址P4柱痕(南より)



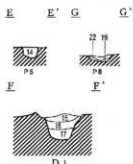
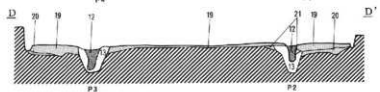
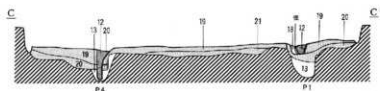
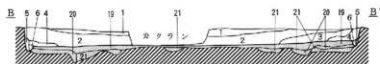
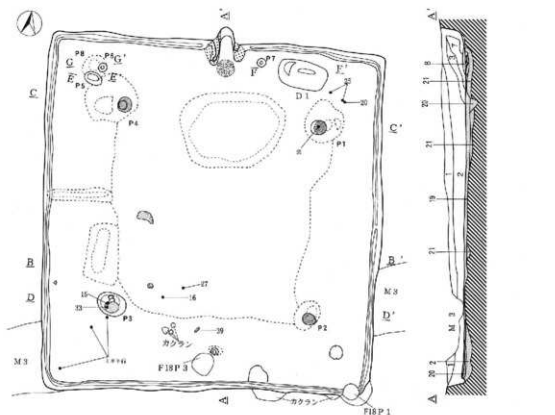
H22号住居址P1柱痕(北東より)



H22号住居址P1柱痕(北より)



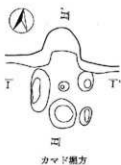
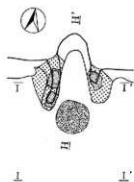
H22号住居址カマド副方(南より)



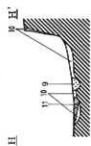
標高 710.00m
(1:50) 2m

- | | |
|---|---|
| <p>H22 上層部</p> <p>1. 黒褐色土層 (1992/2) □→△部手→1cmパシメを要す。</p> <p>2. 褐色土層 (1996/3) □→△部手→2部手→約1.5cm先のパシメを要す。</p> <p>3. 灰色・黒褐色土層 (1992/2) □→△部手→2部手→多く含む。</p> <p>4. 暗褐色土層 (1992/2) □→△部手→3cm先のパシメを要す。</p> <p>5. 褐色土層 (1996/4) □→△部手→パシメを要す。(内装)</p> | <p>6. 褐色土層 (1996/4) □→△部手。(内装部が所見)</p> <p>7. 暗褐色土層 (1992/2) □→△部手→約1.5cm先のパシメを要す。</p> <p>8. 黒褐色土層 (1992/2) □→△部手→約1.5cm先のパシメを要す。</p> <p>9. 黒褐色土層 (1992/2) □→△部手→約1.5cm先のパシメを要す。</p> <p>10. 黒褐色土層 (1992/2) □→△部手→約1.5cm先のパシメを要す。</p> <p>11. 黒褐色土層 (1992/2) □→△部手→約1.5cm先のパシメを要す。</p> <p>12. 黒褐色土層 (1992/2) □→△部手→約1.5cm先のパシメを要す。</p> <p>13. 黒褐色土層 (1992/2) □→△部手→約1.5cm先のパシメを要す。</p> <p>14. 黒褐色土層 (1992/2) □→△部手→約1.5cm先のパシメを要す。</p> |
|---|---|

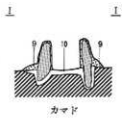
第40図 H22号住居址(1)



カマド断面



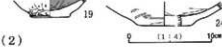
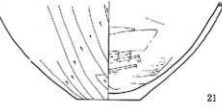
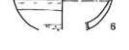
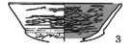
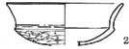
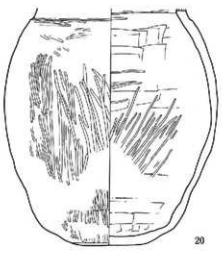
- 15. 褐色土層 (1078/4) ローム粒子・
～2cm程度のバリスを多数含む。(D1)
- 16. 黄褐色土層 (1078/2) ローム粒子・
～2cm程度のバリスを含む。(D1)
- 17. 濃い黄褐色土層 (1078/4) と黒褐色土
(1078/3) 黄褐色土層 (D1)
- 18. 濃い黄褐色土層 (1078/4)
ロームブロック含む。(D1)
- 19. 濃い黄褐色土層 (1078/4)
ローム土塊。(D1)
- 20. 黄褐色土層 (1078/2)
ローム粒子・バリスを含む。(D1)
- 21. 濃い黄褐色土層 (1078/4) 黒褐色土
(1078/3) ブロック含む。ローム土塊。(D1)
- 22. 褐色土層 (1078/4)
ローム・バリス・小石を含む。(D1)
- 23. 濃い黄褐色土層 (1078/4)
ローム土塊。(D1)



カマド

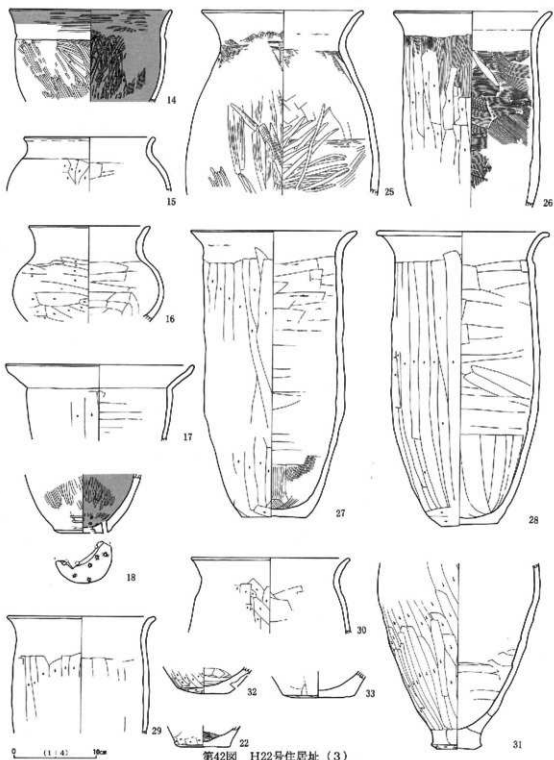
- 8. 灰層
- 9. 黄褐色土層 (1078/2) 粘土。(カマド断面上)
- 10. 褐色土層 (1078/4) 粘土ブロック含む。(カマド断面)
- 11. 褐色土層 (1078/4) 粘土。

標高 110.790m
(1.45) m

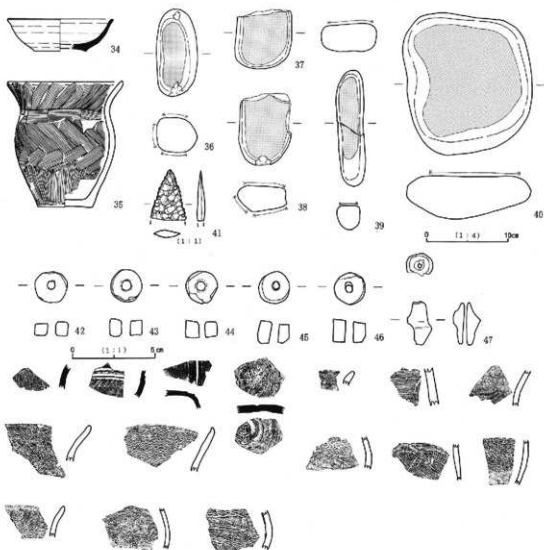


第41図 H22号住居址 (2)

0 (1.14) 10m



第42图 H22号位居址(3)



第43図 H22号住居址(4)

第23表 H22号住居址出土遺物一覽表

番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位置
36	磨物石	10.7	5.1	4.4	325	安山岩。磨面あり。	
37	磨物石	7.2	7.0	3.5	256	安山岩。*	P 8
38	磨物石	8.9	6.5	3.3	320	安山岩。*	壁区
39	磨物石	14.1	3.5	3.0	241	片岩。*	
40	台石	17.4	13.5	5.2	2,445	安山岩。擦面あり。	
41	石鏢	(1.6)	1.1	0.2	(0.4)	燧石。(中央下平欠、折損)	
42	(白土)	1.0	0.9	0.4	0.6		カマド
43	(白土)	1.0	0.9	0.5	0.8		カマド
44	(白土)	1.0	1.0	0.5	0.8		カマド
45	(白土)	0.9	0.9	0.7	1.0		カマド
46	(白土)	0.9	0.9	0.6	1.0		カマド
47	土製管玉	1.3	0.8	-	0.7		I区2層

第23表 H22号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存・色調	胎土・特徴	出土位置
1	土師器 杯	(14.4) — (3.6)	内 口縁部横ナデ→ミガキ(暗文風?) 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ ミガキ磨光か	口縁部1/16残存 内 5YR5/1(褐灰) 外 5YR6/3(にぶい橙)	微汚。	Ⅲ区
2	土師器 杯	(14.2) (12.2) (5.1)	内 横ナデ 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/8残存 内 7.5YR7/2(明褐灰) 外 7.5YR6/1(褐灰) 7.5YR6/3(にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子含む。	Ⅲ区
3	土師器 杯	(14.0) (9.7) (4.7)	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ→ミガキ 一部黒色処理	口縁部1/3残存 内 N2/0(黒) 外 10YR7/3(にぶい黄橙)	0.5mm以下の石英・長石粒子を少量含む。	カマド I区1・2層
4	土師器 杯	(14.6) (10.0) (3.9)	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部1/5残存 内 N3/0(灰) 外 5YR7/4(にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子を少量含む。	カマド
5	土師器 杯	(11.5) — (2.5)	内 ミガキ→黒色処理 外 ミガキ→黒色処理	口縁部1/2残存 内 7.5YR4/1(褐灰) 外 5YR5/3(にぶい赤褐) 7.5YR4/1(褐灰)	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子少量含む。	I区2層
6	土師器 杯	(12.2) — (3.8)	内 横ナデ 外 口縁下部ナデ→口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/8残存 内 5YR6/3(淡橙) 外 5YR8/3(淡橙)	1mmの赤色粒子含む。	Ⅱ区2層
7	土師器 杯	(13.8) — (4.0)	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/6残存 内 7.5YR7/6(橙) 外 7.5YR7/6(橙)	微汚。1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子少量含む。磨耗している。	カマド
8	土師器 高杯	(11.8) — (3.0)	内 ミガキ 外 杯口縁下部ヘラケズリ→口縁部横ナデ 口縁部横ナデ→杯下部分ヘラケズリ→一部ミガキ	口縁部1/2残存 内 7.5YR5/6(明褐) 外 7.5YR5/6(明褐)	1mmの黒色粒子、赤色粒子少量含む。	I区1層 Ⅳ区2層
9	土師器 高杯	(15.0) — (3.2)	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ→杯下部分ヘラケズリ→一部ミガキ	口縁部1/2残存 内 N2/0(黒) 外 7.5YR5/4(淡黄橙)	0.5mmの石英・長石粒子少量、 1mmの黒色粒子少量含む。	Ⅲ区 Ⅳ区2層 Ⅲ区区直
10	土師器 台付鉢	(9.0) (6.4)	内 杯部 ミガキ→黒色処理 脚部 ナデ→ミガキ ナデ→ミガキ	底部1/4残存 内 杯部 N4/0(灰) 脚部 7.5YR7/4(にぶい橙) 外 7.5YR7/4(にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子含む。	I区
11	土師器 鉢	(6.8) — (7.0)	内 横ナデ→部ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ→ヘラケズリ→部分的ミガキ	口縁部1/8残存 内 N3/0(暗灰) 外 7.5YR7/3(にぶい橙)	0.5mmの石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	I区2層 Ⅳ区2層
12	土師器 鉢	— — (6.4)	内 ミガキ→黒色処理 外 ミガキ	底部1/3残存 内 N3/0(暗灰) 2.5YR5/3(にぶい赤褐) 外 5YR7/4(にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子を少量含む。 外面磨耗。	Ⅲ区
13	土師器 鉢	(14.2) — (7.3)	内 横ナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/8残存 内 10R6/6(赤橙) 10R5/3(赤褐) 外 10R5/3(赤褐) 10R5/2(灰赤)	3mm以下の赤色粒子含む。	Ⅳ区2層
14	土師器 鉢	(19.8) — (11.2)	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ→ミガキ 口縁部横ナデ→黒色処理	口縁部1/5残存 内 N1.5/0(黒) 外 5YR6/6(橙)	1mm以下の石英・長石粒子を少量含む。	I区
15	土師器 小型甕	(16.0) — (6.6)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/10残存 内 10YR5/1(褐灰) 外 7.5YR5/3(淡黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子含む。	Ⅲ区
16	土師器 小型甕	(14.9) — (11.7)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部2/3残存 内 7.5YR4/1(褐灰) 5YR6/2(灰褐) 外 5YR7/4(にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	Ⅲ区 Ⅳ区2層 M3
17	土師器 甕	(23.0) — (9.4)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/8残存 内 2.5YR7/4(淡赤橙) 7.5YR7/2(明褐灰) 外 2.5YR7/4(淡赤橙) 5YR6/2(灰褐)	6.5mm以下の石英・長石粒子、 3mm以下の赤色粒子を少量含む。 外面、磨耗著しい。	Ⅳ区2層
18	土師器 甕 (多孔)	(7.1) — (7.3)	内 ミガキ→黒色処理 外 胴部ヘラケズリ→ミガキ 底部ヘラケズリ→焼成前穿孔	底部1/2残存 内 N4/0(灰) 外 5YR6/3(にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。 焼成前に穿孔。8孔残る。	Ⅱ区2・3層 Ⅲ区

第23表 H22号住居址出土遺物一覧表

19	土師器 鉢	— (4.8) (2.4)	内 外	ヘラナデ→黒色処理 胴・底部ヘラケズリ	底部3/4残存 内 N4/0 (灰) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量、1mm以下の赤色粒子少量含む。	Ⅲ区
20	土師器 壺	— 9.2 (28.9)	内 外	ヘラナデ→ミガキ 胴部横ナデ・胴・底部ミガキ	底部4/5残存 内 2.5YR6/4 (にぶい橙) 2.5YR3/1 (暗赤灰) 外 2.5YR6/4 (にぶい橙) 2.5YR3/1 (暗赤灰)	1mm以下の石英・長石粒子、2mmの赤色粒子含む。	カマド Ⅰ区2層
21	土師器 壺	— 7.7 (11.9)	内 外	ヘラナデ 胴・底部ヘラケズリ	底部5/6残存 内 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	1mm以下の黒色粒子含む。 外面、下半部磨耗。	Ⅰ区 Ⅱ区2層 Ⅲ区
22	土師器 壺	— 6.8 (2.6)	内 外	ヘラナデ(紐目) 胴・底部外周ヘラケズリ	底部7/8残存 内 5YR6/1 (褐灰) 外 5YR6/3 (にぶい橙)	4mm以下の赤色粒子少量含む。 底部に木葉痕あり。	Ⅰ区
23	土師器 壺	— (9.0) (5.7)	内 外	ヘラナデ→ミガキ ミガキ	底部1/2残存 内 10YR7/1 (灰白) 外 5YR7/3 (にぶい橙)	きめ細かい。 内面、底部剥離。	Ⅰ区1・2層
24	土師器 壺	— (6.7) (2.9)	内 外	ヘラナデ 胴・底部共ナデ→部分的にミガキ	底部1/4残存 内 10YR6/2 (灰黄褐) N4/0 (灰) 外 10YR6/2 (灰黄褐) N4/0 (灰)	1mm以下の石英・長石粒子、1mmの黒色粒子含む。	Ⅰ区
25	土師器 壺	19.9 — (22.6)	内 外	口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ→胴下半 ミガキ 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ(紐目)→ 胴下半ミガキ	口縁部定形 内 5YR4/1 (褐灰) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子を少量含む。	Ⅰ区1・2層
26	土師器 壺	19.5 — (23.8)	内 外	胴部ヘラナデ(紐目)→口縁部横ナデ ヘラナデ・ヘラケズリ→口縁部横ナデ	口縁部3/4残存 内 7.5YR7/2 (明褐灰) 外 10YR6/3 (浅黄橙) 7.5YR5/2 (灰褐)	1mm以下の石英・長石粒子、2mm以下の赤色粒子を含む。	Ⅲ区 Ⅳ区1・2層
27	土師器 壺	20.3 7.8 35.0	内 外	胴部ヘラナデ→口縁部横ナデ→胴下半→ 底部ヘラケナデ 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ・底部ナ デ	底部4/5残存、底部定形 内 7.5YR5/1 (褐灰) 7.5YR5/2 (灰褐) 外 5YR5/4 (にぶい橙) 7.5YR3/6 (にぶい褐)	1mm以下の石英・長石粒子を含む。 1mmの黒色粒子を少量含む。 底部外面に木葉痕あり。	Ⅰ区1・2層 Ⅲ区 Ⅳ区2層
28	土師器 壺	(21.1) 6.7 35.0	内 外	口縁部横ナデ→胴・底部ヘラナデ 口縁部横ナデ→胴・底部ヘラケズリ	底部3/4、口縁部1/2残存 内 7.5YR6/2 (灰褐) 外 7.5YR7/3 (にぶい橙)	1mmの黒色粒子少量含む。 底部に木葉痕あり。	Ⅰ区1・2層 Ⅱ区2層、Ⅳ 区1・2・3 層
29	土師器 壺	(18.0) — (4.3)	内 外	口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/3残存 内 5YR6/3 (にぶい橙) 外 5YR6/3 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、赤色粒子少量含む。	カマド Ⅰ区2層 Ⅳ区2層
30	土師器 壺	(19.4) — (9.3)	内 外	口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 7.5YR6/2 (灰白) 外 5YR7/3 (にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子、黒色粒子、赤色粒子を含む。 小石を含む。	カマド
31	土師器 壺	— (6.0) (22.7)	内 外	ハケナデ 底部外周横ナデ→胴・底部ヘラケズリ	底部1/2残存 内 2.5YR6/4 (にぶい橙) 外 2.5YR5/3 (にぶい赤褐)	0.5mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。1mmの赤色粒子多く含む。内面、磨耗。	カマド Ⅰ区2層 Ⅳ区2・3層
32	土師器 壺	— 6.4 (3.3)	内 外	ヘラナデ ヘラケズリ	底部定形 内 10R6/4 (にぶい赤橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	1mm以下の赤色粒子含む。	Ⅲ区
33	土師器 壺	— (8.7) (3.2)	内 外	ナデ ヘラナデ	底部1/3残存 内 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 5YR6/3 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子を多量、1mm以下の黒色粒子、赤色粒子を少量含む。磨耗している。	
34	須恵器 鉢	(13.0) (6.4) (3.9)	内 外	ロクロナデ ロクロナデ→底部回転糸きり	口縁部1/6残存 内 5YR7/3 (にぶい橙) 外 7.5YR6/4 (浅黄橙)	1mmの黒色粒子含む。 1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子少量含む。	検出
35	赤生土器 壺	(14.1) 6.7 15.3	内 外 文 文	横位ミガキ 口縁部横ナデ・胴下半・底部ミガキ 口縁部 7～8本1組とする磨損斜走 文 胴部 12～13本1組とする磨損斜走 文→逆止めを施す。 胴部 11～12本1組とする磨損斜走 文を施す。	口縁部7/8、底部2/3残存 内 10YR6/3 (浅黄橙) 外 10YR6/3 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子を含む。	Ⅰ区 Ⅲ区 Ⅳ区2層

23) H23号住居址 (第44・45図、第24表、図版13・49・50・58)

円正坊Ⅳの調査区全体では西側のⅠい8グリットにあり、最も高いH22号住居址からみると3m程低い地点にある。低地であるためローム層の上に黒褐色土が堆積し、遺構構築面である。遺構はローム層中にまで掘り下げて構築される。覆土は黒褐色を呈す。地盤のズレの影響を受け、壁中位、堀方で移動している。壁中位は南壁最大28cmズレが残っている。下方のズレは堀方のセクションからみると、柱穴が最下部まで掘れていないので、ズレがあるかと思われるが堀方で柱穴のズレは確認できなかった。

カマドは北壁中央よりやや東に寄っている。主軸方位はN-29°-Eを指す。南北長488cm、東西長434cmを測り、長方形を呈す。カマドは黒褐色粘土で構築され、両袖がわずかに残っていたが、地盤のズレに影響され崩れ壊された。カマド付近から中央付近まで床直上は炭化物層に覆われていた。壁下には周溝が巡る。床は暗褐色土ブロックを貼り、締まっていた。柱穴は主柱穴がP1~P4で南北柱間は260cm 東西柱間240cmを測る。柱穴は短径32cm~44cmを測る。P9にも柱痕がみられた。カマドの東、北西隅は130×110cmの方形範囲で7cmほど台状に高くなり、中央に70×50cmの楕円形で深さ26cmのP5がある。P6・P7・P8南東と北西隅にあり、黒色土が堆積していた。

出土遺物には弥生式土器、須恵器、土師器、礫物石がある。弥生式土器は赤色塗彩の甕がある。須恵器は実測した須恵器甕口縁部と、拓本に示した甕、甕の破片がある。1の須恵器甕は小型品で口縁部は折り返して、帯状になっている。拓本の甕は外面タタキ調整され、内面は自然釉で調整が見えないが、胎土分析では陶包産とされている。

土師器は杯(2~4)、鉢(5~7)、甕(8~18)、甗(20)がある。2の土師器杯は器高が深く、丸底から2/3に外縁を持ち、屈曲して、口縁部が内傾する須恵器杯身模倣の杯である。内面は口縁部横ナデ、底部ナデ、外面は口縁部横ナデ底部ヘラケズリ後わずかにミガキを施し、内外赤色塗彩している。3の杯は底径が大きく、丸底で中位に内外に縁を持ち、屈曲して口縁部は外反外傾し、端部は内湾する。内面は横ナデ・ナデ調整後ミガキに近い放射状暗文を施し、黒色処理をしている。外面は口縁部は横ナデのまま、底部ヘラケズリ後ミガキ調整される。4の杯は器形は類似するが内外面口縁部横ナデ、底部ナデ調整である。本住居址の杯はいずれも薄手である。8の甕は口縁部形は「く」字形を呈し、胴中位に最大径をもつ。9は口縁部が全体に大きく外反している。10の丸胴甕は外面にハケ調整のままである。13の甕は薄手で、口縁部があまり外反せず直線的である。外面のヘラケズリは所々に全面に施していない。甗の可能性もある。20の甗は逆「ハ」字形を呈し、一孔の小型品である。口縁部横ナデ後、胴部はヘラケズリされる。

21の手ずくねは器高3.7cmの小品で、圧痕を残してナデ調整される。

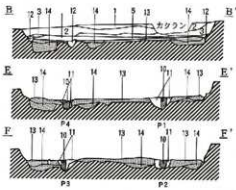
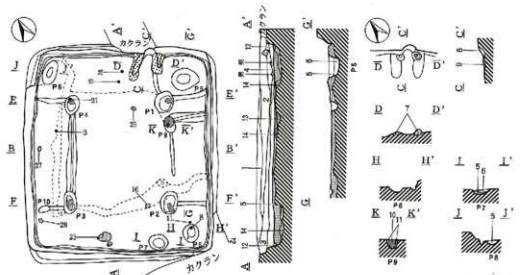


H23号住居址カマド・P6 (南より)

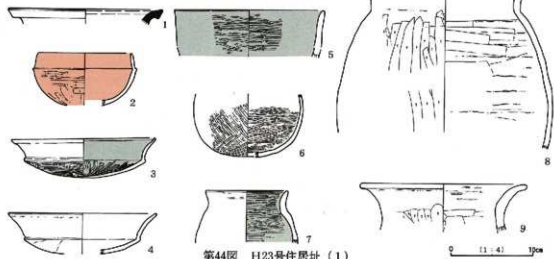


H23号住居址カマド堀方 (南より)

これらより本住居址は古墳時代後期に位置づけられよう。



- 223 十層切
1. 黒褐色土層 (10102/70) ロームのナ・バニスむすかに含む。
 2. 黒褐色土層 (10102/70) ロームアブロック・バニス多く含む。
 3. 黒褐色土層 (10102/70) ローム粘土・バニス含む。
 4. 黒褐色土層 (10102/70) 腐葉土・泥土アブロック含む。
 5. 黒褐色土層 (10102/70) ローム粘土・バニスまじりに含む。
 6. 黒褐色土層 (10102/70) ロームアブロック含む。(P6)
 7. 黒褐色土層 (10102/70) 粘土。(50マド製成)
 8. 黒褐色土層 (10102/70) 粘土・粘土質小石含む。(50マド製成)
 9. 灰・炭化層。
 10. 黒色土層 (10102/70) (焼成)
 11. 黒色土層 (10102/70) ロームアブロック土層。まじりに黒褐色土ブロック含む。(ピット埋込土)
 12. 黒褐色土層 (10102/70) ロームアブロック含む。(灰層)
 13. 黒色土層 (10102/70) ロームアブロック・黒褐色土ブロック製成。腐葉土。(焼成)
 14. 灰色質物色土層 (10102/70) ローム土層。(焼成)
- 断面上に状況・形状の異なるあり減少家屋である。



第44図 H23号住居址 (1)

第24表 H23号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位置
1	須恵器 壺	(18.9) — (1.8)	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	口縁部1/5残存 内 N7/0 (灰白) 外 N5/0 (灰)	緻密。 外面に、自然輪付着。	Ⅱ区5層
2	土師器 杯	(11.2) — (6.4)	内 口縁部横ナデ→淡い赤色塗彩 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ→ヘラナ デ→一部にミガキを施す→赤色塗彩	口縁部3/8残存 内 10R5/6 (赤) 外 10R6/6 (赤黄)	1mmの石英・長石粒子、赤色粒子 を含む。	Ⅱ区2・5層 Ⅱ区床
3	土師器 杯	17.5 14.7 4.9	内 横ナデ→みこ部に放射状暗文を施し、 黒色処理 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ→ヘラミ ガキ	ほぼ完形 内 N3/0 (暗黒) 外 5YR7/4 (淡赤橙) 10YR7/3 (にぶい黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒 色粒子、赤色粒子を含む。 3mm以下の小石を含む。	Ⅳ区5層
4	土師器 杯	(18.2) (14.2) (5.0)	内 横ナデ 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ→ナデ	口縁部1/8残存 内 7.5YR7/3 (にぶい黄) 外 7.5YR8/4 (にぶい黄)	石英・長石粒子、赤色粒子、黒 色粒子を含む。	Ⅱ区 Ⅳ区2層
5	土師器 鉢	(18.4) — (5.7)	内 ミガキ→黒色処理 外 ミガキ→黒色処理	口縁部1/6残存 内 5YR1.7/1 (黒) 外 5YR2/1 (黒)	0.5mm以下の石英・長石粒子、 石英を含む。	Ⅱ区
6	土師器 鉢	— — (7.7)	内 ミガキ 外 ミガキ	底部はほぼ完形 内 10YR7/3 (にぶい黄橙) 外 10YR8/3 (浅黄橙)	3mm以下の黒色粒子、1mm以下 の赤色粒子を含む。	Ⅱ区床 検出
7	土師器 鉢	(10.0) — (6.3)	内 ミガキ→黒色処理 外 ミガキ	口縁部1/2残存 内 5YR2/1 (黒)	0.5mm以下の石英・長石粒子、 黒色粒子少量含む。	カマド Ⅳ区2層
8	土師器 壺	(21.2) — (20.6)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/2残存 内 7.5YR7/2 (明褐色) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	1mm以下の黒色粒子、石英・長 石粒子少量含む。 5mm以下の赤色粒子を含む。	Ⅱ区5層 検出
9	土師器 壺	(20.4) — (5.9)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ→口縁部 ミガキ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/5残存 内 5YR7/3 (にぶい黄) 外 5YR7/3 (にぶい黄)	1mm以下の石英・長石粒子、赤 色粒子、黒色粒子を含む。	カマド Ⅳ区2層 検出
10	土師器 壺	— — (19.9)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 胴部ヘラケズリ→口縁部横ナデ	頸部1/3残存 内 5YR7/4 (にぶい黄) 外 5YR7/4 (にぶい黄)	3mm以下の黒色粒子、赤色粒子 を含む。1mm以下の石英・長石粒 子を含む。	Ⅱ区5層 Ⅳ区5層
11	土師器 壺	— — (7.5)	内 口縁部横ナデ→胴部ミガキ 外 口縁部ミガキ→胴部ヘラナデ→一部ミ ガキ→頸部暗文	破片 内 5YR7/4 (にぶい黄) 外 5YR7/4 (にぶい黄)	1mm以下の石英・長石粒子、黒 色粒子を含む。	Ⅱ区5層
12	土師器 壺	(7.2) — (3.5)	内 ヘラナデ 外 胴部ヘラケズリ	口縁部1/2残存 内 7.5YR7/3 (にぶい黄) 外 10YR7/2 (にぶい黄橙)	1mm以下の赤色粒子、石英・長 石粒子、黒色粒子を含む。	Ⅳ区2層
13	土師器 壺	(21.2) — (11.7)	内 口縁部横ナデ→ヘラナデ→一部ミガキ 外 口縁部横ナデ→部分的に胴部ヘラケ ズリ	口縁部1/3残存 内 7.5YR8/6 (浅黄橙) 外 7.5YR8/6 (浅黄橙)	1mmの赤色粒子を含む。	Ⅱ区2層 Ⅱ区床
14	土師器 小型壺	(12.1) — (9.5)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/3残存 内 7.5YR8/3 (浅黄橙) 外 7.5YR8/4 (浅黄橙)	1mmの赤色粒子、黒色粒子を含む。	カマド
15	土師器 小型壺	— (6.4) (5.4)	内 ヘラナデ 外 胴部ナデ→胴部下半→底部ヘラケズリ	底部1/3残存 内 7.5YR7/2 (明褐色) 外 5YR4/1 (褐灰)	1mm以下の黒色粒子、石英・長 石粒子、赤色粒子を含む。 小石を含む。	Ⅳ区
16	土師器 壺	5.1 — (5.2)	内 ヘラナデ (紐目の工具使用) 外 胴部ヘラケズリ	底部完形 内 5YR5/3 (にぶい黄) 外 5YR7/4 (にぶい黄)	1mmの石英・長石粒子、黒色粒 子、赤色粒子多く含む。	Ⅱ区2層 Ⅱ区
17	土師器 壺	— (6.8) (4.7)	内 ヘラナデ 外 胴部ヘラケズリ	底部1/3残存 内 10YR8/3 (浅黄橙) 外 10YR8/3 (浅黄橙)	1mm以下の赤色粒子、黒色粒子 石英・長石粒子少量含む。	Ⅱ区2層 Ⅱ区
18	土師器 壺	— 5.5 (3.1)	内 ヘラナデ 外 胴部ヘラケズリ	底部3/4残存 内 5YR8/4 (淡橙) 外 5YR7/3 (にぶい黄)	1mm以下の黒色粒子、石英・長 石粒子を含む。	Ⅱ区
19	弥生土器 壺	— (7.6) (2.9)	内 ヘラナデ 外 胴部 淡い赤色塗彩 底部 ヘラケズリ	底部1/3残存 内 5YR7/6 (橙) 外 2.5YR5/6 (明赤)	1~2mmの赤色粒子多量含む。 1mm以下の石英・長石粒子少量 含む。	Ⅳ区5層
20	土師器 甕	(17.8) (5.4) 16.9	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ 一孔。	口縁部1/2、底部1/4残存 内 2.5YR6/4 (にぶい黄) 7.5YR8/3 (浅黄橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙) 7.5YR7/2 (明褐色)	1mm以下の石英・長石粒子少量 5mm以下の赤色粒子多量含む。	カマド P.5・6 Ⅳ区2・5層
21	土師器 手捏	4.8 2.6 3.7	内 ナデ 外 ナデ	ほぼ完形 内 10YR7/3 (にぶい黄橙) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	1mm以下の黒色粒子、赤色粒子 を含む。	Ⅱ区
31	土師器 杯	11.3 — (3.3)	内 口縁部横ナデ→底部ナデ 外 口縁部横ナデ→底部手持ちヘラケズリ	1/4残存 内 5YR4/3 (にぶい赤褐) 外 5YR3/2 (暗赤褐)	1mm大の長石粒を含む。 緻密 須恵器杯身模倣	Ⅱ区

第24表 H23号住居址出土遺物一覧表

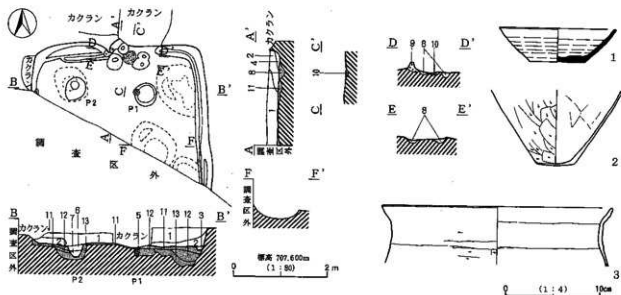
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位置
22	礫物石	8.6	4.3	2.2	131	擦面あり。安山岩。	Ⅱ区
23	凹石	13.5	11.3	3.6	880	安山岩。	
24	礫物石	12.7	4.4	2.8	205	擦面あり。安山岩。	
25	礫物石	10.3	5.1	3.7	305	擦面あり。安山岩。	
26	礫物石	11.8	5.0	4.7	401	擦面あり。チャート。	
27	礫物石	9.1	5.5	3.2	194	擦面あり。安山岩。	
28	礫物石	11.3	7.5	5.7	710	擦面あり。硬砂岩。	
29	礫物石	11.0	6.1	3.9	310	擦面あり。安山岩。	Ⅱ区5層
30	礫物石	10.6	5.7	4.6	328	擦面あり。安山岩。	

24) H24号住居址 (第46図、第25表、図版14・50)

10グリットにあり、南半城は区域外で調査できなかった。H25号住居址を切り、カマド付近は擾乱により上部を壊される。黒褐色土層中から構築され、ローム層中まで掘り込まれる。本址では地盤のズレはなかった。南北残長250cm、東西長332cmの小規模な住居址である。主軸方位はN-3°-Wで北を指す。カマドは北壁中央にあったが道路の掘溝により壊され、火床とわずかに西基部分が残った。カマドは暗褐色粘土で構築され、火床部には焼土がみられた。北と東の壁下には周溝が巡る。柱穴は北側2本の主柱穴が検出された。

出土遺物は少なく、弥生式土器、須恵器、土師器である。弥生式土器は赤色塗彩の甕、柳桶斜条痕の甕が数片ある。実測資料は須恵器杯(1)、土師器甕(2・3)がある。須恵器杯はロクロナゲされ、底部は回転糸切り離しである。土師器甕は武蔵甕で、3の口縁部形は「コ」字形を呈している。

これらより本址は平安時代に位置づけられよう。



H24 土層説明

1. 黒褐色土層 (01932/2) ローム粒子含む、~1cmスベリス多量を含む。
2. 黒褐色土層 (01932/3) パリス1層より多く含む。
3. 黒褐色土層 (01933/2) ローム粒子・パリス含む。(両側)
4. 暗褐色土層 (7.01933/3) 腐葉土。(カマド構築土)
5. 黒褐色土層 (01932/3) 焼土。
6. 暗褐色土層 (01932/3) 粘土ブロック多量を含む。(P2)

7. 黒褐色土層 (01933/2)
8. 暗褐色土層 (01933/3)
9. 暗褐色土層 (7.01933/3)
10. 暗褐色土層 (01933/4)
11. 暗褐色土層 (01933/2)
12. 黒褐色土層 (01933/3)
13. 黒褐色土層 (01933/3)

- 粘土ブロック・パリス含む。(P2)
 粘土ブロック・粘土ブロック・パリス含む。(カマド構築土)
 粘土。(カマド構築土)
 焼土。
 腐葉土ブロック・ロームブロック含む。跡まる(焼土)
 ロームブロック含む。(両側)
 ローム主体に黒褐色土ブロック含む。(両側)

第46図 H24号住居址

第25表 H24号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位置
1	須恵器 杯	(12.4) (5.9) 3.5	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ-底部回転糸きり	口縁部-底部1/2残存 内 N8/0 (灰白) 外 N8/0 (灰白)	1mm以下の石英・長石粒子含む	I区 II区2層
2	土師器 壺	- (4.0) (7.9)	内 ヘラナデ 外 胴部ヘラケズリ-底部ヘラケズリ	底部1/2残存 内 2.5YR3/1 (暗赤灰) 外 2.5YR5/6 (明赤灰) 2.5YR7/3 (にぶい橙)	0.5mm以下の石英・長石粒子、 黒色粒子少量含む。	カマド IV区2層
3	土師器 壺	(24.5) - (6.1)	内 口縁部横ナデ-胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ-胴部ヘラケズリ	口縁部1/8残存 内 2.5YR7/4 (淡赤橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	緻密。 1mm以下の赤色粒子を含む。	II区2層

25) H25号住居址 (第47図、第26表、図版14・50・58)

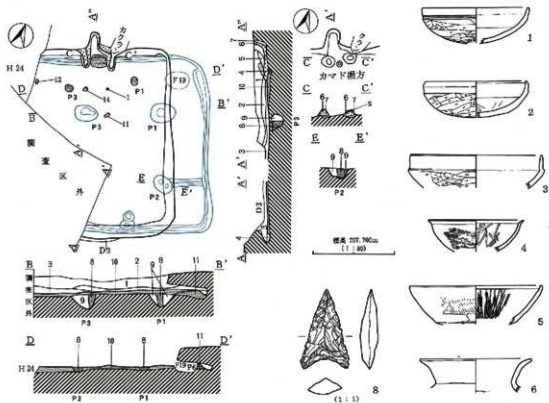
I 10グリットにあり、南西区は調査区域外で未調査、西壁をH24号住居址、D3号土坑に上部を切られる。地盤のズレの影響で、床面または貼床面レベルで西に100cm程移動していた。南・北にも20~30cmずれている。従って住居址の規模は明確ではない。移動した家の南北長をみると、430cmを測り、下面の住居址の南北長は416cmである。東西残長436cmではば形状を呈すであろう。カマドは北壁にあり、主軸方向はN-23°-Wである。壁下には周溝が巡る。P2と壁間には間仕切り溝がある。カマドは暗褐色粘土で構築され、内側は焼けて赤褐色を呈す。カマド堀方は移動のためやや東に残っていた。

出土遺物には弥生式土器、須恵器、土師器、鉄滓、石鏝がある。土器の出土量は少ない。弥生式土器は赤色塗彩の壺、柳指波状文の甕がある。須恵器は拓本に示した3点で波状文の施される壺口縁、17は壺の頸~肩部片で自然釉のため外面の調整がよく見えないが、刻み目状の押痕、内面は口縁部横ナデ、胴部ナデ調整される。これは胎土分析の結果陶色産とされる。土師器は杯(1~4)、高杯(5)、壺(6・7)が実測資料である。1~3の土師器杯は須恵器杯身の模倣杯で、丸い底部から2/3の位置に外縁を持ちわずかに屈曲して、口縁部が直立ないし内傾するものである。口縁部は内外横ナデ、内面底部はナデ、外面はヘラケズリされる。4の杯、5の高杯、6の壺は前代の混入品であろう。7の壺は外面ヘラケズリ、内面ナデである。

これらより本住居址は古墳時代後期に位置づけられよう。

第26表 H25号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位置	
1	土師器 杯	13.2 - (4.3)	内 みこみ部ナデ-口縁部横ナデ 外 口縁部横ナデ-底部ヘラケズリ	口縁部完形 内 7.5YR6/3 (にぶい橙) 外 7.5YR8/3 (浅黄橙)	1mmの石英・長石粒子、赤色粒子、石英含む。	I区	
2	土師器 杯	(12.4) - 4.4	内 みこみ部ヘラナデ-口縁部横ナデ 外 口縁部横ナデ-底部ヘラケズリ	口縁部1/2残存 内 10YR6/2 (灰黄褐) 外 10YR6/3 (にぶい黄橙)	1mmの赤色粒子含む。	I区 IV区1層	
3	土師器 杯	(16.2) - (4.0)	内 横ナデ 外 口縁部横ナデ-底部ヘラケズリ	口縁部1/6残存 内 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 7.5YR7/3 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、赤色粒子含む。	I区	
4	土師器 杯	(11.8) - (3.9)	内 横ナデ-端文ミガキ 外 口縁部横ナデ-胴部ヘラケズリ-ミガキ	口縁部1/7残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	緻密。	IV区	
5	土師器 高杯	(16.2) (9.9) (4.7)	内 横ナデ-放射状暗文 外 口縁部ハケナデ? -横ナデ-杯下部ヘラケズリ	口縁部1/8残存 内 2.5YR5/4 (にぶい橙) 外 2.5YR5/4 (にぶい橙)	緻密。 1mm以下の黒色粒子、石英・長石粒子、赤色粒子含む。	検出	
6	土師器 壺	(13.8) - (4.1)	内 口縁部横ナデ-胴部ヘラナデ 外 横ナデ	口縁部1/7残存 内 7.5YR7/2 (明褐灰) 外 7.5YR7/2 (明褐灰)	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子含む。	II区掘方	
7	土師器 壺	(3.8) (2.9)	内 ヘラナデ 外 胴-底部ヘラケズリ	底部1/2残存 内 5YR8/4 (淡橙) 外 5YR7/3 (にぶい橙)	2mm以下の赤色粒子含む。	II区	
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位置
8	石鏝	2.4	1.5	0.6	1.4	灰色チャート。	IV区2層
9	鉄滓	2.3	2.2	1.4	3.7		IV区1層
10	鉄滓	6.4	4.4	2.5	51.6		
11	礫石	10.6	7.7	5.0	173	軽石。	
12	礫石	11.7	8.2	5.9	369	軽石。	
13	礫石	11.2	6.6	5.6	235	滑結凝灰岩。	
14	礫石	9.8	8.9	4.1	179	軽石。	
15	礫石	5.6	4.7	3.9	38	軽石。	
16	礫石	8.8	5.0	2.3	82	凝砂岩。	



1. 暗褐色土層 (1096/2) ローム粒子・3mm未満の石多量を含む。
 2. 黒褐色土層 (1092/2) ローム粒子・バクテリア。
 3. 褐色土層 (1096A/2) ロームブロック含有。
 4. 黒褐色土層 (1096/2) ローム粒子・バクテリア。[陶器]
 5. 暗褐色土層 (1. 1092/2) 燧石・燧石片を含む。[コップ破片]
 6. 黒褐色土層 (1. 1092/2) 燧石。[コップ破片]
 7. 黒褐色土層 (1092/2) [コップ破片]
 8. 黒褐色土層 (1092/2) [陶器]
 9. 土質褐色土層 (1096/2) ロームブロックに黒褐色土ブロックを含む。
 10. 黒褐色土層 (1. 1092/2) ロームブロックに黒褐色土ブロックを含む。
 11. 黒褐色土層 (1092/2) 黄褐色ローム (1096/2) 粗粒土層 [陶器]



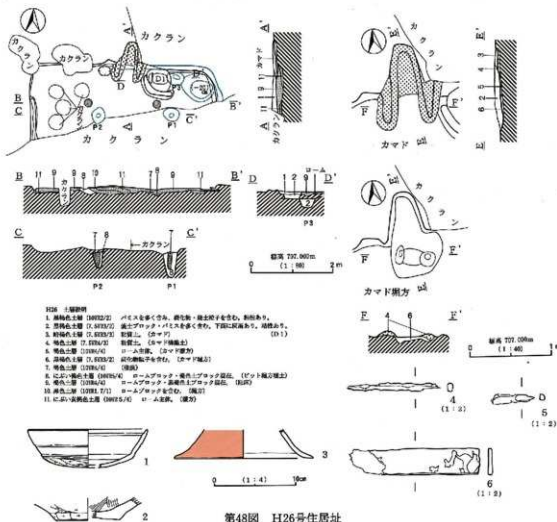
第47図 H25号住居址 (1)

26) H26号住居址 (第48図、第27表、図版15・51)

1こ6グリットにあり、南は掘削と調査区域外であるため、北側の調査をした。ルーム中に構築され、覆土は黒褐色を呈す。地盤のズレの影響を受け、柱穴等がずれて検出された。カマドは北壁中央にあり、主軸方位はN-12°-Wである。南北178cmを調査し、東西長440cmを測る。カマドは暗褐色粘土で構築され煙道とわずかに袖が残った。主柱穴は北側の2本が検出され、径24・30cmのビットに径16・12cmの柱痕が確認された。深さは56・70cmを測る。また北東隅に径56cmを測る隅丸方形のビットがあり、穴に沿って南側は小堤状になっている。深さ40cmを測り、地盤のズレで、中位でズレている。

出土遺物は弥生式土器、土師器、鉄製品である。弥生式土器は赤色塗彩された高杯の脚部(3)である。土師器は杯(1)、壺(2)がある。1の杯は浅い丸底から内外に襷を持ち、口縁部が直線的に外傾するもので、口縁には沈線に近い段が施される有段口縁杯である。内面口縁部横ナア、底部ナア、外面口縁部横ナア、底部ヘラケズリされ、内外とも焼けたような黒色を呈す。2は丸胴壺の底部である。破片ではH23号住居址の10と同じハケ目を残す丸胴壺の破片がある。鉄製品は、断面長方形の4・5は刀子などの中葉部と思われるが腐食も激しく分からない6は幅1.6cm、厚さ0.3cmの板状のものである。

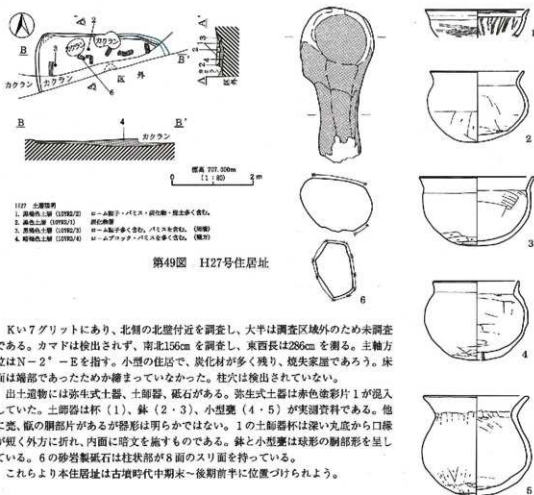
これらより、本住居址は古墳時代後期に位置づけられよう。



第27表 H26号住居址出土遺物一覧表

番号	品名	法量	形状・調整	残存品・色調	胎土・特徴	出土位置	
1	土師器 杯	(14.6) (10.9) (4.6)	内 みこみ縁ナデー(口縁部残ナデ) 外 口縁部残ナデ・底部ヘラケズリ 口縁部に2条の浅割あり。	口縁部1/3残存 内 10YR8/2 (灰白) 外 7.5YR8/2 (灰白) 7.5YR7/2 (明褐色)	1mmの赤色粒子含む。	Ⅱ区、西	
2	土師器 壺	— (7.8) (2.7)	内 ハケナデ 外 衝・底部ヘラケズリ	底部1/4残存 内 2.5YR7/4 (淡赤橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙) 10YR7/3 (にぶい黄橙)	顕著。 1mmの石英・長石粒子、黒色粒子含む。	西	
3	弥生土器 高杯 (両部)	— (17.0) (3.5)	内 ナデー(口縁部残ナデ) 外 ミガキ(濃い赤色塗彩)	口縁部1/7残存 内 10YR8/3 (淡黄橙) 外 2.5YR4/8 (赤銅)	顕著。 0.5mm以下の石英・長石粒子、 1mm以下の黒色粒子含む。	P1	
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位置
4	鉄製品	(5.8)	0.5	0.4	1.8		検出
5	鉄製品	(2.2)	0.4	0.3	0.9		
6	鉄製品	(8.0)	1.6	0.3	14.3		検出

27) H27号住居址 (第49図、第28表、図版15・18)



第28表 H27号住居址出土遺物一覽表

番号	器種	法定	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地	
1	土師器 杯	(12.6) — (3.3)	内 横ナデ→口縁部ミガキ 口縁下部放射状滑文 外 口縁部横ナデ→口縁下部ミガキ	口縁部1/2残存 内 5YR7/4 (にぶい燈) 外 2.5YR7/4 (淡赤燈)	緻密。	E区、堀方	
2	土師器 鉢	11.4 — 8.6	内 胴～底部ヘラナデ→口縁部横ナデ 胴下半・底部ヘラケズリ→口縁～胴上 平部横ナデ	口縁部3/4残存 内 7.5YR5/2 (灰褐) 7.5YR5/4 (にぶい褐) 外 7.5YR6/6 (昏)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。		
3	土師器 鉢	(14.2) — 8.4	内 胴～底部ヘラナデ→口縁部横ナデ 外 胴部ナデ→口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	口縁部1/2残存 内 2.5YR7/6 (燈) 外 2.5YR7/4 (淡赤燈)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子、赤色粒子含む。 微小の石英含む。	検出	
4	土師器 小型壺	(10.6) (6.4) 9.6	内 胴～底部ヘラナデ→口縁部横ナデ 外 胴部ナデ→口縁部横ナデ・底部・底部外 周ヘラナデ	口縁部1/2残存 内 2.5YR7/4 (淡赤燈) 5YR5/2 (灰褐) 外 2.5YR7/6 (燈)	1mm以下の黒色粒子、石英・長石粒子含む。	検出	
5	土師器 小型壺	(12.8) 5.0 12.2	内 口縁部横ナデ→胴～底部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部上半ヘラナデ・胴部 下半・底部ヘラケズリ	口縁部1/4残存、底部完全形 内 2.5YR7/4 (淡赤燈) 外 2.5YR6/4 (にぶい燈)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。 磨耗著しい。	検出	
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位地
6	砥石	18.9	9.0	6.6	1460	砂岩	

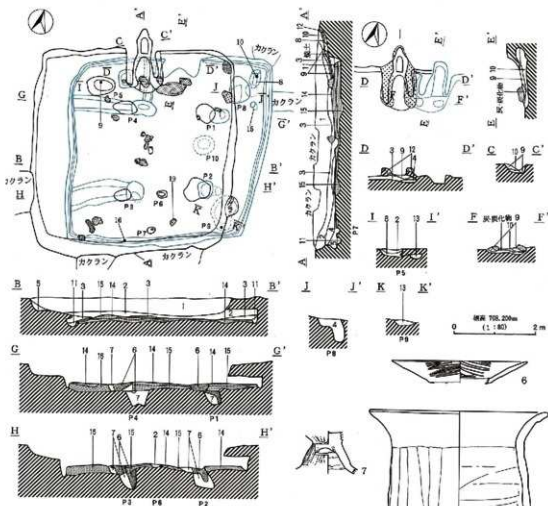
28) H28号住居址 (第50・51図、第29表、図版16・51・58)

Bこ2グリットにあり、SM10号周溝址、単P98・99・100を切る。地盤のズレにより西に60～100cm、北に20cm程移動している。またズレ残った移動前の住居は地盤のズレにより、方形がやや菱形に至っていた。地盤は、糞中位と、床下の2カ所で、大きくズレている。カマドは北壁中央にあり、主軸方位はN-13°-Wである。南北472cm、東西478cmの方形を呈する。カマドは袖、煙道が中位で西にズレ、わかりにくい状況であった。カマドはロームを掘り残して袖芯とし、先端に石を置き、その上に石を乗せ粘土で覆い突き口としたようである。主柱穴はP1～P4の4本があり、やはりズレていた。楕円形で東西径40cm～60cmの堀方に径16cmの柱痕がみられた。北西と北東隅にはビットがあり、P8は長径60cm、短径52cm、深さ56cmを測り隅丸方形を呈す。P8の東床面には8の壺が横倒しに、15の口縁と底部が欠損し筒状となった長胴壺が立てて据え置かれていた。北西のP5は長径72cmの楕円形を呈し、深さ24cmを測る。9の鉢が出土している。西の主柱穴P3・P4は壁から間仕切り溝が東西に、P4は北壁からも溝が続いている。

出土遺物には弥生式土器、須恵器、土師器、編物石、鉄製品がある。弥生式土器は赤色塗彩の壺片がある。16の瓶は弥生時代の瓶であるが上部を欠き、再利用したであろうか。

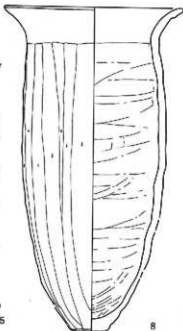
須恵器は1の高杯がある。褐灰色を呈し、杯下部にはカキ目が施される。土師器は杯(2～6)、高杯(7)、鉢(9)壺(10～15)がある。2の杯は浅い底部から明瞭な外稜を持ち、屈曲して口縁が外傾し、口縁中位に段をもつ有段口縁で、ナデ調整のまま黒色処理される。3は器高が深く、有段口縁杯の模倣であろうか、内外ミガキ調整され、内面は黒色処理される。4は厚く、器形が歪む。丸底から中位で緩やかな稜を持ち、少し屈曲して、口縁部が外傾する。内面はミガキ、外面口縁部横ナデ、底部ヘラケズリされる。8の壺は口縁部が外傾外反して、最大径を口縁に持つ長胴壺である。胎土に大きな石英やチャート粒を含み、胎土分析の結果、地元以外に産地が求められるとしている。15の壺は内外にハケ調整を残すものである。鉄製品は小穴が開く。

これらより、本住居址は古墳時代後期に位置づけられよう。



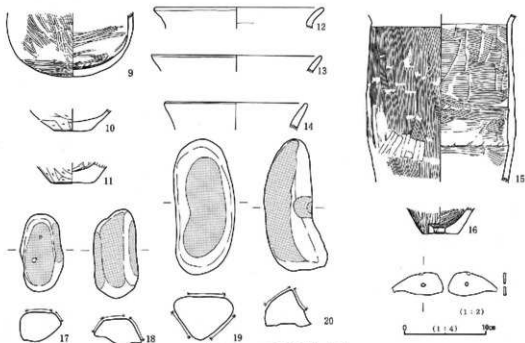
328 土層説明

- | | |
|----------------------|--|
| 1. 暗褐色土層 (T193/3) | ローム館下・～3m土バリス・こぼし土バリス、
屋上・段の堆積層等あり。 |
| 2. 暗褐色土層 (T193/2) | 1層上ローム館下層と連続。 |
| 3. 暗褐色土層 (T193/2) | ローム館下層と連続。 |
| 4. 暗褐色土層 (T193/2) | ローム館下・バリス多量に含む。 |
| 5. 褐色土層 (T194/4) | ローム館下層と連続。 |
| 6. 褐色土層 (T193/3) | ローム館下・バリス多量、(西側) |
| 7. 褐色土層 (T194/4) | ローム土層。 |
| 8. 暗褐色土層 (T193/2) | 多量の焼土ブロック・炭化植物子を含む。 |
| 9. 灰褐色土層 (T194/2) | 焼瓦土・焼土ブロック含む。(サマド底層) |
| 10. 灰褐色土層 (T193/2) | 焼土ブロック含む。(サマド底層) |
| 11. 褐色土層 (T193/2) | (西側) |
| 12. 江戸川埋め土層 (T193/4) | ローム遺土(サマド焼土) |
| 13. 褐色土層 (T194/4) | ローム館下層。(地下ビッド) |
| 14. 江戸川埋め土層 (T193/4) | ローム館下層・バリス含む。(西側) |
| 15. 江戸川埋め土層 (T193/4) | 灰褐色土ブロック含む。(西側) |
| 16. 褐色土層 (T194/4) | 多くのローム館下・バリス含む。(西側) |



第50図 H28号住居址(1)

0 (1:4) 10cm



第51図 H28号住居址(2)

第29表 H28号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法注	成形・調整	残存量・色調	胎土・粉微	出土位置
1	須恵器 高杯	(17.2) — (6.9)	内 杯部 ロクロナデ(→黒色処理?) 接合部ナデ(→黒色処理?) 外 ロクロナデ→杯部下部にかき目	口縁部1/3、接合部2/3残存 内 7.5YR5/1(地灰) NL5/0(黒) 外 7.5YR5/4(にぶい橙)	2mm以下の石英・長石粒子。石 灰、1mm以下の黒色粒子含む。 黒色処理か?	Ⅱ区 Ⅲ区1層 床
2	土師器 杯	(12.8) (9.6) (3.2)	内 横ナデ→黒色処理 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ (黒色処理か?)	口縁部1/8残存 内 5YR6/1(地灰) N3/0(地灰) 外 N2/0(黒) 5YR6/3(にぶい橙)	1mm以下の赤色粒子含む。	Ⅳ区磁方
3	土師器 杯	(13.2) (10.9) (4.5)	内 ミガキ→黒色処理 外 ミガキ→口縁上部黒色処理	口縁部1/4残存 内 NL5/ (黒) 外 7.5YR7/4(にぶい橙)	0.5cm以下の石英・長石粒子、 赤色粒子を少量含む。	Ⅱ区1層
4	土師器 杯	(13.0) (11.0) 4.8	内 ミガキ 外 底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ	口縁部1/4残存 内 5YR7/4(にぶい橙) 外 5YR8/4(淡橙)	4mm以下の赤色粒子多く含む。	Ⅲ区
5	土師器 杯	(14.6) — (2.4)	内 横ナデ 外 横ナデ→ハケナデ	口縁部1/10残存 内 7.5YR5/1(地灰) 外 7.5YR5/1(地灰) 附 10YR8/3(淡黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒 色粒子を少量含む。	Ⅲ区
6	土師器 杯	(16.6) (7.6) (2.7)	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/8残存 内 5YR7/4(にぶい橙) 外 5YR7/4(にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子を少 量含む。	Ⅰ区
7	土師器 高杯	— — (5.1)	内 杯部 ミガキ→黒色処理 脚部 調整ナデ→底部横ナデ 外 ヘラナデに近い大きなミガキ	破片 内 杯部 10YR17/1(黒) 脚部 10YR7/3(にぶい黄橙) 外 10YR7/3(にぶい黄橙)	1mm以下の黒色粒子、赤色粒子 含む。 4mm以下の石英・長石粒子含む。	Ⅲ区1層
8	土師器 壺	21.8 4.4 20.7	内 口縁部横ナデ→脚部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→脚部ヘラケズリ・底結木 痕あり	破片 内 10YR2/1(黒) 10YR4/2(灰黄緑) 外 10YR4/2(灰黄緑)	7mm以下の石英・長石粒子、1.2 ×0.8cm以下の灰色の鉱物、赤褐色 の土層片(?)など多量含む。	

第29表 H28号住居址出土遺物一覧表

9	土師器 鉢	— (7.8)	内外 ヘラナデ→ミガキ ミガキ	底部完形 内 2.5Y7/1 (灰白) 外 10YR7/1 (灰白) 10YR8/2 (灰白)	織帯。	P 8、Ⅱ区	
10	土師器 甕	4.6 (2.7)	内外 ナデ 胴部ヘラケズリ・底部木葉痕→ヘラケズ	底部完形 内 5YR5/2 (灰黒) 外 5YR5/2 (灰黒)	3×2mm程度の石英・長石粒子を多く含む。		
11	土師器 甕	(5.2) (2.5)	内外 ヘラナデ 胴・底部ヘラケズリ	底部1/2残存 内 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	Ⅲ区	
12	土師器 甕	(21.2) (2.6)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 横ナデ	口縁部1/2残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	0.5mm以下の石英・長石粒子少量含む。	Ⅱ区1層	
13	土師器 甕	(20.8) (2.0)	内外 横ナデ 横ナデ	口縁部1/8残存 内 10YR8/3 (浅黄橙) 外 10YR8/2 (灰白)	織帯。	P 8	
14	土師器 甕	(17.5) (3.4)	内外 横ナデ 横ナデ	口縁部1/6残存 内 5YR8/4 (浅橙) 外 7.5YR8/4 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子を少量、4mm以下の赤色粒子を含む。	Ⅳ区1層	
15	土師器 甕	— (20.5)	内外 胴部ハケメ→口縁部横ナデ 胴部ハケメ→口縁部横ナデ	胴部のみ残存 内 7.5YR6/4 (にぶい橙) 外 7.5YR7/4 (にぶい橙)	2mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子含む。		
16	弥生土師 甕	4.3 (3.2)	内外 ミガキ ミガキ	底部完形 内 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 7.5YR8/4 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子、赤色粒子、黒色粒子を含む。 一孔(焼成前穿孔)の痕。		
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備 考	出土位置
17	礫石	9.4	5.3	3.6	139	軽石。	Ⅳ区
18	礫物石	10.9	5.5	3.1	245	擦面あり。安山岩。	Ⅱ区2層
19	礫物石	16.5	7.6	5.1	980	擦面あり。安山岩。	
20	礫物石	16.0	7.7	4.5	960	擦面あり。安山岩。	Ⅱ区
21	?	(3.0)	(1.4)	0.1	0.9	鉄製品。	Ⅲ区

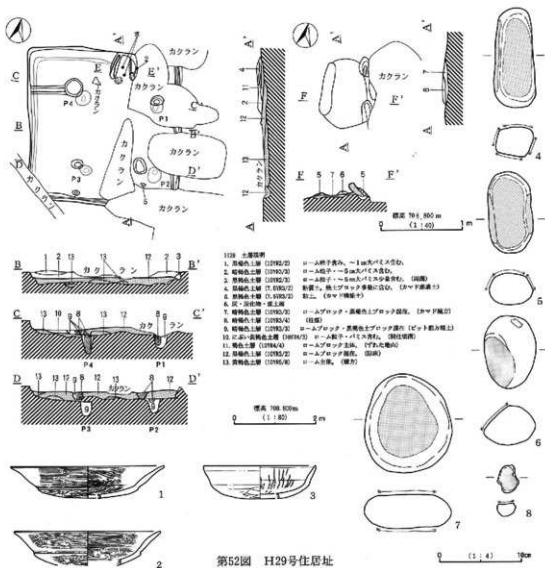
29) H29号住居址 (第52図、第30表、図版15・52)

Bお3グリットにあり、撚乱により多く壊されていた。西端は道路下であるため、2度にわたって調査した。地盤のズレの影響で、柱穴が中位でズレて検出された。F22号掘立柱建物址に切られ、単P106を切る。カマドは北壁中央よりやや東寄りであり、主軸方位はN-16°-Wを指す。南北長364cm、東西長356cmを測り、方向を呈す。カマドは袖に石を置き、黒褐色粘土で構築したもので、灰・炭化物・焼土層が残っていた。主柱穴はP1~P4の4本があり、ほぼ円形に近く、径30~40cm、深さ60cmを測るピットに柱痕がみられた。

出土遺物には弥生式土器、土師器、台石(7)、礫物石(4~6)、ミガキ石(8)がある。弥生式土器は赤色塗彩の壺や柳指波状文の甕である。土師器は甕片もあるが、図示できたのは土師器杯(1~3)である。1・2の杯は同器形を呈する。浅く大きい底部から外縁を持って屈曲し、口縁部は緩やかに大きく外傾外反する。外面は口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ調整、その後内外面ミガキ調整される。内面の黒色処理は色変して、痕跡がない。3の杯は丸底で曖昧な外縁を持ち、屈曲して、口縁は外傾する。内面は横ナデ後放射状に暗文が施され、外面は口縁部横ナデ、底

第30表 H29号住居址出土遺物一覧表

番号	種類	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位置	
1	土師器 杯	(19.0) (12.2) (3.8)	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/4残存 内 10YR8/3 (浅黄橙) 外 10YR8/3 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	Ⅱ区、Ⅲ区 Ⅳ区、床 検出	
2	土師器 杯	(17.8) (12.8) (4.1)	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/4残存 内 10YR7/3 (にぶい黄橙) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。	Ⅲ区、カマド	
3	土師器 杯	(13.8) (12.0) (4.0)	内 横ナデ→放射状暗文 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/6残存 内 2.5YR7/4 (淡赤橙) 外 2.5YR8/3 (にぶい橙) 2.5YR2/1 (赤黒)	1mm以下の石英・長石粒子含む。	カクラン	
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備 考	出土位置
4	礫物石	12.1	5.3	3.7	379	擦面あり。安山岩。	
5	礫物石	10.0	5.6	3.9	320	擦面あり。石灰石?	
6	礫石	9.0	6.5	4.8	315	安山岩。	
7	礫石	12.1	10.8	4.3	680	安山岩。	Ⅳ区、床
8	ミガキ石	3.5	2.5	1.2	16	チャート。	Ⅳ区



部へラケズリされる。攪乱から出土している。
これらより本住居址は古墳時代後期に位置づけられよう。

30) H30号住居址 (第53~56図、第31表、図版17・18・52~54・58)

Bう4グリットにあり、南側は調査区外で北側半域の調査をした。南東でH10号住居址に切られ、攪乱によりカマド付近が破壊される。住居址には多くの炭化材と土器が残されており、焼失家屋である。カマド付近の攪乱は所有者が地下室を掘ったもので、その際にも多量の土器が出土している。ローム層中に構築され、暗褐色土が覆土である。地盤のズレのため、東壁のセクションにみるように80cm程壁が西にズレ、北方向にもカマドの扉方などからみるとズレている。また床下の柱穴も西に傾斜している。攪乱と調査区域外のために北、西側の移動後の住居址プランが明確に分からないので、平面図には移動した家のプランは記していない。カマドは北壁にあり、大半壊されていないが、ロームを残して軸としたようである。主軸方位はN-16°-Wを指す。南北は最大で650cm調査し、東西は758cmを測る。

主柱穴は区域外である南西の主柱穴を除くP1～P3の3本が検出された。P1は長径56cm、短径30cmの楕円形プランの中に上面わずかに、径20cmを測る丸い柱材の炭化材が残っていた。壁下には周溝が巡り、床面中央はルームをそのまま固め締まっていた。北・東壁から柱穴に向かって間仕切り溝がある。遺物はカマドの脇に集中してみられ、攪乱の位置にも今回と同様の杯や甕が出土し(元土地所有者所蔵)、今回の遺物とあわせるとその土器の量は多大である。また、滑石製の勾玉(39)が、東壁下中央床面近くで出土している。

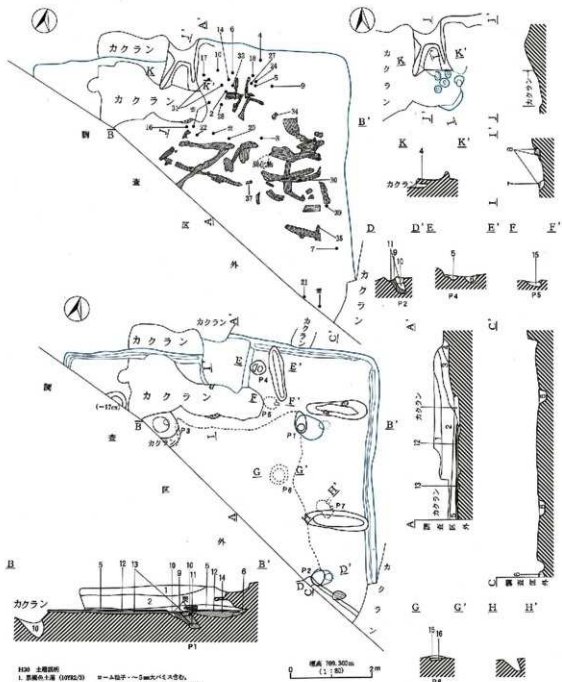
出土遺物には弥生式土器、須恵器、土師器、繻布石(33～37)、台石(38)、滑石製勾玉(39)、滑石製模造品(40)がある。弥生式土器は、赤色塗彩の壺、斜条痕の甕破片がある。須恵器は、1の杯蓋と2の杯身がある。杯蓋は破片で、攪乱も多いので伴うか断定はできない資料である。天井部との境に稜を持ち、口縁部は内傾する。2の杯身は完形で、本住居址に伴うものである。平底に近い安定した底部から丸く立ち上がり、3mmほど受け部が外方に伸び、立ち上がりはやや内傾している。端部は丸くなく、内稜が明確である。底部外面は2/3以上回転ヘラケズリされ、内面は全体にクロコナダされている。

土師器は杯(3～7・10～13)、鉢(8・9・18)、高杯(14～16)、甕(17～29)、甕(30・31)が実測資料である。土師器杯は熱を受け、剥離しているものが多い。3・5の杯は深い丸底の底部が立ち上がり、上部で、短く口縁が内稜を持って外傾するものである。4・12の杯も同様の器形であろう。内面はナダ調整のままのものと、ミガキ・暗文が施されるものとする。外面は口縁部横ナダ、底部ヘラケズリ後ナダ調整である。ミガキはあっても部分のみの。6・7は丸底で、極短い内稜を持つ杯である。10・11は全体に口縁が内湾する器形を呈し、内外面ミガキ調整され暗文が施される。13は緩やかな外稜を持って口縁が内傾直立し、須恵器杯身の模倣であろうか。20の丸胴甕は内面胴部上半はハケナダを残し、下にはミガキ調整が見える。胴部の割れ口が煤を受けていることなどから、逆さに置かれて、器台として使用された可能性もある。22の甕は口縁部が「く」字形を呈し、最大径は胴位に持つ。31の甕は大壺型で、焼きが悪く、非常に脆いものである。一次で胴下部は彫らんでいる。32は手捏状の小杯で、外面ナダ後底部ヘラケズリ、わずかにミガキ調整が施される。内面はナダ調整である。

これらより本住居址は古墳時代中期末～古墳時代後期初頭に位置づけられよう。

第31表 H30号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	数量	形状・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位置
1	須恵器 杯蓋	(11.4) — (2.8)	内 ロクロナダ 外 ロクロナダ	口縁部1/8残存 内 N7/0 (灰白) 外 N8/0 (灰白)	緻密。 0.5mmの石英・長石粒子を少量含む。	II区
2	須恵器 杯身	10.1 — 11.5 — 4.4	内 ロクロナダ 外 ロクロナダ→底部回転ヘラケズリ	完形 内 N5/0 (灰) 外 N5/0 (灰)	3mm以下の石英・長石粒子多く含む。	
3	土師器 杯	(13.4) (3.8) (5.3)	内 みこみ部ヘラナダ→口縁部横ナダ→黒色処理 外 口縁部横ナダ→底部ヘラケズリ→ナダ	口縁部1/3残存 内 10YR7/1 (灰白) 外 7.5YR8/4 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子、赤色粒子含む。 内面磨耗。外面剥離。	I区
4	土師器 杯	— — (5.2)	内 ヘラナダ→ミガキ→黒色処理 外 ヘラケズリ→ミガキ	底部残存 内 N4/0 (灰) 外 5YR7/3 (にぶい橙)	緻密。 内面磨耗。	IV区 カクラン
5	土師器 杯	(13.0) — 4.7	内 ミガキ・暗文→黒色処理 外 口縁部横ナダ→底部ヘラケズリ→口縁部ミガキ	口縁部1/8残存 内 5YR5/1 (褐灰) 外 5YR4/1 (褐灰) 5YR7/4 (にぶい橙)	1mm以下の黒色粒子少量含む。	
6	土師器 杯	12.9 — 5.4	内 みこみ部ナダ→口縁部横ナダ→放射状暗文を施す。 外 口縁部横ナダ→底部ヘラケズリ	完形 内 10YR7/2 (にぶい黄橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子、赤色粒子含む。	
7	土師器 杯	(13.0) — (4.5)	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/3残存 内 7.5YR8/4 (浅黄橙) 外 7.5YR8/4 (浅黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子多く含む。	II区
8	土師器 鉢	(14.2) — (5.6)	内 暗文風ミガキ 外 ハケナダ→ミガキ	口縁部1/5残存 内 10YR7/2 (にぶい黄橙) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子多く含む。	I区
9	土師器 鉢	(16.8) — (5.6)	内 ミガキ 外 口縁部横ナダ→底部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部1/4残存 内 5YR6/6 (橙) 外 2.5YR5/6 (橙)	1mm以下の石英・長石粒子を少量含む。	
10	土師器 杯	(12.4) — 5.1	内 口縁部横ナダ→放射状暗文・底部ミガキ 外 ハケナダ→口縁部横ナダ→暗文	口縁部1/3残存 内 7.5YR7/4 (にぶい橙) 外 2.5YR7/6 (橙)	緻密。滑手。 内面磨耗。	
11	土師器 杯	(13.6) — 5.8	内 横ナダ→放射状暗文 外 口縁部横ナダ→底部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部3/4残存 内 2.5YR6/6 (橙) 外 2.5YR6/6 (橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。 内面みこみ部、磨滅。	II区 IV区

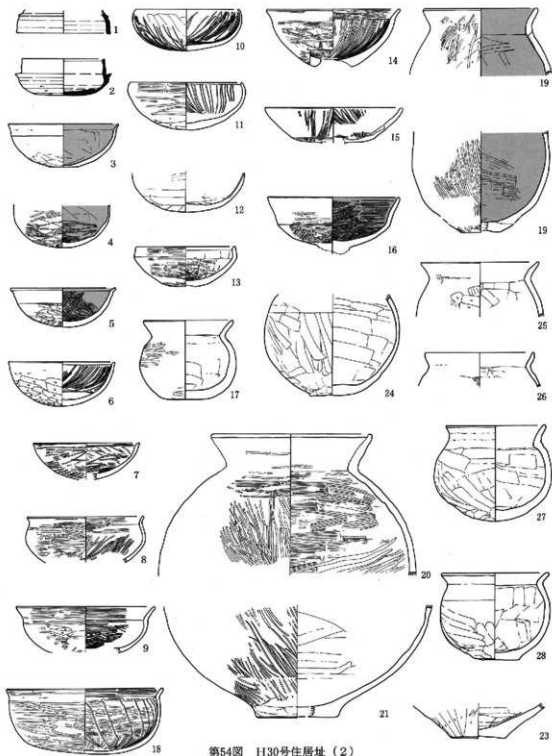


1430 土層説明

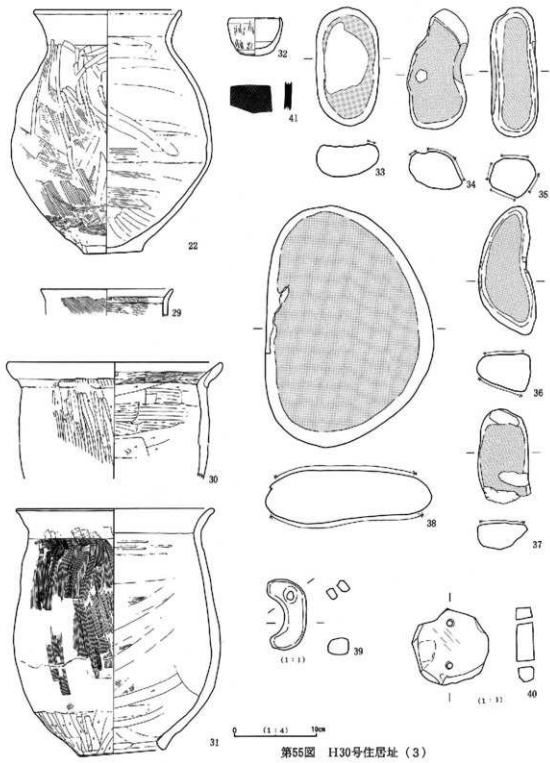
- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1. 赤褐色土層 (01952/3) | ローム胎子→3mm大バリスを含む。 |
| 2. 暗褐色土層 (01952/2) | ローム胎子→3mm大バリスを多く含む。 |
| 3. 濃い黄褐色土層 (01934/2) | ローム胎子→3mm大バリスを多く含む。 |
| 4. 赤褐色土層 (01952/3) | ローム胎子→3mm大バリスを含む。 |
| 5. 暗褐色土層 (01952/3) | ローム胎子→バリスを多く含む。 |
| 6. 暗褐色土層 (01952/3) | 多くのローム胎子→バリスを含む。(厚層) |
| 7. 赤褐色土層 (01934/2) | 黄土。 |
| 8. 暗赤褐色土層 (01952/3) | 黄土胎子を含む。(ローマ層の底) |
| 9. 赤褐色土層 (01952/3) | (厚層) |
| 10. 赤褐色土層 (01952/2) | ローム胎子→バリスを含む。(ノット層の底) |

- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| 11. 濃い黄褐色土層 (01955/4) | ローム土層。 |
| 12. 灰褐色土層 (01955/2) | ロームブロック・基礎の土ブロック層。(厚層) |
| 13. 濃い黄褐色土層 (01955/2) | ローム土層。(厚層) |
| 14. 褐色土層 (01955/4) | ロームブロック土層に黄土ブロックを含む。(厚層) |
| 15. 褐色土層 (01934/4) | ロームブロック土層に黄土ブロックを含む。(厚層) |
| 16. 暗褐色土層 (01955/2) | ローム土層。 |

第53図 H30号住居址(1)



第54图 H130号住居址(2)



第55图 H130号住居址(3)

第31表 H30号住居址出土遺物一覧表

12	土師器 杯	— 外 (4.8)	内 ヘラナデーナデ 外 ヘラケズリ	底部残存 内 2.5YR5/2 (灰赤) 外 2.5YR5/2 (灰赤) 5YR6/1 (褐灰)	1mmの石英・長石粒子、赤色粒子、黒色粒子含む。	I区
13	土師器 杯	(12.2) — 外 (4.8)	内 口縁部ヘラナデー口縁下半→底部ミガキ 外 底縁ヘラケズリ→ミガキ	口縁部1/6残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	III区
14	土師器 高杯	(16.3) — 外 (7.1)	内 口縁部横ナデー・みこみ部ハケナデー・ヘラナデー放射状陶文 外 口縁部横ナデー口縁下部ヘラナデー→ミガキ	口縁部1/3残存 内 10R6/6 (赤橙) 外 2.5YR7/6 (橙)	緻密。 割離者しい。	I区
15	土師器 高杯	(16.8) — 外 (4.3)	内 放射状陶文 外 横ナデー放射状陶文	口縁部1/10残存 内 5YR5/3 (にぶい赤褐) 外 2.5YR5/4 (にぶい橙)	緻密。	II区、III区
16	土師器 高杯	(16.2) — 外 (6.9)	内 ミガキ→黒色処理 外 ミガキ	口縁部1/2残存 内 N3/0 (褐灰) 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 2.5YR5/6 (明赤褐)	1mm以下の黒色粒子少量含む。	カクラン
17	土師器 小型壺	(11.0) 5.3 9.7	内 口縁部横ナデー→胴→底部ヘラナデー 外 口縁部横ナデー→胴→底部ミガキ	口縁部1/2残存、底部完形 内 10YR7/3 (にぶい黄橙) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	緻密。1mmの石英・長石粒子を少量含む。 外面割離。	
18	土師器 鉢	19.0 — 外 8.1	内 ミガキ→放射状陶文を施す。 外 ミガキ	完形 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙) 5YR7/3 (にぶい橙)	緻密。	
19	土師器 甕	(14.0) (5.0) —	内 口縁部横ナデー・胴→底部ヘラナデー→黒色処理 外 口縁部横ナデー→胴部ヘラナデー→ミガキ・底部ヘラナデー→ミガキ	口縁部・底部1/2残存 内 5YR8/4 (淡橙) 5YR6/1 (褐灰) 外 5YR8/4 (淡橙) 10YR8/3 (浅黄橙)	石英・長石・黒色粒子含む。	I区、III区 I層 カクラン
20	土師器 甕	19.5 — 外 (17.3)	内 口縁部ミガキ(割離する)・胴部ハケナデー→下半にミガキ 外 ミガキ	口縁部完形 内 10YR7/3 (にぶい黄橙) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	3mm以下の石英・長石粒子多量、黒色粒子少量含む。	
21	土師器 甕	— (10.2) (13.7)	内 ヘラナデー・ナデ 外 胴部ヘラナデー→ミガキ・底部ヘラナデー	底部1/2残存 内 5YR6/4 (にぶい橙) 外 2.5YR6/4 (にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子、赤色粒子多く含む。	
22	土師器 甕	18.0 7.0 29.8	内 口縁部横ナデー→胴→底部ヘラナデー(一部径目のヘラ) 外 口縁部横ナデー→胴部ヘラナデー(径目のヘラナデー→幅の狭いヘラナデー)→一部ミガキ・底部ヘラケズリ→ミガキ	完形 内 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 7.5YR7/2 (明褐灰)	0.5mmの石英・長石粒子含む。	
23	土師器 甕	— (6.8) 外 (4.3)	内 ヘラナデー 外 胴部ヘラケズリ・部分的にミガキ・底部ヘラケズリ	底部1/2残存 内 10YR8/3 (浅黄橙) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	1mmの石英・長石粒子、黒色粒子を含む。	III区
24	土師器 小型甕	— 4.9 外 (12.3)	内 胴→底部ヘラナデー 外 胴・底部ヘラナデー→胴上半横ナデー	底部完形 内 10YR4/1 (褐灰) 外 5YR6/4 (にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子含む。	
25	土師器 小型甕	(14.5) — 外 (6.7)	内 口縁部横ナデー→胴部ヘラナデー 外 口縁部横ナデー→ヘラナデー(経目利用)→ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 10YR5/1 (褐灰) 外 7.5YR7/4 (にぶい橙)	粒子のきめ、粗い。 1mmの石英・長石粒子、黒色粒子含む。磨耗している。	カクラン
26	土師器 小型甕	(13.4) — 外 (16.2)	内 口縁部横ナデー→胴部ヘラナデー(→黒色処理?) 外 口縁部横ナデー→胴部ヘラナデー	口縁部1/6残存 内 10YR4/1 (褐灰) 外 5YR7/3 (にぶい橙)	0.5mmの石英・長石粒子を多く含む。	I区
27	土師器 小型甕	(12.2) 6.9 11.6	内 口縁部横ナデー・胴→底部ヘラナデー 外 口縁部横ナデー→胴→底部ヘラナデー	ほぼ完形 内 7.5YR7/2 (明褐灰) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子、黒色粒子、赤色粒子含む。	
28	土師器 小型甕	13.1 5.4 10.6	内 口縁部横ナデー→胴部ヘラナデー 外 (成形の)ナデー→口縁部横ナデー・胴→下半ヘラナデー・底部ヘラケズリ	ほぼ完形 内 7.5YR5/1 (褐灰) 外 5YR8/4 (淡橙)	1mmの石英・長石粒子、黒色粒子含む。	
29	土師器 甕	(16.2) — 外 (3.3)	内 胴部ヘラナデー 外 口縁部横ナデー→胴部ヘラナデー	口縁部1/4残存 内 5YR7/6 (橙) 外 5YR7/6 (橙)	1mm以下の石英・長石粒子、赤色粒子、1mmの黒色粒子含む。	I区、III区
30	土師器 甕	(26.4) — 外 (14.2)	内 口縁部横ナデー→胴部ヘラケズリ・ハケナデー 外 口縁部横ナデー→胴部ヘラケズリ・ヘラケズリ→ミガキ	口縁部1/3残存 内 5YR8/4 (淡橙) 外 2.5YR7/6 (橙)	緻密。 1mmの石英・長石粒子、黒色粒子、2mmの赤色粒子含む。	II区

第31表 H30号住居址出土遺物一覧表

番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土地
31	土師器 瓶	24.1 10.5 30.3	内	口縁部横ナデ・胴部ヘラケズリおよびヘ ラナデ→一部ミガキ	ほぼ完形 内 10YR7/4 (にぶい橙) 外 10YR6/3 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色 粒子含む。	
32	土師器 小杯	(6.0) (3.6) 4.6	内	みこみ部ナデ・口縁部横ナデ 外 ナデ成形→口縁部横ナデ・底部ヘラナ デ・わずかにミガキ	口縁部1/3残存 内 5YR6/6 (橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	0.5mmの石英・長石粒子、黒色 粒子少量含む。	I区
33	編物石	14.5	7.7	4.0	656	断面あり。安山岩。	
34	編物石	14.6	7.0	4.7	592	断面あり。安山岩。	
35	編物石	15.8	5.9	4.7	765	断面あり。安山岩。	
36	編物石	15.5	7.0	4.7	665	断面あり。安山岩。	
37	編物石	11.6	6.5	3.2	351	断面あり。安山岩。焼ける。	
38	台石	29.4	20.4	6.5	5,770	断面あり。砂石。	
39	勾玉	2.1	0.7	0.5	1.6	滑石製。	
40	石製模造品	2.3	2.3	0.5	3.8	滑石製。	カクラン
41	磨石	2.1	1.5	0.9	3.3	チャート。	

31) H31号住居址 (第56図、第32表、図版19・54)

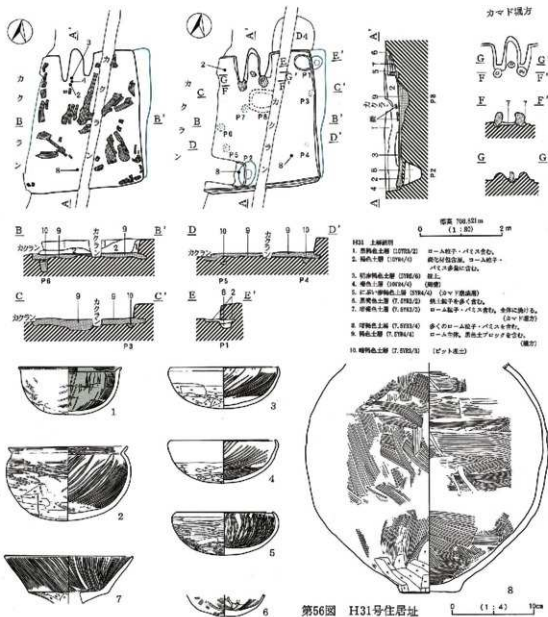
Bか3グリットにあり、西側は横点により壊され、北東上部ではD4に切られる。ローム層中に構築されていた。本住居址からは多量の炭化材が出土し、焼失家屋である。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-15°-Wを指す。南北長316cm、東西残長300cmを測る。地盤のズレにより最大30cmほど西にズレていた。カマドはロームを掘り残し袖とし、その先端に石を置いていた。支柱穴は地盤の移動のためか、分からなかった。北東のP1と、南壁下のP2はズレながらも把握できた。P1は長さ36cmの隅丸長方形を呈し、深さは24cmを測る。P2は南北60cmに深さ60cmの隅丸長方形のビットであろうか。周溝は南壁下で巡ることが確認できたが、東壁は地盤のズレとともに消滅したようである。本来、堀方と柱穴や周溝が再確認できるはずであるが、本住居址はズレの位置が床下の堀方と同レベルの所が移動面であるため、堀方を掘る際に、同様なロームである移動面まで掘り下げ堀方は検出しきれなかった。

第32表 H31号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土地
1	土師器 杯	(12.6) — 5.8	内 ミガキ→放射状暗文→黒色処理 外 底部ナデ→口縁部横ナデ→部分的にミ ガキ	口縁部1/4残存 内 N4/0 (灰) 外 2.5YR7/4 (淡赤橙)	緻密。 0.5mm以下の石英・長石粒子少 量含む。	I区、N区 床
2	土師器 鉢	14.4 — 9.2	内 口縁部ミガキ・胴部放射状暗文・底部ミ ガキ 外 ミガキ	完形 内 2.5YR5/4 (にぶい赤褐) 外 2.5YR6/4 (にぶい橙)	緻密。 1mm以下の石英・長石粒子含む。	カマド
3	土師器 杯	(13.2) — 5.1	内 横ナデ→放射状暗文 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/3残存 内 10R6/6 (赤橙) 外 2.5YR6/4 (にぶい橙)	2mm以下の赤色粒子含む。	
4	土師器 杯	(13.0) — 5.2	内 横ナデ→放射状暗文・みこみ部ミガキ 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/3残存 内 10R5/4 (赤褐) 外 2.5YR5/6 (明赤褐)	1mm以下の石英・長石粒子少量 含む。	カマド
5	土師器 杯	(11.7) — 5.3	内 横ナデ→放射状暗文 外 底部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部1/2残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) N1/0 (黒) 外 2.5YR6/6 (橙)	1mm以下の黒色粒子含む。	Ⅲ区
6	土師器 杯	— (2.7)	内 横ナデ→放射状暗文 外 ヘラケズリ→ミガキ	破片 内 2.5YR7/6 (橙) 外 2.5YR7/6 (橙)	緻密。 0.5mm以下の石英・長石粒子少 量含む。	I区、カマド
7	土師器 高杯	(15.6) — (5.8)	内 横ナデ→放射状暗文 外 放射状暗文・下半部ヘラナ デ	口縁部1/2残存 内 10R6/6 (赤橙) 外 10R6/6 (赤橙)	緻密。	I区
8	土師器 罍	— 7.5 (30.0)	内 ヘラケナ 外 胴部ヘラケナデ・底部ヘラケズリ	底部完形 内 7.5YR7/4 (にぶい橙) 外 7.5YR7/4 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子多量 含む。まれに3mm大石含む。	I区、Ⅱ区 P2 カクラン

出土遺物には弥生式土器、土師器がある。弥生式土器は柳葉波状文・斜条文の裏が1点ずつある。土師器は杯(1・3~6)、鉢(2)、高杯(7)壺(8)がある。1の杯は器高が深く、口縁が内後を持って短く外反する。内面に暗文が施される。2~6の杯は丸底から口縁部まで全体内湾する器形で、内面には放射状の暗文が施される。7の高杯は杯下部が平に近く外後を持って、口縁が大きく外傾するものである。内外面に放射状の暗文が施される。8の壺脚裏は、内外にハケ目を残している。

これらより、本住居址は古墳時代中期末から古墳時代後期初頭に位置づけられよう。



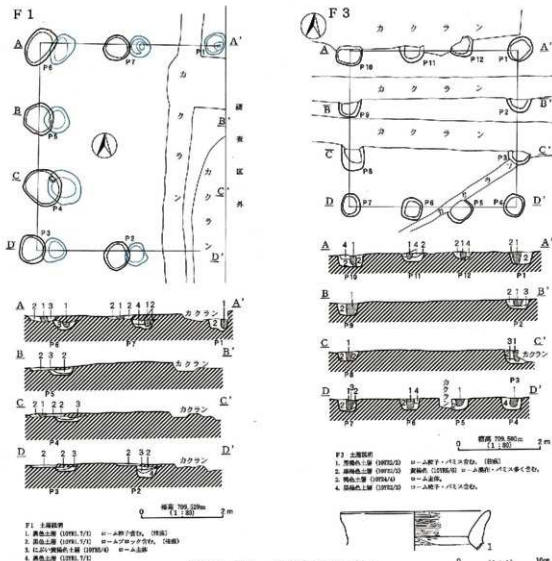
2. 掘立柱建物址

1) F1号掘立柱建物址 (第57岡、図版20)

Aい10グリットにあり、東側は調査区域外であり、攪乱にも壊される。柱穴は地盤のズレのため、2重に検出された。南北2間、東西は2間まで調査できた。東に南北列が検出されなかったため、東西棟の2×3間以上の建物であろう。主軸方位はN-87°-Eである。梁行きは508cmを測り、柱穴は円形を呈し、規模は大きく径66-94cm、16-38cmを測る。柱痕は径16cm程である。

出土遺物はP4・P5から弥生時代後期の赤色塗彩高杯片、櫛歯波状文の瓦片が1片ずつある。P6からは古墳時代後期の丸胴甕胴部片が1片ある。

これらより、本址は古墳時代後期またはそれ以降に位置づけられよう。



2) F 2号掘立柱建物址 (第58図、図版20)

Aく7グリットにあり、H3号住居址に東側を切られる。3間×2間の側柱式の東西棟で、桁行き570cm、梁行き298cmを測る。主軸方位はN-86°-Eを指す。地盤のズレで、西に上部が移動し、柱穴が2重に検出されたが、P5・P6は浅いためか、P7はズレが異なるためか移動前のピットはロームに覆われ分らない。柱穴は円形を呈し、径40~67cm、深さ24~53cmを測る。P5の柱痕は径16cmを測る。またP4・P5は底面に川原石を置いて、柱材を固定していたようだ。

出土遺物はP1から弥生時代後期の櫛波状文甕片、P9から弥生式土器赤色塗彩壺胴部片と丸底の土師器杯片、P10から弥生後期の櫛波状文甕片、古墳時代の土師器小型甕片、外面ヘラナアの調整の土師器甕がある。

本址はH3号住居址に切られ、古墳時代の土器片を出土していることから古墳時代中期~後期に位置づけられよう。

3) F 3号掘立柱建物址 (第57図、第33表、図版20・55)

Aか8グリットにあり、攪乱により壊される。3間×3間の側柱式の掘立柱建物址である。桁行き408cm、梁行き388cmを測る。東西が長く主軸方位はN-86°-Eを指す。地盤のズレ地帯であり、セクションをみると柱穴の底が標高709.10m付近で揃って平らになっていることから、下方やや東に移動前の柱穴の残りがありそうである。調査時には確認できなかった。柱穴は円形基調で、径48~63cm、深さ19~38cmを測る。

出土遺物は弥生式土器と土師器である。破片を多く含む掘立柱建物址で41片あり、実個体の土師器甕もある。P2・P9~11のピットを除いて出土する。弥生式土器は後期の赤色塗彩の壺で頸部に櫛波文が施されるものがある。土師器は甕(1)、杯、鉢の破片がある。1の甕は口縁部のみで、口縁は短く頸部は肥厚している。内面はミガキ、外面は横ナデ調整される。甕で口縁部形「く」字形で外面ミガキ調整の口縁部片がある。土師器甕の破片には長胴甕の破片はない。杯は丸底で、内面に暗文を施し外面はヘラケズリである。

これらより本住居址は古墳時代中期末~後期初頭またはそれ以降に位置づけられよう。

4) F 4号掘立柱建物址 (第59図、第34表、図版20・55)

Aか10グリットのにあり、攪乱が2カ所ある。4間×4間の側柱式、桁行き(南北)772cm、梁行き704cmを測る。主軸方位はN-16°-Wを指す南北棟である。柱穴の底部が一様に平らであり、東に移動前の掘立柱建物址があった可能性がある。調査時に確認はできなかった。柱穴は円形ないし楕円形で径33~80cmを測る。深さは17cm~42cmを測る。

出土遺物には土器の小片13点とスリ石があり、弥生式土器は後期の赤色塗彩の壺、櫛波状文の甕がある。土師器は古墳時代後期の甕の胴部片、土師器杯片がある。土師器杯は丸底で、内面ミガキ外面ヘラケズリ調整される。

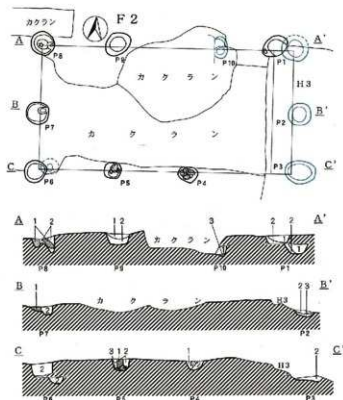
これらより、本址は古墳時代後期またはそれ以降に位置づけられよう。

5) F 5号掘立柱建物址 (第58図、第35表、図版20・21)

Bう10グリットにあり、M5号溝址を切る。北西は調査区域外である。本址は都合上3回にわたって調査した。3間×3間の側柱式の掘立柱建物址である。桁行き520cm(東西)、梁行き440cmを測る東西棟で、主軸方位はN-91°-Eを指す。地盤ズレのため柱穴上部は西に50~60cm程ズレていた。柱穴は円形を呈し、径44~54cm、深さ24~48cmを測る。

出土遺物には弥生式土器、土師器壺・杯がある。P1~P5で破片が出土し、P2からは弥生後期の破片が多かった。拓本に示した赤色塗彩され頸部にヘラ指羽状文を施す壺と、赤色塗彩の鉢、櫛波状文・斜条裏甕がある。土師器では古墳時代の甕、P3からは深い丸底から口縁部が内稜を持って短く外反する杯等がある。

これらより本址は古墳時代中期末から後期初頭以降に位置づけられよう。

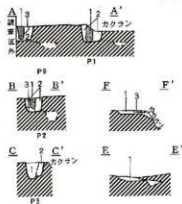
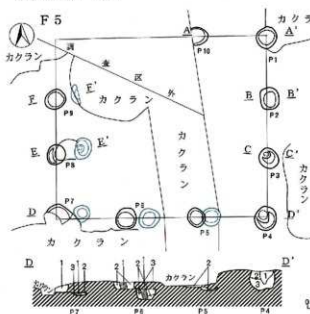


- F2 土層説明
1. 赤褐色土層 (1991.7/2) ムーム砂子・ヘソム大・バミス含む。(1991)
 2. 赤色土層 (1991.7/2) ムーム砂子・バミスを少し含む。(1991)
 3. 褐色土層 (1994/1) ムーム土層

0 標高 191.200m (1:50) 2m



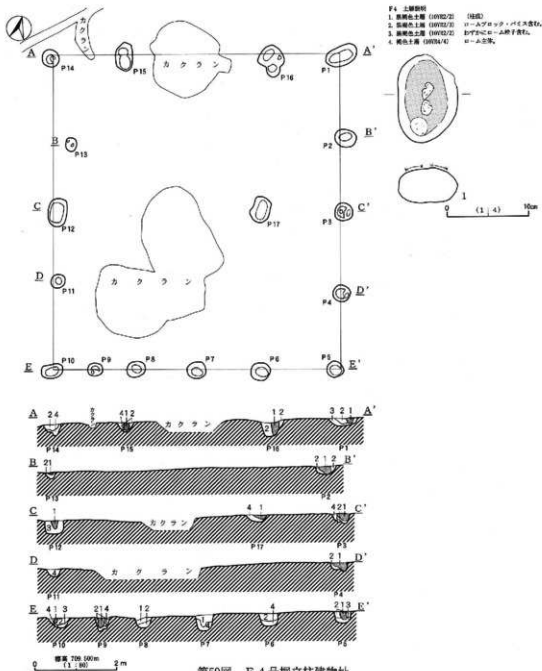
(F 5, P 2)



- F5 土層説明
1. 赤褐色土層 (1992/2) (1991)
 2. 褐色土層 (1991.7/2) ムーム砂子・バミス少し含む。
 3. 褐色土層 (1994/1) ムーム土層。

0 標高 191.200m (1:50) 2m

第58図 F 2・F 5号掘立柱建物址

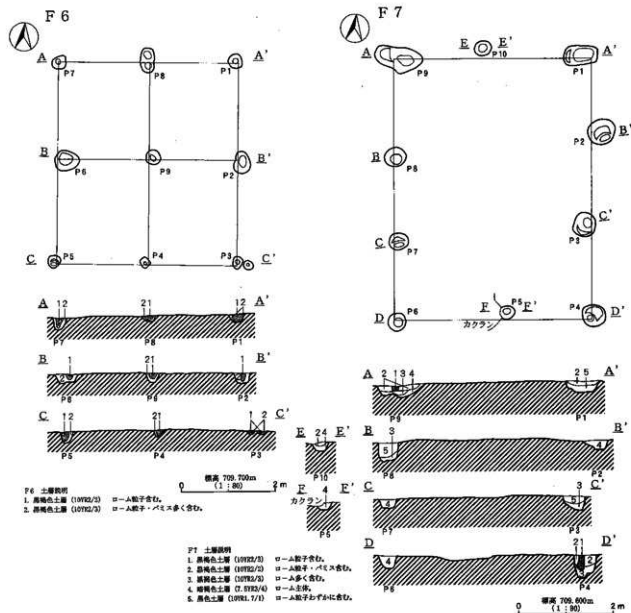


6) F 6号掘立柱建物址 (第60図、図版21)

Cえ4グリットにあり、2間×2間の総柱式で、桁行き428cm (南北)、梁行き384cmを測る。主軸方位はN-5°-Wを指す南北棟である。柱穴は円形基調で径20cm~52cm、深さ8~26cmを測る。地盤のズレはあったと思われるが調査時には分からなかった。

出土遺物はP6から弥生式土器片がある。内外面赤色塗彩された杯である。

これらより、本址は弥生時代後期以降の掘立柱建物址である。



第60図 F 6・7号掘立柱建物址

7) F 7号掘立柱建物址 (第60回、図版21)

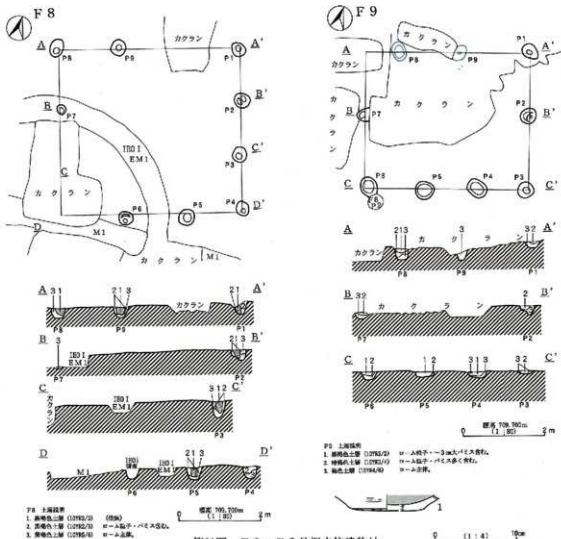
Cおイグリットにあり、3×2間の側柱式で、桁行き554cm(南北)、梁行き418cmを測る。主軸方位はN-5°-Wである。柱穴はP1・P9が楕円形、他は円形を呈す。長径32cm~110cm、深さ20~42cmを測る。地盤のズレがあると思われるが、調査時にはつかめなかった。しかし、地盤のズレのためかピットの配列は整っていない。

出土遺物はP1から古墳時代の土師器壺片、P3から弥生時代後期の赤色塗彩壺片、P8から古墳時代土師器杯で丸底を呈し内面ミガキ、底部ヘラケズリ調整がある。鉢片もある。P9から赤色塗彩の杯片が出ている。古墳時代の土師器は古墳時代中期末から後期初頭の破片と推測される。

これらより本掘立柱建物址は古墳時代中期から後期初頭以降といえる。

8) F 8号掘立柱建物址 (第61回、図版21)

Cえ7グリットにあり、円正坊IのM1号溝津に切られ、F9号掘立柱建物址・EM1を切る。捜査が北と南西にあり、一部破壊される。円正坊Iと今回と2度にわたって調査される。3間×3間の側柱式である。桁行き444cm(東西)、梁行き404cmを測り、主軸方位はN-73°-Eを指す。セクションからは幅高709.50m付近で柱穴の底がほぼ揃



第61回 F 8・F 9号掘立柱建物址

い、底が平らであることから地盤のズレがあったように見える。調査時には移動前のピットはP8・P9を除いて検出できなかった。柱穴は円形を呈し、径23~44cm、深さ26~40cmを測る。

出土遺物はP2とP8から古墳時代後期の土器片が出土している。P2からは弥生時代後期の赤色塗彩壺口縁部片、土師器杯は薄手の外反する口縁部で、内外ミガキ調整される。P8からは土師器片が出土する。

これらより、本掘立柱建物址は古墳時代後期以降といえる。

9) F9号掘立柱建物址 (第61図、第35表、図版21・55)

Cう6グリットにあり、北側半域に大きな攪乱があり、破壊される。F8号掘立柱建物址に切られる。3間×2間の側柱式で、桁行き402cm(東西)、梁行き336cmを測る。主軸方位N-68°-Eを指す東西棟である。桁行きの東西間柱間は150cm未測で狭い。地盤のズレがあり、攪乱で上部のロームが除かれ、移動前のピットを検出できた。柱穴は円形茶調で径31~48cm、深さは移動したピット上方の深さが検出面から16cm、P8・P9など移動前ピットは検出面までは48cm程を測る。

出土遺物は弥生式土器片と土師器片がある。P4・P6・P7・P8から出土している。弥生式土器は赤色塗彩の壺片である。土師器は古墳時代のP7から高杯脚部、図示した鉢(1)と壺の破片がある。高杯脚部は、内縁を持って裾部が広がるもので、ラッパ状とする。鉢は丸底で内面ミガキ黒色処理される。

これらより本址はF8号掘立柱建物址より古く古墳時代後期以降といえる。

10) F10掘立柱建物址 (第62図、第36表、図版21・55)

Cえ7グリットにあり、F11号掘立柱建物址・円正坊IEM1円形周溝址を切り、円正坊IEM1号溝址に切られる。3間×2間の側柱式で、桁行き532cm(東西)、梁行き402cmを測る。主軸方位はN-104°-Eを指す東西棟である。柱穴は円形とP4・P8の2個の柱穴が連結形とある。後者は柱の建て替えも考えられる。円形の柱穴が31~48cm、連結形は長径64・76cmを測る。深さは32~58cmを測る。

出土遺物は土器片が多くある。北列のP1・P7・P8から70片ほどあり、弥生式土器、須恵器、土師器がある。弥生式土器は後期で小型の櫛指波状文の壺と底部、赤色塗彩の杯片がある。須恵器はP1から杯蓋の口縁が1片ある。端部は内傾し、わずかに段を持つ。土師器は古墳時代の杯、壺片が多い。浅い丸底から暖味な縁を持ち、口縁が大きく外反し内外面ミガキ調整の杯、図示した胴部外面にハケ目を残す寛やヘラケズリされた壺などがある。P7から1片だけ、平安時代の内面ミガキ外面ナメ調整の土師器碗片がある。

土師器碗片、地盤のズレによる柱穴の移動がないことなど本址は平安時代またはそれ以降の掘立柱建物址といえよう。

11) F11号掘立柱建物址 (第62図、図版21)

Cか7グリットにあり、3間×3間の側柱式の掘立柱建物址である。桁行き438cm(東西)、梁行き428cmの方形に配され、主軸方位はN-95°-Eを指す。柱穴は円形を呈し径56~65cm測り、深さ24~42cm、柱痕が検出され、径16cmを測る。中央のP13は径32cm、深さ16cmを測る。P13は本址に伴うか根拠はないが中央にあるので掲載した。本址では地盤のズレがみられなかった。

出土遺物はない。

本址は重複関係、出土遺物がないため時期は不明である。地盤のズレがないとすれば古墳時代以降の平安時代の掘立柱建物址であろうか。

12) F12号掘立柱建物址 (第63図、図版21)

Cお6グリットにあり、東に攪乱があり、破壊される。2間×2間の側柱式の掘立柱建物址である。桁行き384cm、梁行き322cmを測り、主軸方位はN-5°-Eを指す。柱穴は円形ないし楕円形を呈し長径42~61cm、深さ13~35cmを測る。地盤のズレはないと思われるが、調査時に確認していない。

出土遺物はない。

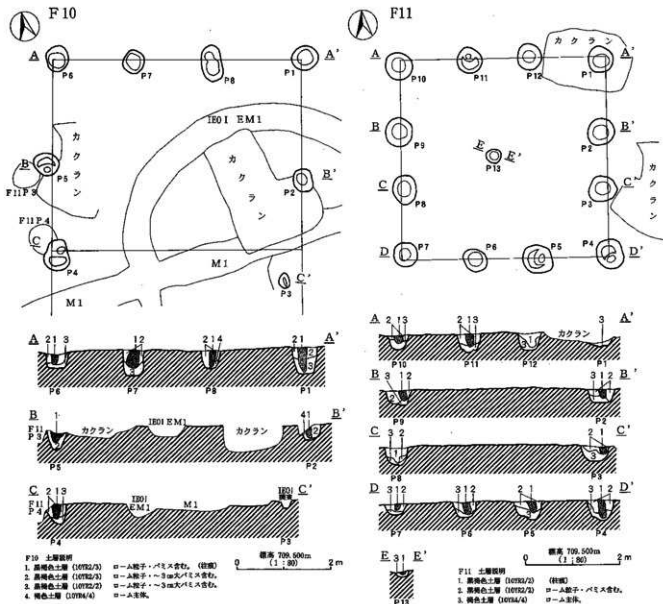
本址は重複関係もなく、遺物もないので時期は不明である。

13) F13号独立柱建物址 (第64図、第37表、図版22・25)

Cく4グリットにあり、F14号独立柱建物址を切る。4間×3間の榦柱式である。桁行き774cm(東西)、梁行き424cm、主軸方位はN-86°-Eを指す東西棟である。本遺跡では最大の桁行きを持つ。調査時は確認できなかったが、セクションをみると検出面から40cm下がった所で、柱穴が一律に平らな底となっており、地盤のズレで移動したものと推測される。柱穴は円形で、46~71cm、深さ32~48cmである。

出土遺物には弥生式土器、土師器片が41片ある。P5からは縄描波状文の甕、赤色塗彩の壺小片がある。土師器は実測した土師器鉢がある。P14から出土し、内面にミガキ調整される。土師器杯で丸底の底部から口縁全体が内湾し、内面に暗文を施すものや、P11からは浅い丸底から外縁を持って口縁が外傾するもので、内面ミガキ黒色処理、外面口縁部横ナア、底部ヘラケズリされるもの等ある。

これらより本址は古墳時代後期に位置づけられよう。



第62図 F10・F11号独立柱建物址

14) F14号掘立柱建物址 (第63図、図版22・55)

Cき5グリットにあり、北と西に大きな擾乱が入り破壊される。F13号掘立柱建物址に切られる。5間×4間の側柱式で、桁行き656cm、梁行き504cmを測る。主軸方位N-95°-Eを指す。検出面から40cm程で一様にピットの底になっていることから、調査時に確認できていないが、地盤のズレがあると推測される。西端のP8~P10のピットは深く、検出面から52・56cmを測り、本来の深さであろうか。柱穴は円形を呈し、径45~58cmを呈す。

出土遺物は弥生式土器と土師器7片がある。弥生式土器は赤色塗彩の壺、杯片である。P4・P5・P13・P14から出ている。土師器はP3から実測個体の内外面ミガキ・黒色処理された鉢がある。P1からも内面ミガキ外面ヘラケズリの丸底の鉢片が出ている。P13からは口縁部が短く外傾する、和泉型の杯片が出土する。

これらより、本掘立柱建物址はF13号掘立柱建物址より旧く、古墳時代後期の掘立柱建物址と位置づけられよう。

15) F15号掘立柱建物址 (第65図、図版22)

Cけ5グリットにあり、2間×2間の側柱式の掘立柱建物址である。桁行き408cm(南北)、梁行き400cmの方形を呈す。主軸方位はN-3°-Eを指す。調査時に確認できなかったが、ピットセクションからは検出面より40~50cmで、一様に平らな底をなしていることから、地盤のズレがあったものと推測される。柱穴は楕円形ないし円形を呈し、P7を除いて、長径50~66cmを測る。P7は長径94cm短径56cmで柱穴が重なっていた。

出土遺物は弥生式土器、須恵器、土師器片がある。P2から弥生式土器が多く出土し、拓本に示した無彩の壺がある。接合できないが、胴上半部の破片が1/4程ある。頸部は平行沈線の間に斜走の櫛溝文を交互に施文している。須恵器は古墳時代のものでP5から出土し、須恵器杯身の立ち上がり部分である。端部は丸い。土師器は古墳時代の壺の外面ヘラケズリのもの、鉢で内面ナデ、外面ヘラケズリの厚手のものなどある。

これらより本址はほぼ古墳時代後期またはそれ以降と位置づけられよう。

16) F16号掘立柱建物址 (第66図、第39表、図版22・55)

Cく9グリットにあり、M2・M3号溝趾に切れ、H12号住居址、SM3号局溝を切る。5間×4間の側柱式の掘立柱建物址である。桁行き760cm(東西)、梁行き568cmをはかり、本遺跡では最も大きな掘立柱建物址である。主軸方位はN-94°-Eを指す東西棟である。柱穴は地盤のズレのため、2重に検出された。南西方向へ30から40cm上部が移動していた。柱穴は円形を呈し、径51~70cm、柱痕は16cm~24cmを測る。深さは検出面より、深いもので94cmを測る。

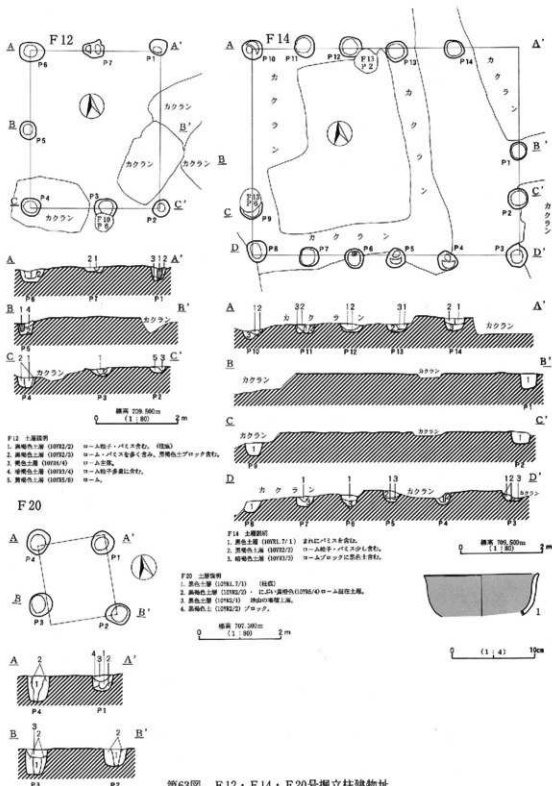
出土遺物は弥生式土器と土師器破片がある。破片は多く、100点ほどである。弥生式土器は拓本に示した櫛溝波状文の壺、頸部に羽状文の無彩の壺、赤色塗彩の壺・杯等がある。土師器は実測はできなかったがP16から丸胴片があり、器内の厚さ9mmの分厚い壺で、外面ミガキ、内面は3mm幅の広いハケ目を残している。また土師器杯で、浅い底部から外縁を持ってやや屈曲して口縁部が外傾外反するものがある。内面ミガキ黒色処理、外面ミガキ調整される。実測個体は土師器小型壺である。他の破片は重複するH12号住居址の土器と類似するものである。

これらより、本掘立柱建物址は古墳時代後期に位置づけられよう。

17) F17号掘立柱建物址 (第65図、図版22)

Hけ3グリットにあり、3間×3間の側柱式の掘立柱建物址である。南西は凍結のため、検出時に耕土とともに削平してしまったようだ。桁行き524cm梁行き388cmを測る。主軸方位N-74°-Eを指す東西棟である。柱穴は円形を呈し、深さ10~20cmを測る。P1からは弥生の無彩煎片。P5から古墳時代土師器片、厚手で外面ヘラケズリされる。P7から弥生赤色塗彩壺が出土している。

これらより本掘立柱建物址は古墳時代後期または以降の時期があてられよう。



第63図 F12・F14・F20号掘立柱建物址

18) F18号掘立柱建物址 (第65図、図版22)

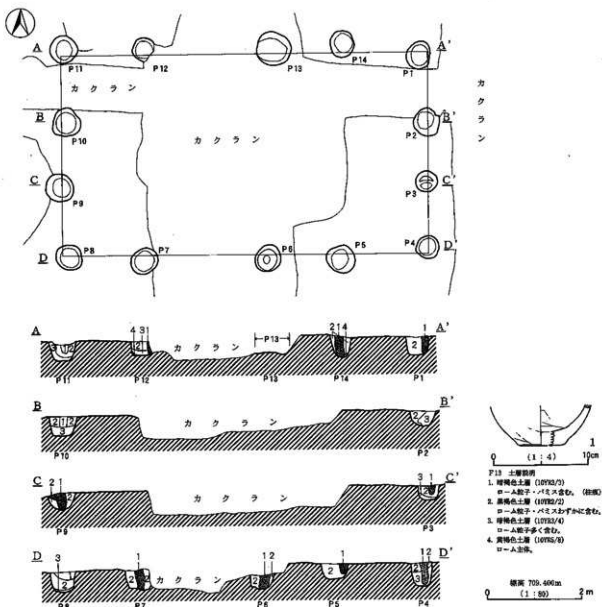
Gえ10グリットあり、M3号溝址に切られる。また南側大半は攪乱ないし既に削平され破壊される。南北に1間東西に2間調査した。東西方向の柱間が長いことからおそらくは東西棟で主軸方位はN-89°-Eを指す。柱穴は円形で、径47~58cm 深さ39~71cmを測る。

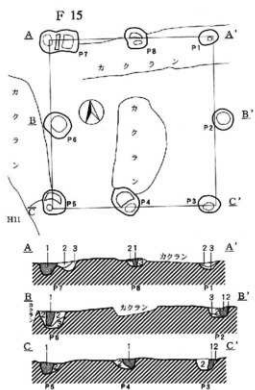
出土遺物には土師器があり、P1からは古墳時代の杯・甕片と平安時代の外面ナデ、内面ミガキ後放射状暗文を施す杯片がある。P3・P4からは古墳時代後期の甕・甎の破片が9点ある。

これらより、本址は平安時代に位置づけられよう。

19) F19号掘立柱建物址 (第69図、第40表、図版23・58)

Iあ9グリットにあり、H25号住居址を切る。3間×3間の欄柱式の掘立柱建物址である。桁行き452cm、梁行き440cmを測り、主軸方位N-101°-Eを測る東西棟である。本址も地盤の移動により、柱穴がズれていた。90~100cm 西方向へ、また南にも10cmズれる。本址では東側上部の覆っているロームを40cm程除いて移動前のピットを検出した。

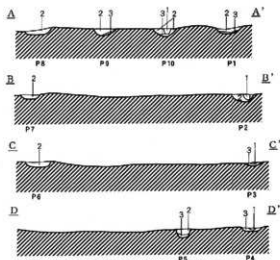
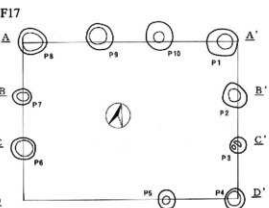
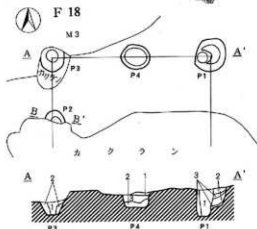




F15 土層説明

1. 黒褐色土層 (10702/2) ローム・パリスを含む。(圧縮)
2. 赤褐色土層 (10702/2) 1層よりローム配子・パリス多く含む。
3. 黒色土層 (10704/0) ローム土層。

標高 719.40m
(1/100) 2m



F17 土層説明

1. 黒褐色土層 (10702/3) (圧縮)
2. 赤褐色土層 (10702/2) ローム・フロック含む。
3. 灰色褐色土層 (10703/0) ローム土層。

標高 710.90m
(1/100) 2m

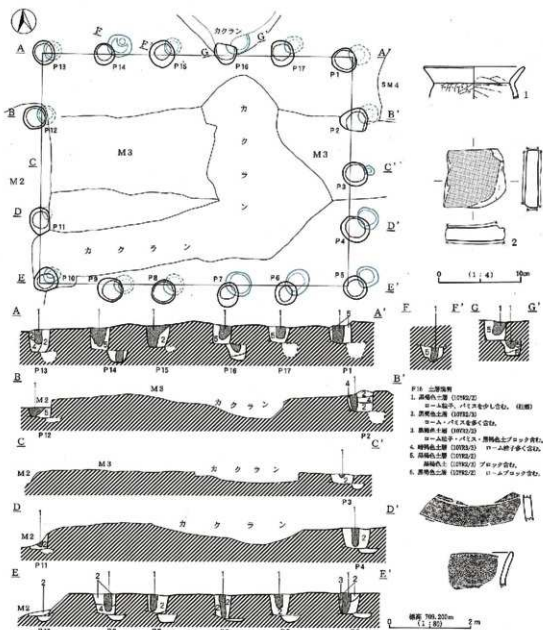
F18 土層説明

1. 黒褐色土層 (10702/3) (圧縮)
2. 赤褐色土層 (10702/2) 1層より腐食強い。
3. 濃い黄褐色土層 (10703/0) ローム土層、黒褐色シブロック含む。



標高 719.70m
(1/100) 2m

第65図 F15・F17・F18号掘立柱建物址

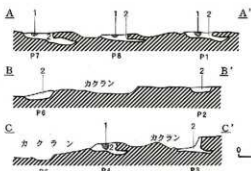
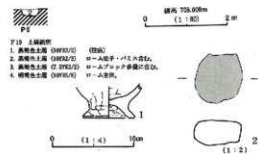
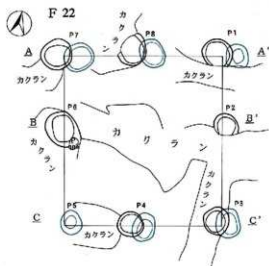
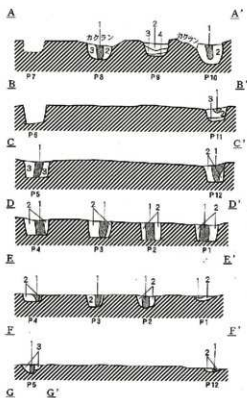
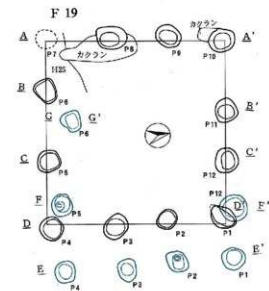


第66図 F 16号掘立柱建物址

たまたま、東側の柱列が検出できたが、ピットの下方はピット覆土も地山に近く判別が困難な上、残っているとは限らないのである。柱穴は円形を呈し、径50~78cm、深さ34~78cmを測る。

出土遺物には古墳時代の土器破片があり、P9・P12より土器のハケ目を残す丸胴片、外面ヘラケズリの長胴片が出土する。

これらより、本址はH25号住居址より新しく、古墳時代後期頃に位置づけられよう。



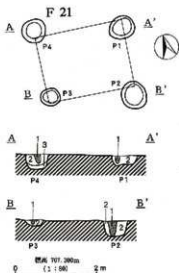
F 22 土層説明
 1. 赤褐色土層 (10W6/3) (B級)
 2. にじみ・汚濁した土層 (10W5/2) ロームブロック層状。

第67図 F 19・F 22号掘立柱建物址

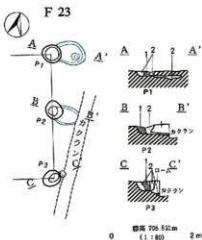
20) F 20号掘立柱建物址 (第63図、図版23)

Kき8グリットにあり、1間×1間の掘立柱建物址である。柱穴の位置がずれるのは地盤のズレの影響であろう。桁行き196cm 梁行き164cmを測り、主軸方位はN-2°-Eを指す。南北方向に長い。柱穴は径56~62cm 深さ39~65cmを測る。柱底は径20cm程を測る。柱底は黒色土である。

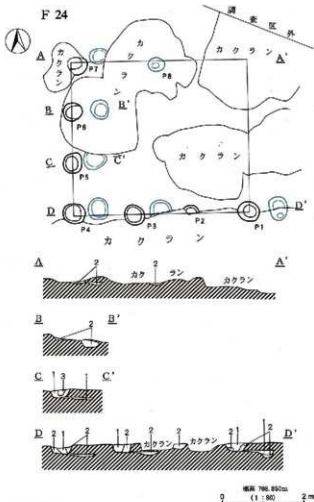
出土遺物はP3から弥生式土器の赤色塗彩壺口縁部片と古墳時代土師器甕の胴部片、P4からは古墳時代土師器甕の頸部片と胴部片がある。土師器甕は口縁部内外ミガキ、胴部外面ナア、胴部内面はミガキ調整される。これらより、本址は古墳時代後期またはそれ以降に位置づけられよう。



- F 21 土層説明
 1. 赤褐色土層 (D192/2) (H26)
 2. 赤色 (H193, 1/1) エプロックと黄褐色 (D193/1) ローム層の上層
 3. 赤色土層 (D193, 1/3)



- F 23 土層説明
 1. 赤褐色土層 (D193/4) (H26)
 2. 赤色土層 (D193/4) ローム層下部・バリス層



- F 24 土層説明
 1. 赤褐色土層 (D192/3) ローム・バリス層
 2. 赤色土層 (D193/4) ローム・エプロック、黄褐色土 (D192/2) エプロック含む
 3. 赤褐色土層 (D192/2) ローム層下部含む

第68図 F 21・F 23・F 24号掘立柱建物址

21) F 21号掘立柱建物址 (第68図、図版23)

クカ8グリットにあり、1間×1間の掘立柱建物址である。桁行き216cm、梁間164cm、をはかり、主軸方位はN-95°-Eを指す。柱穴位置がずれるのは地盤のズレの影響であろう。柱穴は円形を呈し、径47-69cm、深さ15cm-42cmを測る。

出土遺物はP4から古墳時代土師器瓶底部片が1点ある。瓶は1孔で内面ミガキ、外面ヘラナアされる。

これより本址は古墳時代後期またはそれ以降に位置づけられよう。

22) F 22号掘立柱建物址 (第69図、図版24)

Dえ2グリットにあり、H29号住居址を切る。覆乱が全体にはいり、所々破壊される。単P106と重複する。2間×2間の間柱式掘立柱建物址である。桁行き416cm、梁行き386cm、主軸方位N-16°-Wを指す南北棟である。地盤の移動のため、柱穴が西に50cm程ずれていた。柱穴は円形を呈し径64-88cm、深さ24-44cmを測る。

出土遺物はない。

本址の時代は特定できないが、ズレのあること、柱穴の規模の大きいことなどからH29号住居址より新しい古墳時代後期に位置づけられるものであろう。

23) F 23号掘立柱建物址 (第68図、図版24)

Bき9グリットにあり、南北3個の柱穴が検出され、2間の掘立柱建物址である。東側には検出されず、西も宅地で覆乱を受けて検出できなかった。柱穴は地盤の移動で西にずれていた。柱穴は径44-46cm、深さ18-35cmを測る。出土遺物はない。

本址は規模も様式も分からないので時代の特定はできない。

24) F 24号掘立柱建物址 (第68図、図版24)

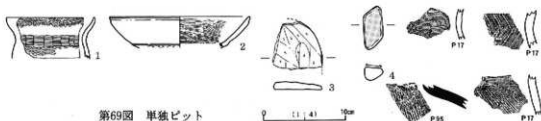
Dお1グリットにあり、覆乱により、大半が壊されている。3間×3間の間柱式で、桁行き423cm、梁行き374cm、主軸方位N-94°-Eを測る東西棟である。地盤のずれにより柱穴が50cm-60cm西にずれていた。柱穴は円形を呈し、径48-53cm、深さ13-35cmを測る。

出土遺物はない。

遺物がないので時代の特定は難しいが、柱穴の規模の大きさや、柱穴のズレなどから古墳時代後期に位置づけられるであろう。

3. 単独ピット

単独ピットは110個検出された。掘立柱建物址群とはほぼ同じ地点に集中している。土器片は弥生式土器後期の赤色変彩壺・杯、櫛指波状文・斜条痕の甕、また古墳時代後期の杯、甕片がみられる。またP17からは弥生後期末-古墳時代初期頃の破片がみられ、重複するEM1の年代資料になるのであろうか。またIく4グリット地点はピットが集中したが、湧水のため遺構であるか水たまり的な自然なものか明確ではないが、古墳時代後期の土器片が出土している。



第69図 単独ピット

第33表 F3号獨立柱建物址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土地位
1	土師器 壺	(18.2) — (4.8)	内 口縁部ミガキ・胴部ヘラケズリ 外 口縁部横ナデ	口縁部1/8残存 内 10YR7/3 (にぶい黄褐色) 外 10YR7/3 (にぶい黄褐色)	1mm以下の石英・長石粒子多く含む。	F3P4

第34表 F4号獨立柱建物址出土遺物一覧表

番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土地位
1	播石	10.8	7.9	4.3	440	安山岩。	

第35表 F9号獨立柱建物址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土地位
1	土師器 鉢	— (9.2) (2.0)	内 ミガキ→黒色処理 外 胴部ミガキ・底部ヘラケズリ	底部1/4残存 内 N2/0 (黒) 外 5YR7/3 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子、2mm以下の赤色粒子少量含む。外出、磨耗。	F9P9

第36表 F10号獨立柱建物址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土地位
1	土師器 壺	(19.6) — (5.4)	内 口縁部横ナデ→胴部ハケナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ハケナデ	口縁部1/6残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR7/6 (橙)	1mm以下の石英・長石、輝石を含む。	F10P8

第37表 F13号獨立柱建物址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土地位
1	土師器 鉢	(5.0) (4.2)	内 ヘラナデ 外 胴部ヘラナデ・底部ヘラケズリ	底部1/4残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	1mm以下の石英・長石、輝石を含む。2mm以下の土器片(?)を含む。	F13P14

第38表 F14号獨立柱建物址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土地位
1	土師器 鉢	(14.0) — (5.0)	内 横ナデ→ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ→ミガキ —黒色処理	口縁部1/8残存 内 N3/0 (暗灰) 外 N3/0 (暗灰)	1mm以下の石英・長石を含む。	F14P3

番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土地位
2	播石	10.8	7.9	4.3	440	安山岩。	

第39表 F16号獨立柱建物址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土地位
1	土師器 小壺	(12.4) — (3.9)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/7残存 内 7.5YR6/3 (にぶい黄褐色) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石、輝石を含む。	F16P15

番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土地位
2	砥石	7.1	7.6	2.0	131	凝灰岩。	

第40表 F19号獨立柱建物址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土地位
1	土師器 台付壺	(6.4) (4.2)	内 肩部ヘラナデ・台部ヘラナデ 外 ヘラナデ	底部1/2残存 内 10YR7/3 (にぶい黄褐色) 外 10YR5/1 (暗灰)	1mmの石英・長石、輝石、角閃石含む。土器片含む。	F19P9

番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土地位
2	磨石	3.0	2.9	1.6	23.1	(粘板岩)	

第41表 単独ビット出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土地位	
1	弥生土器 壺	(11.0) — (4.9)	内 ミガキ 外 口縁部 8本組とする歯指波状文 胴部 8本組とする歯指波状文(一連止め) 胴部 歯指波状文(単位不明)	口縁部1/4残存 内 10YR6/3 (にぶい黄褐色) 外 10YR6/3 (にぶい黄褐色)	1mmの石英・長石粒子を多量含む。 外面胴部、剥離あり。	F14	
2	土師器 杯	(17.2) (11.8) (3.8)	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/6残存 内 N2/0 (黒) 外 7.5YR6/3 (浅黄褐色)	0.5mmの石英・長石粒子、黒色粒子含む。1mm以下の赤色粒子少量含む。	F17	
3	土師器 勺板	(5.8) (6.1) (1.0)	ヘラケズリ	破片 7.5YR7/3 (にぶい黄褐色)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子、赤色粒子含む。	F17	
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土地位
4	磨石	5.2	2.4	1.6	26	断面あり。粘板岩。	

4. 土坑

1) D1号土坑(井戸址)(第70図、第42表、図版24・55)

Bウ6グリットにあり、H6号住居址を切り、北側は区域外で未調査である。円形を呈し南北間200cmを調査した。径300cm、深さ121cmを測る。底部は平らで断面形は逆台形である。覆土の6・7層が井戸枠内であろうか径130cmの筒状に堆積している。また調査中に水が湧いてきた。

出土遺物は土師器がある。土師器は13点あり、そのうち実測個体は杯(1・2)・甕(3・4)である。1の杯は有段口縁の杯で、口縁部中に段を持っている。底部外面ヘラケズリ、口縁部は内外横ナデである。2の杯は小片で器形は明らかではないが、内面ミガキ黒色処理、外面も横ナデ後ミガキ調整される。3の甕は磨耗して調整がよく分らない。口縁は外反する。4の甕は底の厚さが4cmを測る分厚いものである。外面ヘラケズリ、底部には木葉裏が残る。内面はミガキ調整される。

これらより、本址はH6号住居址より新しく、古墳時代後期以降に位置づけられよう。

2) D2号土坑(第70図、図版24)

Cコ2グリットにあり、SM1号周溝址に切られる。隅丸方形を呈し、径88cm、深さ41cmを測る。

出土遺物はない。

形態が方形を呈すので掲載したが、断面から見ると風倒木痕であるかもしれない。

3) D3号土坑(第70図、第43表、図版24・55・58)

Iイ10グリットにあり、H25号住居址を切る。南北にやや長い楕円形を呈す。長軸327cm、短軸272cm、深さ52cmを測る。重複していたため、底面はやや不明確である。

出土遺物には須恵器、土師器、スリ石、石製模造品がある。1の須恵器壺は肩部が張る器形。外面肩部は自然釉がかり、下がりに刺突文、下がったところに回転カキメが施される。内面はナデ調整である。2の土師器杯は杯身模倣で、丸底から上位で外稜を持って屈曲し、口縁部が直立する。外面底部ヘラケズリ、口縁部は内外ヘラケズリされる。H25、3の杯と接合はしながら同個体である。4の石製模造品は滑石製で、長さ3.2cmの剣形模造品で中央に2つ孔が開く。破片では外面ヘラケズリの長胴壺、丸底で内外ミガキ、内面黒色処理の杯がある。

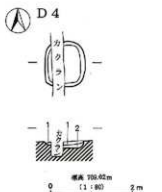
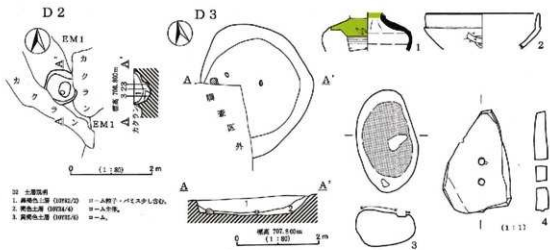
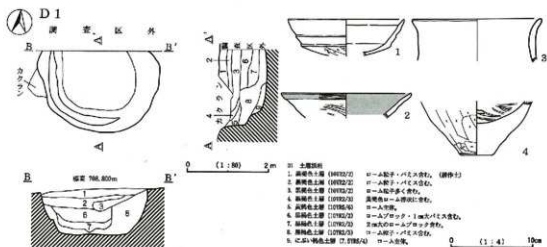
これらより、本址はH25号住居址より新しく、古墳時代後期以降の土坑と位置づけられよう。

第42表 D1号土坑出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器 杯	(14.3) (11.0) (4.4)	内 横ナデ 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/6残存 内 10YR5/2 (灰白) 外 10YR7/2 (灰白)	縦帯。 1mm以下の赤色粒子含む。	下層
2	土師器 杯	(16.0) — (3.0)	内 ミガキ→黒色処理 外 横ナデ→ミガキ・口縁部のみ黒色処理	口縁部1/12残存 内 N1.5/0 (黒) 外 7.5YR5/3 (にぶい壺)	1mm以下の石英・長石粒子多量含む。	D1
3	土師器 壺	(16.0) — (5.3)	内 横ナデ(磨耗している) 外 磨耗著しく判別できない	口縁部1/8残存 内 10YR7/2 (にぶい貴壇) 外 7.5YR7/3 (にぶい壺)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子、赤色粒子含む。 粒子粗い。	D1
4	土師器 壺	— (4.2) (6.6)	内 ミガキ 外 胴部ヘラケズリ・底部木葉裏あり。	底部1/2残存 内 5YR6/2 (灰黒) 外 5YR7/4 (にぶい壺)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。	D1

第43表 D3号土坑出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地	
1	須恵器 長胴壺	— (4.7)	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ・胴中央部にカキメ 肩部先端に刺突痕らしきものが観察できるが、自然釉がかり、わからない。	破片 内 5PB6/1 (青灰) 外 N5/0 (灰) 断 SR5/1 (赤灰)	1mm以下の石英・長石粒子含む。 肩部外面に、自然釉が厚く付着する。	D3	
2	土師器 杯	(14.0) (14.4) (4.4)	内 みこみ部ナデ→口縁部横ナデ 外 底部ヘラケズリ・口縁部横ナデ	口縁部1/8残存 内 10YR7/3 (にぶい貴壇) 外 10YR7/3 (にぶい貴壇)	2mm以下の石英・長石粒子含む。	D3	
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位地
3	磨石	12.5	7.6	4.4	230	軽石。	
4	石製模造品	3.2	2.1	0.4	3.6	(剣形) 滑石製。	



第70図 土坑

4) D4号土坑 (第70図、図版24)

Dか3グリットにあり、H31号住居址を切る。隅丸方形を呈し、長径108cm、深さ17cmを測る。底面は平坦である。

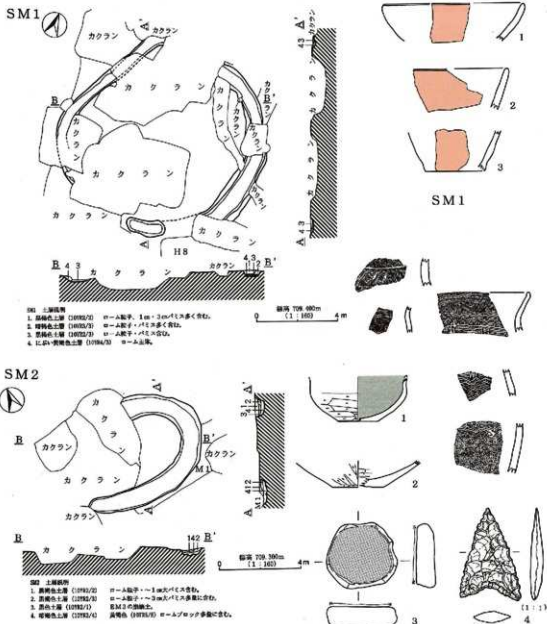
出土遺物は須恵器と土師器がある。須恵器は莞、外面平行タキキ、内面ナテ調整される。土師器は杯底部小片がある。杯片は薄く、外面ヘラケズリ、内面ミガキ調整される。

本址はH31号住居址より新しく古墳時代後期、それ以降である。

5. 周溝址

1) SM1周溝址 (第71回、第44表、図版25・55)

C1グリットにあり、擾乱により多々破壊され、連続する周溝であるか切れる周溝であるかは分からない。形態も東側は円形、西は直線のと地点で異なる。周溝全体で南北976cm 東西958cmを測る。溝の幅は50~134cm 深さは3~39cmを測る。溝の断面は底が平らで逆台形となる。



出土遺物には弥生式土器の無彩・塗彩の壺片、赤色塗彩の鉢・杯片がある。攪乱からは平行沈線に羽状文の頸部片がある。壺の底部片があるが文様のあるものはない。

これらより本周溝は弥生時代後期に位置づけられよう。

2) SM2号周溝址 (第71図、第45表、図版25・58)

Cけ8グリットにあり、M1号溝址に切られ、SM3号周溝址を切る。攪乱により、遺構上面が削平され、北西部の周溝は壊される。西で周溝が切れている。南北510cm、東西660cmを測り、楕円形を呈する。溝の幅は65cm～118cm、深さ5～44cmを測る。溝の底面は平らである。地盤のずれによって本址も中位でずれている可能性もあるが確認できなかった。

出土遺物には弥生式土器、土師器、編物石、石炭がある。弥生式土器は赤色塗彩・無彩の壺を多く含み、検出面からは底径11cm大型の壺底部がでている。赤色塗彩の杯もある。また甕形土器は楕圓波状文・条痕文があり、底部片もある。土師器は壺、杯、高杯の破片等がある。杯は暗文を持ち口縁部が内縁を持って外方に折れる和泉型、浅い底部から口縁が長く外傾し、内外面ミガキ、内面黒色処理杯がある。図示した1の鉢は平底から内湾して立ち上がり、上部で口縁が短く外反する。内面はミガキ黒色処理である。2の壺は外面ヘラケズリ内面ナデである。

これらより、本址は古墳時代後期に位置づけされるとすれば古墳の周溝であろうか。

第44表 SM1号周溝址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	弥生土器 杯	(17.0) (4.6)	内 ミガキ・赤色塗彩 (塗り) 外 ミガキ・赤色塗彩 (塗り)	1/8残存 内 2.5YR4/8 (赤褐色) 外 2.5YR4/8 (赤褐色)	細かい石英・長石粒子含む。	SM1、II区
2	弥生土器 鉢	— (4.8) (7.2)	内 ミガキ・赤色塗彩 (塗り) 外 ミガキ・赤色塗彩 (塗り)	内 2.5YR4/8 (赤褐色) 外 2.5YR4/8 (赤褐色)	細かい石英・長石粒子含む。	SM1、II区
3	弥生土器 壺	— (5.1)	内 ミガキ・赤色塗彩 外 ミガキ・赤色塗彩	内 2.5YR4/8 (赤褐色) 外 2.5YR4/8 (赤褐色)	細かい石英・長石粒子含む。	SM1 カクラン

第45表 SM2号周溝址出土遺物一覧表

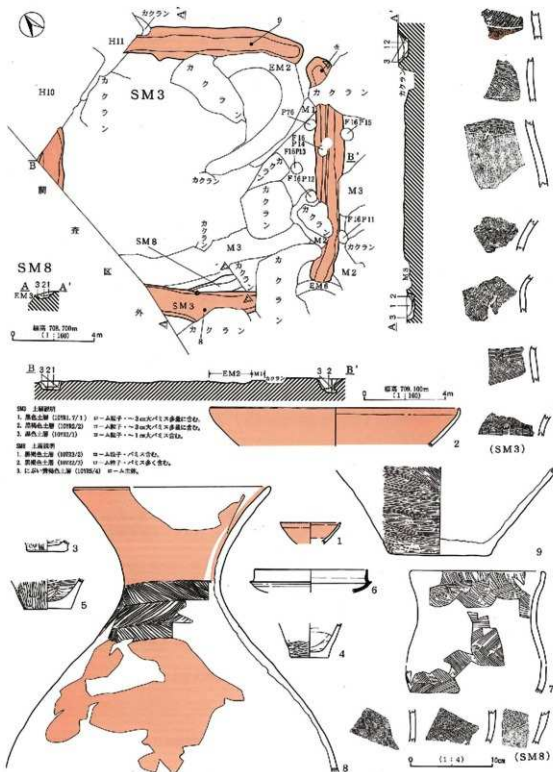
番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地	
1	土師器 鉢	— (4.8) (5.3)	内 ミガキ黒色処理 外 口縁部横ナデ・口縁下部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ	底部1/3残存 内 N4/0 (灰) 外 SYR7/3 (にぶい殺)	石英・長石を含む。	検出	
2	土師器 壺	— (6.2) (3.2)	内 ヘラナデ 外 胴部ヘラケズリ・底部ヘラナデ	底部1/4残存 内 6YR5/2 (灰褐色) 外 10YR7/2 (にぶい貴殺)	石英・長石、土器片(?)を含む。	SM2	
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位地
3	石炭	2.7	1.8	0.4	1.4	黒色蘆安山岩。	III区、検出
4	編物石?	8.8	8.1	2.5	283	楕円あり。安山岩。	I区

3) SM3号周溝址 (第72図、第46表、図版25・55)

Cけ8グリットにあり、南西側は調査区域外で未調査である。H10・H11号住居址、F16号掘立柱建物址、M1・M3号溝址、SM2・SM6号周溝址、単P76に切られる。SM8号周溝址を切る。攪乱が多くあり、各所で破壊される。本址は四隅が切れ、方形を呈する周溝である。南北14m16cm 東西14m90cmを測る。地盤のズレのため、東の周溝はロームが西にせり出している。溝幅は112～162cm、深さ21～71cmを測る。底面は平らで、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物には弥生式土器がある。また攪乱が多いことなどから、土師器・須恵器の混入がある。6の須恵器は杯身で丸底から3mmほど外に受け口を伸ばし、立ち上がりは少し屈曲して、直に立ち上がっている。口縁部は丸い。混入品であろう。弥生式土器は図に示したように、北東隅と、南の周溝中程の周溝上面から、大型の壺が出土している。北東出土の9の壺は無彩の壺胴下部から底部、東の周溝からも無彩の頸部帯摺T字文の壺(図版55参照)が出土する。南の周溝から出土する8の大型の壺は赤色塗彩され、頸部は4本の平行沈線の間に、羽状文を施している。調査区の北東区がI区であるが、1層黒色土中より遺物が最も多く出土している。実測個体の1・2は小型・大型の杯ないし高杯であろう。内外面赤色塗彩される。7の壺は楕圓斜条痕が短く施文されている。

これらより、本址は弥生時代後期に位置づけられよう。



第72図 SM3・SM8号周溝址

第46表 SM3号周溝址出土遺物一覧表

番号	器種	流量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土地
1	弥生土器 杯	(7.4) — (2.6)	内 ミガキ→濃い赤色塗彩 外 ミガキ→濃い赤色塗彩	口縁部1/6残存 内 7.5R4/6 (赤) 外 7.5R4/6 (赤)	石英・輝石、土器片(?)を含む。	I区1層
2	弥生土器 高杯	(30.7) — (4.7)	内 ミガキ→濃い赤色塗彩 外 ミガキ→濃い赤色塗彩	口縁部1/12残存 内 7.5R4/6 (赤) 外 7.5R4/6 (赤)	石英・長石少量含む。	I区1層
3	弥生土器 蓋	— 5.0 外	内 ヘラナダ 外 胴部ハケナダ・ヘラナダ 底部ハケナダ・ヘラナダ	底部完形 内 10YR8/3 (浅黄橙) 外 10YR8/3 (浅黄橙)	石英と長石を含む。	Ⅲ区
4	弥生土器 蓋	— 4.6 (4.1)	内 ハケナダ 外 胴部ハケナダ→底部外周ミガキ・底部ヘラズリ	底部完形 内 10YR6/2 (灰黄褐) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	石英・長石、輝石を含む。	I区1層
5	弥生土器 蓋	— (5.8) 外	内 ミガキ 外 胴部ミガキ・底部ミガキ	底部1/2残存 内 10YR6/1 (褐灰) 外 5YR6/4 (にぶい橙)	石英・長石を含む。	I区1層
6	須恵器 杯	(13.8) — (2.8)	内 ロクロナダ 外 ロクロナダ	口縁部一部残存 内 N7/0 (灰白) 外 N7/0 (灰白)	石英含む。 内面天井部に自然釉付着。	I区1層
7	弥生土器 蓋	(16.7) — (14.9)	内 ミガキ 外 口縁部噴ナダ・胴部ハケナダ 文 口縁部→胴部6本1程とする舞踏模位斜走文(羽状)	口縁部1/4残存 内 10YR7/3 (にぶい黄橙) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	石英・長石を含む。	I区1層
8	弥生土器 蓋	(24.2) — (36.1)	内 口縁部ミガキ→濃い赤色塗彩 胴部刺繍して判別できない 外 口縁部・胴部濃い赤色塗彩 文 胴部にヘラ描羽状文を4条のヘラ描横走平行線文で区切る。	口縁部1/2残存 内 7.5R4/6 (赤) 10YR7/2 (にぶい黄橙) 外 7.5R4/6 (赤) 10YR7/3 (にぶい黄橙)	1mmの石英・長石、輝石を含む。	Ⅲ区、Ⅳ区 M2検出
9	弥生土器 蓋	— 12.6 (10.8)	内 刺繍して判別できない 外 胴部ミガキ・底部ミガキ	底部完形 内 2.5Y8/2 (灰白) 外 7.5Y8/4 (浅黄橙)	石英・長石、輝石、土器片含む。	I区1層

4) SM4号周溝址(第73図、図版25)

C9グリットにあり、M3号溝址、単P65、円正坊IH1号住居址に切られる。周溝全体の1/6程残り、円形を呈する。推定の大きさは直径624cmを測る。溝幅57~88cm深さ7~21cmを測り、断面形はU字形である。

出土遺物はない。

遺物がないので、時期の特定はできないが、IEOIH1号住居址に切られていることから、古墳時代後期より以前の遺構である。

5) SM5号周溝址(第73図、図版25)

Eき2グリットにあり、H13号住居址、単P74に切られる。南は攪乱に破壊される。長さ300cm程残り、円形を呈す。推定直径の大きさは640cmを測り、全体約1/7残る。溝幅46~59cm、深さ6~9cmを測る。断面形はU字形を呈す。

出土遺物には弥生式土器壺片がある。頸部は梅描籬状文の1連止め、胴上部に波状文を施している。

1片の土器では時期の特定はできないが、重複関係から弥生時代後期~古墳時代後期以前の遺構である。

6) SM6号溝址(第73図、図版26)

Dあ10グリットあり、SM3号周溝址を切り、M2号溝址に切られる。残長270cm、円形を呈す。推定の大きさは直径432cm程になり、全体の1/4程を調査している。溝幅42~49cm、深さ9~29cmを測る。断面形はU字形である。

出土遺物はない。

遺物がないので時期の特定はできないがSM3号周溝址より新しく、規模形態などからSM4~6号の円形周溝址と時期が近いものと推定される。

7) SM7号周溝址(第73図、図版26)

C9グリットにあり、M3号溝址に切られ、攪乱に大半を壊される。残長336cmほど、推定直径の大きさは416cmを測り、1/4程を調査した。幅48cm深さ5~27cmを測る。

出土遺物はない。